

る。門頭の楊柳には、船を繋いで居る。又、吳山の有美堂は、月が酒筵を照らして居る。そして夜半の潮聲は、波濤千巖の響を思はしめる。長源が越州から杭州に過つて、夜、有美堂上で酒宴を催した時の聯句に、天日は遠く雙鳳に随つて落ち、海門は遙に兩潮に蹙つて趨るとある。萬人の傳誦する詩である。豈意はんや、此の人が日斜に、壽の長きを得ないことを。昔、賈誼は長沙に至りて居ること三年、其の地は卑濕、自ら以爲らく壽の長きを得ずと。たまたま鴉（楚人は之を鵬といふ）が飛んで賈生の舎に入つて、坐隅に止る。自ら壽の長きを得ざるを傷み、賦を作つて自ら廣めた。忽ち驚く、巳辰の年、今年、歳は辰に在り、明年、歳は巳に在る。既に寤め、讖を以て之を合するに、命の當に終るべきを知つた。鄭玄が夢の故事を用ひたのである。鬱鬱たる佳城（墓の堅固なるを城に譬へる）吾死なば其れ即ち此に安んせんか。佳城一たび閉づ、無窮の事で、南に望み詩を題して、涙は紙牋に灑ぐ。（孔長源が墓志にいふ、初君樂江州之佳山水、買宅將居之、故其子以八年九月葬君於江州之德化縣仁貴鄉龍泉原と。）

寄呂穆仲寺丞
呂穆仲寺丞に寄す

孤山寺下水侵門。孤山寺の下水門を侵し、
每到先看醉墨痕。到る毎に先づ看る醉墨の痕を。

【字解】一 寺丞 舊唐書、職官志に、從第六品上階八、寺丞。宋史に、大理寺丞、光祿寺丞あり。二

楚相未亡談笑是。楚相未だ亡せず談笑是なり、

中郎不見典刑存。中郎見えざるも典刑存す。

君先去踏塵埃陌。君先づ去つて踏む塵埃の陌、

我亦來尋桑棗村。我亦來り尋ぬ桑棗の村。

回首西湖眞一夢。首を回せば西湖は眞に一夢、

灰心霜鬢更休論。灰心霜鬢更に論することを休めよ。

孤山 杭州西湖の上に在り、梅花を以て開ゆ。林逋（和靖）ここに隱居した。三 醉墨 醉筆といふに同じ。歐陽修の詩に、新詩醉墨時一揮。四 楚相未亡云云 楚相は孫叔敖をいふ。亡の字。一本に、忘に作る。史記、滑稽傳に、優孟者、故楚之樂人也、楚相孫叔敖知其賢人也、善待之、病且死、屬其子曰、我死、

汝必貧困、若往見孟孟、言我孫叔敖之子也、居數年、其子窮困負薪、逢孟孟、與言曰、我孫叔敖之子也、優孟曰、若無遠有之所之、即爲孫叔敖衣冠、抵掌談語、歲餘、像孫叔敖、楚王置酒、優孟前爲壽、莊王大驚、以爲叔敖復生也、欲以爲相、優孟曰、請歸與婦計之、三日後、優孟復來、曰、婦言、慎無爲、楚相不足爲也、如孫叔敖之爲楚相、盡忠爲廉以治楚、楚王得孟以霸、今死、其子無立錐之地、貧困負薪、以自飲食、必如孫叔敖、不如此自殺、於是莊王召孫叔敖之子、封之寢丘四百戶、以奉其祀。五 中郎不見典刑存 東坡の自注に、杭有伶人、善學呂舉措、酷似、別後、常令作之、以爲笑。又、後漢、孔融傳に、素與蔡邕善、邕卒、後有虎賁士、貌類邕於邕、融每酒酣、引與同坐曰、雖無老成人、尙有典刑。邕は左中郎將となる。詩、大雅、蕩篇に、殷不用舊、雖無老成人、尙有典刑。六 眞一夢 白樂天が寄三王質夫詩に、舊游疑是夢、往事思如昨。七 灰心霜鬢 唐、裴度が詩に、灰心綠忍事、霜鬢爲論兵。灰心は欲のない靜かな心。

【題義】 此詩も熙寧八年四月の作である。東坡が杭州に倅であつた時、呂穆仲は察推であつた。
【詩意】 杭州の孤山寺は、西湖の上に在つて、寺の下は、湖水が門を侵して居る。寺に到る毎に、先

づ呂君が醉筆の蹟を見る、龍蛇の走るやうである。昔、楚の樂人優孟は、常に談笑を以て諷諫した。楚の相、孫叔敖は、其の賢を知つて善く之を待遇した。孫叔敖が病んで死なんとするとき、其の子に、我が死んだ後は、汝は貧困となるであらう。往いて優孟に見えて、孫叔敖の子だと言へ、と遺言した。後、數年、其子窮困して優孟を尋ねると。優孟は、そなたは遠く之くなくと言つて、其からは、孫叔敖の衣冠を爲し、掌を抵つて談語する。歳餘にして孫叔敖に像る。莊王が酒を置くと、優孟は前んで壽を爲した。莊王は大に驚いて、孫叔敖、復生くるとなし、之を楚の相となさうとした。優孟は、どうか一應妻に相談致したいと、三日の後、復、來つていふ、妻は楚の相などは、爲るに足らない。孫叔敖の楚に相となる、忠を盡し、廉を爲し、以て楚を治め、楚王を霸となしたが、其身死しては、其子は立錐の地もなく、貧困にして薪を負うて自ら飲食する。孫叔敖の如くは自殺した方がよいと言つたと。莊王は孫叔敖の子を召し、之を封じた。又、後漢の孔融は平素、左中郎將蔡邕と仲好しであつた。後、蔡邕に似た虎賁の士(勇士をいふ)があつたので、融は酒酣なる毎に、引いて與に同じく坐していふ、老成なしと雖も、尙は典刑ありと。これは詩經の雖無老成人、尙有典刑を用ひたのである。杭州に伶人があつて、善く呂穆仲の舉措を學んだので、見紛ふ程であつた。東坡は穆仲と別れた後は、常に之を作さしめて笑つたといふことである。前の二つの話によく似て居る。我は呂君と同じく杭州の西湖に在つて、相聚つて愉快に談笑したが、今は呂君先づ去つて京師に往いて、都の塵埃を踏まれる。我も亦來つて密州の守となる。密州は桑や棗の産地である。首を回せば、西湖の舊

遊も、今は眞に一夢である。失意の事に遇つて一向振はない死灰の如き我が心も、霜のやうな我が鬢も、更にかれこれと言はないやうにありたい。

余主簿母挽詞

余主簿の母の挽詞

閨庭蘭玉照鄉閭。閨庭蘭玉郷閭を照す、
自昔雖貧樂有餘。昔より貧しと雖も樂み餘あり。
豈獨家人在中饋。豈獨り家人中饋に在るのみならんや、
却因麟趾識關雎。却つて麟趾に因つて關雎を識る。
雲軒忽已歸僊府。雲軒忽ち已に僊府に歸し、
喬木依然擁舊廬。喬木依然として舊廬を擁す。
忍把還鄉千斛淚。把るに忍ぶ郷に還る千斛の涙、
一時灑向老萊裾。一時灑いで老萊の裾に向ふ。

中饋一易、家人無攸遂、在中饋、貞吉。婦人は柔順を以て常となし、自我を遂ぐる所なし。職とする所は、家庭に在つて、飲食を調へ、祭祀に供するに在る。中饋は、室中に在つて饋食を主る義。【六】因麟趾識關雎。毛詩の小序に、麟之趾、關雎之應也。

【字解】主簿 漢官儀に、

主簿、掌縣之簿書。事物紀原に、後漢始有主簿之號、諸郡置之、即今錄事參軍也。【三】閨庭 家庭といふに同じ。北史、鄧道邕傳に、撫調諸弟、閨庭之中、怡怡如也。【四】蘭玉 晉書、謝玄傳に、叔父安、嘗曰、子弟亦何豫人事、而正欲使其佳、玄曰、譬如芝蘭玉樹、欲使其生於庭階爾。【五】郷閭 郷里に同じ。閨は里の門。唐書に、王恭好篤學、教授郷里子弟數百人。【六】家人在中饋

【七】雲駢 駢は婦人の乗る牛車。裴矧封陟傳奇に、雲駢既去、塵戶遺芬。【八】僊府 唐、高適の玉真公主歌に、仙宮仙府有眞仙。唐、元結（字は次山）の望仙府詩に、彼仙府兮深且幽、望一至兮貌無由。【九】喬木 高、木。詩、小雅に出、自幽谷遷喬木。【一〇】舊廬 合注にいふ、孔子息鄴操二復我舊廬と。【一一】還鄉千斛淚 白樂天の舟夜贈内詩に、三聲猿後垂鄉淚。【一二】老萊裾 晉の皇甫謐の高士傳に、老萊子は楚の人、孝にして親を養ふ。行年七十二、父母猶ほ存す。萊子、身に五色の斑爛の衣を服し、嬰兒の戯を親の前に爲し、言、老を稱しない。親の爲に食を取り、堂に上り、詐り跌いて地に臥し、因つて兒啼を爲し、親の喜ばんことを欲した。

【題義】余主簿の母を弔らつた詩である。王文誥いふ、密州余簿、蜀人、公以三其子之賢、及其母也、惜不可不知其詳一矣と。

【詩意】晉の謝安が嘗て子弟を誡めていふ、斯様に小言をいふのは、別におれの爲になる譯でもない。謝玄は、直に譬へば芝蘭玉樹のやうなもので、成るべく自分の庭階に生せしめようとすするものであると言つた。家庭に秀才のあるは、郷里の誇である。昔から、すべて道を好むものは、貧しくても、其樂みが十分である。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂に堪へないが、顔回は其の樂みを改めなかつた。家庭の樂みは、家人飲食の間のみではない。賢子の多いのが何よりである。詩經の關雎の詩は、好い嫁を娶るをいひ、麟趾の詩は、好い子供が出来て、文王の家の繁昌するをいふ。即ち振振たる公子、ああ麟で、文王の子供が立派であつて、麒麟同様に威儀容貌も優れ、德行も具はつて居るをいふのである。賢子の多いに因つて賢母の徳を知る。密州の余主簿の母は立派であつたが、今は其の乗つた雲駢も、既に僊府に歸した。（余主簿の母の亡くなつたことをいふ。）ただ喬木は、昔ながらに、

舊廬を擁して居る。思へば郷涙千石、把るに忍びんや。一時に老萊子の裾に向つて垂れる。老萊子は七十二の高齡に達しても、父母なほ存命であつた。萊子は五色の斑爛の衣を服して、嬰兒の戯をなし、地に臥して兒啼をなした。（此詩は此故事を用ひて、懷舊の涙が我が衣を沾ほすをいつたのである。）

送趙寺丞寄陳海州

趙寺丞を送りて陳海州に寄す

景疏樓上喚蛾眉

景疏樓上に蛾眉を喚び、

君到應先誦此詩

君到らば應に先づ此詩を誦せしむべし。

若見孟公投轄飲

若し孟公の轄を投じて飲むを見れば、

莫忘衝雪送君時

忘るる莫れ雪を衝いて君を送る時を。

【字解】一、寺丞 宋史に、大理寺丞・光祿寺丞などあり。前に出づ。二、景疏樓 海州即ち東海郡は、疏廣受の郷里で、景疏樓がある。漢書、疏廣爲太子太傅、兄子受爲少傅、廣謂受曰、吾聞、知不足辱、知止不殆、功遂身退、天之道也、即日父子移病、上疏乞骸骨去、道路觀者、皆曰、賢哉二大夫、或歎息爲之泣下。【三】蛾眉 眉が蠶のやうに細長く曲つて居る、美人の眉に喩ふ。詩、衛風碩人篇に、螓首蛾眉。【四】孟公投轄 孟公は陳遵の字。投轄は、客を抑留するの切なるをいふ。漢書、遊俠傳に、陳遵每三大飲、輒關門、取客車轄投井中、雖有急、終不得去、嘗有部刺史、奏事、過遵、值其方飲、刺史大窮、候遵齎醉時、突入見遵母、叩首白當對尙書、有二期會、狀母乃令從後閣出去。【五】衝雪 杜子美の詩に、北歸衝雨雪。

【題義】此詩は熙寧八年十一月の作、趙晦之が東武縣令を罷めて、漣水縣に歸るを送り、兼ねて陳海州に寄せたのである。漣水縣は江蘇淮揚道に屬する。

【詩意】 海州は漢の疏廣・疏受の郷里で、有名な景疏樓がある。言ふまでもなく、二疏を慕つて建てた樓である。君が到ると定めし樓上に螭首蛾眉（美人の額と眉）の美人を喚び集め、前に題した景疏樓の詩を誦せしめることであらう。漢の陳孟公は、客を好み、會飲する毎に、客の車轄（車のクサビ）を以て井中に投げ、急用があつても、去ることを得ざらしめたが、君も若し轄を投じて客を抑留するの切なるに遇はば、雨雪を衝いて君を送つた時を忘れてはならない。

答陳述古二首 陳述古に答ふ二首

漫說山東第二州。漫に説ふ山東の第二州、

棗林桑泊負春游。棗林桑泊春游に負く。

城西亦有紅千葉。城西亦紅千葉あり、

人老簪花却自羞。人老い簪花却つて自ら羞づ。

先生自ら其の密州をいふ。輿地廣記に、京東東路望青州一上密州。九域志に、淳化五年、改青州爲鎮海軍、開寶五年、升密州爲安化軍。【一】棗林 庾信の詩に、空花植棗林。【二】桑泊 合注にいふ桑泊二字、見徐爰釋問篇。【三】紅千葉 開元遺事に、明皇御花、千葉桃、帝折一枝花插於妃子寶髻二日、此花亦能助嬌。

【題義】 此詩は陳述古が杭州に知事であつた時、東坡に寄せた詩に答へたのである。

【字解】 【一】陳述古 陳襄、字

は述古、風節凜然、青苗法の不便を論ず。王安石、之を思ひ、出でて陳州に知となり、杭州に徙る。嘗て契丹に使して屈せず。學者、古靈先生と稱す。前に出づ。【二】山東第二州

【詩意】 京東東路に、青州・密州を望む所から、漫にいふ、山東の第二州と、第二州は密州をいふのである。密州の棗林や桑泊に春が來たが、まだ出遊を試みない。城西も亦紅千葉であるが、人老いて、花を髮に挿すのも羞かしい。（東坡が在杭の詩に、人老簪花不自羞の句があるから、此にかくいつたのである。）

小桃破萼未勝春。小桃破萼未だ春に勝へず、

羅綺叢中第一人。羅綺叢中第一の人。

聞道使君歸去後。聞道らく使君歸り去る後、

舞衫歌扇總成塵。舞衫歌扇總て塵を成す。

【字解】 【一】破萼 文選、謝靈運酬惠連詩に、山桃發紅萼、野蕨漸紫苞。【二】未勝春 春に勝へられない風情。李太白の詩に、菱歌清唱不勝春。【三】羅綺 魏志、夏侯尚傳に、皆得服綾錦羅綺純素

金銀飾鏤之物。【四】第一人 李太白の詩に、漢宮誰第一。【五】聞道使君歸去後 王安石の桃源行に、聞道長安吹戰塵、春風回首泪沾巾。本集に、送述古遊三元素、訴衷情詞一首がある。述古の杭を去るは、東坡が未だ密州に赴かない前に在る。使君は刺史、述古を指す。【六】舞衫歌扇 樂府、徐陵雜曲に、舞衫迴袖勝春風、歌扇當應似秋月。東坡の自注に、陳有「小妓、述古稱之。紀昀いふ、注、陳有、疑當作「杭有」と。【七】成塵 文選、劉越石の答盧諶詩に、澄醪覆觴、絲竹生塵。

【詩意】 春風が柳を吹いて、緑は絲の如く、晴れた日は、紅を蒸して小桃を出すといふが、小桃が紅を發いたので、却つて春に勝へられない風情がある。そして綾錦羅綺の中に、解語の第一人がある。聞けば使君陳述古が歸り去つてからは、この杭州小妓の舞衫も歌扇も、すべて塵を生じたといふこと

【餘錄】韓退之が桃源の詩に、種桃處處惟開花、川源遠近蒸紅霞と。王安石は、此句を用ひていふ、春風過柳絲如絲、晴日蒸紅出小桃と。

張安道樂全堂

列子御風殊不惡、列子風に御し殊に悪しからざるも、猶被莊生譏數數、猶ほ莊生に數數たるを譏らる。步兵飲酒中散琴、歩兵は酒を飲み中散は琴、於此得全非至樂、此に於て全きを得るは至樂にあらず。樂全居士全於天、樂全居士天を全うし、維摩丈室空翛然、維摩丈室空しく翛然。平生痛飲今不飲、平生痛飲すれども今飲まず、無琴不獨琴無絃、琴なし獨り琴に絃なきのみならず。我公天與英雄表、我公は天與英雄の表、

【字解】(一)張安道 宋の張安平、字は安道、蜀に守たりし時、蘇洵、其の子軾、轍を得、深く之を異とし、晩に知を神宗に受く。王安石、方に事を用ふ、巍然として少しも屈しなかつた。卒して文定と諡す。

(二)列子御風云云 莊子、逍遙遊に、列子御風而行、冷然善也、旬有五日而後反、彼於致福者、未數數也。數數は猶ほ汲汲と言はんが如し。(三)步兵飲酒 晉、阮籍傳に、籍本有濟世志、屬魏、晉之際、天下多故、名士少有全者、由是不與世事、

龍章鳳姿照魚鳥、龍章鳳姿魚鳥を照す。

但令端委坐廟堂、但端委して廟堂に坐せしむ、

北狄西戎談笑了、北狄西戎談笑了る。

如今老去苦思歸、如今老い去つて苦ろに歸るを思ひ、

小字親書寄我詩、小字親書我に詩を寄す。

試問樂全全底事、試みに問ふ樂み全きは底事を全うする。

無全何處更相虧、全きなきに何れの處か更に相虧かん。

至樂無樂、至樂無譽。【六】全於天 莊子、達生篇に、得全於酒、而猶若是、而況得全於天乎。本集の張文定墓誌に、晚自號樂全居士、有樂全集四十卷、公性與道合、得佛老之妙。【七】維摩丈室 維摩嘗て此室中に病む。佛、文殊師利を使として見舞はしむ。維摩爲に其の病む所以の理を説き、且つ隨從諸菩薩の爲に、其の小室に、三萬二千の師子座を設け、不思議を示せりといふ。維摩經に、長者維摩詰心念、文殊師利與大眾俱來、即以神力空其室內、除去所有、惟置一床。又いふ、舍利佛來見此室中、無有牀坐、維摩現神通力、須彌燈王遣三萬二千師子座來入維摩方丈室。【八】翛然 莊子、大宗師に、翛然而往、翛然而來。【九】痛飲 劇飲といふに同じ。世説、任誕に、王孝伯曰、但使常無事、痛飲酒、熟讀離騷、便可稱名士。杜子美が贈李太白詩に、痛飲狂歌空度日。陶淵明が止酒詩に、平生不止酒、止酒情無喜。【一〇】無絃 晉の陶淵明は、素琴一張を蓄ふるも、絃も微も具へない。朋酒の會毎に、則ち撫でて之を和して曰く、但識琴中趣、何勞絃上聲と。【一一】天與英雄 天與は天賦といふに同じ。世説に、魏武將見匈奴使、自以形陋不足雄遠國、使崔季珪代、帝自捉刀立牀頭、既畢、令問牒問曰、魏王何如、匈奴使答曰、魏王雅望非常、然牀頭捉刀人、此乃英雄也。【一二】龍章鳳姿 晉、嵇康傳に、康美詞氣、有風儀、而士多形骸、不爲自藻飾、人以爲龍章鳳

姿、天質自然。【三】端委、左傳、哀公七年に、吳太伯端委以治吳。國語に、晉侯端委以入。注にいふ、諸侯祭服也。晉の謝鯤傳に、明帝在東宮、問曰、論者以君方庾亮、自謂何如、答曰、端委廟堂、使百僚準則、鯤不如亮、一邱一壑、自謂過之。【四】談笑了、杜子美の詩に、談笑無河北。同じく洗兵馬に、二三豪俊爲時出、整頓乾坤一濟時了。【五】老去、杜子美の詩に、老去新詩誰與傳。【六】無全云云、莊子、繕性篇に、樂全之謂得志、古之所謂得志者、非軒冕之謂也、謂無以益其樂而已矣。軒冕は軒車冕服。

【題義】此詩は熙寧八年四月の作である。紀昀いふ、接法入化と。又いふ、著二頓挫、方不直致と。又いふ、結處稍嫌偈頌氣と。張方平が自ら樂全堂に題する詩に、樂全得意在莊書、靜閱流光一樂有餘、四句幻泡明般若、一篇力命信沖虛、心閒自覺浮雲薄、才拙誠知與世疎、只此空名漫兒戲、何王城闕不坵墟とある。

【詩意】かの列子を見よ、風に乗じて虚空を行き、冷然（飄然といふに同じ）として軽く擧る。善しと稱する所以である。併し、風を待ちて、其の力を恃む。莊周に數數（汲汲）などといふ言葉を用ひられて、譏られて居る。魏・晉の際は、天下多事で、名士の全きを得るものがなかつた。それで阮籍は、世事に與からないで、常に酣飲をする。步兵厨營に、善く酒を醸す人があつて、酒三百斛を貯へて居ると聞いて、步兵校尉とならんことを求めたといふ話がある。又、同時の嵇康は、魏の宗室と婚して、中散大夫に拜された。平生、琴を弾じ、詩を詠じ、山濤に書を與へ、濁酒一杯、彈琴一曲、志意畢ると言つた。故に庾信が詩にも、步兵未飲酒、中散未彈琴、蕭索として眞氣なく、昏昏として俗心ありとある。阮籍の酒、嵇康の琴、かの世間の汲汲として身を修め、以て福利を求めるものに比べ

と、遙に間がある。併し、全きを此に得るは、至樂ではない。更に世俗の爲す所と、其の樂しむ所とは、我は其の果して樂しきや否やを知らない。要するに至樂は無樂に在り、至譽は無譽に在る。世俗の人、孰が無樂の樂、無譽の譽を知らうぞ。張安道は道と合し、天を全うして、晩に樂全居士と號す。維摩、方丈の室に、儻然として往き、儻然として來る。嘗て、阮籍のやうに痛飲したが、今は飲まない。陶淵明は無絃の琴を撫でて、但、琴中の趣を識る、何ぞ絃上の聲を勞せんと言つたが、我には初から琴がない、獨り琴に絃の無いばかりではない。我が公は、天質英雄の表で、所謂龍章鳳姿、魚鳥を照して居る。廟堂に祭服して、百僚をして準則せしめるので、北狄も西戎も事なく、談笑して了る。今では老い去つて、苦ろに歸るを思ひ、小字を以て親書を我に致して、新詩を寄せらる。試みに問ふ、樂全きといふは、一體、何事を全うするのである。全きなきに、何れの處か更に相虧かうとするのである。莊子は樂全之謂得志と言つたが、己を正うして、物が自から正しくなる、初より物を正すことを求めない。かかる者を以て樂とするときは、樂む所が、自ら全くなる、之を得心といふ。得心とは我に足つて、更に其の樂を益すことのない謂である。

張文裕挽詞

張文裕の挽詞

高才本出朝廷右、高才本朝廷の右に出づ、

古今體詩 張文裕挽詞

【字解】 張文裕 名は張、

能事方推德業餘。能事方に推す徳業の餘。
 每見便聞曹植句。見ゆる毎に便ち聞く曹植の句、
 至今傳寶魏華書。今に至るまで傳へて寶とす魏華の書。
 濟南名士新凋喪。濟南の名士新たに凋喪、
 劍外生祠已潔除。劍外の生祠已に潔除。
 欲寄西風兩行淚。西風兩行の涙を寄せんと欲す、
 依然喬木鄭公廬。依然喬木鄭公の廬。

益都縣に知たり。中丞苑諷(字は補之)其の材を薦め、萊州掖縣に知たらしむ。民、早を州に訴ふ、州、受けず。文裕、自ら、奏を爲りて、之を上る。詔して登萊稅役に除せらる。官、龍圖直學士、戸部侍郎を歴、熙寧三年八月致仕し、同じく七年九月卒す、年八十。【二】挽詞。輓歌と同じ。前に出づ。【三】高才。後漢書、賈逵傳に、諸生高才者二十人。

また、奇偉高才、武略有魏尚之風。【四】出朝廷右。前漢、晁錯の對策に、漢廷臣無出其右、遂爲第一。漢、田叔傳に、上召見與語、漢廷臣無能出其右者。【五】能事。周易、繫辭に、引而伸之、觸類而長之、天下之能事畢矣。また、可久則賢人之徳、可大則賢人之業。【六】徳業。後漢書に、大尉徳業相繼。【七】曹植句。三國、魏の陳思王植、字は子建、善く文を屬す。七步の敏あり。鍾嶸、嘗て、其詩を評して曰く、植詩原出於國風、其氣骨高奇、詞采華茂、情兼雅怨、體備文質、然超逸今古、卓爾不羣。杜子美の詩に、文章曹植波瀾闊。【八】魏華書。魏華は王徽之の外孫で、草隸書を善くす。王注に、魏華、河南人、善書、其字如楮河南、(楮遂良)而用筆開闊、有豆盧公神道碑、見於世。唐書、魏徵傳に、子叔瑜善草隸、以三筆意傳其子華及甥薛稷、(河東の人)世稱善書者、前有虞、褚、後有薛、魏。【九】濟南名士。杜子美の宴屋下亭詩に、海内此亭古、濟南名士多。【一〇】凋喪。陸機の詩に、舊齒皆凋喪。【一一】生祠。生存中に、神として祭る爲に立てた祠。漢書、子定國傳に、父子公爲縣吏、決獄平、郡中爲之立生祠、曰子公祠。【一二】西風兩行淚。白樂天の寄劉蘇州詩に、何堪老淚交流日、正是西風搖落時。杜子美の寄杜位詩に、封書兩行淚、霑灑新詩。【一三】鄭公廬。後漢、鄭玄傳に、孔融深敬於玄、告高密縣、爲玄特立一鄉、曰、昔、齊置士鄉、越有君子軍、皆異賢之意、鄭君好學、實懷明德、今鄭君鄉、宜曰鄭公鄉、廣開二門、爲令容高車、號爲通徳門。

【題義】張文裕を傷む詞である。文裕は、幼い時分から篤孝であつた。宋史に、幼時割股療父疾、後與三兄揆廬墓云云。故に詩に能事方推徳業餘とある。文裕は齊州、歷城の人、故に詩にいふ、濟南名士新凋喪と。益都は劍南に在つて、文裕に惠政あつたから、故にいふ、劍外生祠已潔除と。子由も亦、挽詞がある。鑾城集、張文裕侍郎の挽詞に、持節西南二十年、華堂遺像已蒼然、歸來侍從三朝舊、老去雍容平地仙、落筆縱橫題壁處、誦詩清壯舉杯前、東游邂逅迎歸旆、淚落城南下馬阡とある。

【詩意】張文裕の高才は、堂堂たる朝廷の臣も、よく其右に出づるものがない。其の道德事業の餘、能事多く方に推奨すべきである。見ゆる毎に、其の曹子建の如き波瀾の闊い文章を聞くのは喜ばしい。(張文裕の詩、多くは見ない。ただ王昶が金石粹編に、宋興慶池禊宴詩を載す。又、石刻中に、秘書丞通判軍府事張揆五言六韻律詩一首がある。其の詩を能くしたことが知れやう。)又、書をも善くし、其の魏華の如き筆勢は、今に至るまで世に傳へて寶として居る。文裕は濟南の人、濟南には名士が多かつたが、今は多く凋謝(人の死をいふ)してしまつた。又、文裕は嘗て、益都縣に知事となつて、惠政が多かつた。益都は劍外に在る。縣の民は文裕の惠政を感謝し、爲に生祠を立て、生存中に神として祭る。其の生祠も、既に潔除(みそぎして祭る)して、西風搖落の時、兩行の涙を寄せんとする。仰げば高い木は、依然として鄭公の廬ともいふべき張文裕の家を覆うて居る。昔、孔裕は深く鄭玄を敬し、高密縣に告げ、玄の爲に特に一郷を立て、鄭公郷と名けたが、之を借り用ひたのである。

懷西湖寄晁美叔同年

西湖を懷うて晁美叔同年に寄す

西湖天下景。游者無愚賢。
 淺深隨所得。誰能識其全。
 嗟我本狂直。早爲世所捐。
 獨專山水樂。付與寧非天。
 三百六十寺。幽尋遂窮年。
 所至得其妙。心知口難傳。
 至今清夜夢。耳目餘芳鮮。
 君持使者節。風采燦雲煙。
 清流與碧巘。安肯爲君妍。
 胡不屏騎從。暫借僧榻眠。
 讀我壁間詩。清涼洗煩煎。
 策杖無道路。直造意所便。
 應逢古漁父。葦間自延緣。

西湖は天下の景、遊ぶもの愚賢となく、
 淺深得る所に隨ふ、誰か能く其の全きを識るさん。
 嗟我は本狂直、早く世の爲に捐てられ、
 獨り山水の樂みを専らにす、付與寧ろ天にあらずや。
 三百六十の寺、幽尋遂に年を窮む。
 至る所其の妙を得、心に知つて口傳へ難し。
 今に至つて清夜の夢、耳目芳鮮を餘す。
 君使者の節を持し、風采雲煙を燦かす。
 清流と碧巘と、安んぞ肯て君の爲に妍せんや。
 胡ぞ騎從を屏け、暫く僧榻を借りて眠り、
 我が壁間の詩を讀んで、清涼煩煎を洗ひ、
 杖を策いて道路なく、直ちに造意の便する所のままに
 應に古の漁父の、葦間に自ら延縁するに逢ふべし。

問道若有得。買魚勿論錢。

道を問うて若得ることあらば、魚を買うて錢を論ずる勿れ。

【字解】【一】晁美叔 名は端彦、時に提點兩浙刑獄置司杭州たり。(宋の時、提點刑獄・提點官觀等の官がある。紹聖の間、祕書少監となり、陝州に知となり、改めて潭州に知となる。其の子、説之、字は以道も、後、亦東坡に従つて遊ぶ。【二】同年 唐國史補に、俱捷、謂之同年。捷は及第の義。前に出づ。【三】狂直 淵源録に、張戢争新法、章數十上、王安石以扇掩面而笑、戢曰、戢之狂直、宜爲參政之所、吹天下之人、笑參政、亦不尠矣。【四】付與 杜子美の詩に、付與後世傳。【五】三百六十寺 數多い寺をいふ。田汝成、游覽志録に、杭州三百六十行、各有市語。行は職業をいふ。【六】幽尋 杜子美の詩に、幽尋豈一路、遠色有諸嶺。王維の詩に、韓侯久拂手、河嶽共幽尋。【七】窮年 荀子、榮辱篇に、人欲夫餘財蓄積之富也、然而窮年累世、不知知足。【八】清夜 魏文帝の詩に、清夜延貴客、明燭發高光。歐陽公、饋陽園の詩に、至今清夜夢、猶憶北潭北。【九】芳鮮 新しい魚。傳毅の七激に、酌旨酒、割芳鮮。【一〇】使者節 漢書、張耳傳に、上使泄公持節問之。高帝紀に、自稱使者、晨馳入、張耳韓信壁。【一一】風采 漢、霍光傳に、天下想聞其風采。【一二】碧巘 江淹の賦に、登崎嶇之碧巘。【一三】屏騎從 歐陽永叔の游石子澗詩に、使君厭騎從、車馬留山前。【一四】僧榻 榻は狭く長く低い牀。【一五】洗煩煎 洗煩煎といふに同じ。范成大の詩に、夜雨洗煩煎。【一六】造意所便 梁書、刑法志に、先言謂之造意。梁書に、幼童未必自能造意。杜子美の江外草堂詩に、臥牀遣所便。【一七】漁父葦間自延緣 莊子、漁父篇に、孔子游於緇帷之林、休坐乎杏壇之上、有漁父者、顧見孔子、還鄉而立、乃刺船而去、延緣葦間、(延緣は、從容として舟に棹す貌)顔淵還車、子路授綬、孔子不顧、待水波定、不聞擊音、而後敢乘、孔子曰、道之所在、聖人尊之、今、漁父之於道、可謂有矣。【一八】買魚勿論錢 南史、隱逸傳に、漁父不知姓名、孫綸爲尋陽太守、見一輕舟凌波隱顯、俄而漁父至、神韻蕭灑、垂綸長嘯、綸甚異之、乃問有魚賣乎、答曰、其釣非釣、寧賣魚者耶。杜子美の詩に、白魚如切玉、朱橘不論錢。

【題義】此詩は熙寧八年、四月の作。杭州西湖を懷うて、同年に及第した晁端彦に寄せたのである。
 續通鑑長編に、熙寧七年五月、晁端彦徙兩浙提點刑獄とある。紀昀いふ、即次山、莫道車馬來、使

我鳥獸驚一意、說來太直致、便似三尊已凌人。

【詩意】西湖は天下の絶勝で、其の孤山は、林和靖の隠遁した處、平湖秋月・蘇堤春曉・斷橋殘雪・雷峯落照・南屏晚鐘・麴院風荷・花港觀魚・柳浪聞鶯・三潭印月・兩峯插雲の十景がある。遊覽するものが常に絶えたことなく、愚なものも賢いものも、或は浅く、或は深く、各得る所に隨ふのである。誰か能く其の全きを識るものぞ。(王文誥いふ、四句、確是西湖定評、而讀此集、亦然、正當借以評公集也と。)嗟我本、狂直であるから、早く世に捐てられ、獨り山水の樂みを專にした。斯様な境遇に置かれたのは、寧ろ天命ではないか。杭州の三百六十寺、幽尋すれば、一路ではない。遠い色は空を彩つて、諸峯が見える。かくて、遊覽に年を窮めた我は、至る所に、其の妙處を得た。妙處は固より心に知つて、之を口には傳へ難いのである。今に至るも清夜の夢は、猶ほ湖上を遠り、旨酒も芳鮮も、耳目に餘つて居る。君は使者の節を持ちて、其の堂堂たる風采は、雲煙を爍かすがやうである。清流も碧巖(巖はけはしい山)も、肯て君の爲に麗はしくするといふのでもなからう。なせ、君は騎從のものをば屏け、暫し僧榻に臥して眠り、壁間に掛けてある詩でも讀んで、清涼味を取り、煩煎を洗ひ、杖を策くも、必ずしも道路に由らなく、直ちに心に思ひ浮べるがままにしないのであるか。さうすれば、かの葦間に從容として舟に棹した古の漁父に逢ふこともあらう。孔子は嘗て緇帷の林に遊び、杏壇の上に憩うた。弟子は書を読み、孔子は絃歌する。時に漁父があつて、船を下り來る。子貢や子路と對話し、ああ道を去ること遠いかなと言つて還つた。孔子は之を追つて澤畔に至り、再拜して起ちて曰く、

今日、丘の夫子に遇へるは、天幸と謂ふべきである。漁父曰く、與に往くべきものは、之と與に妙道に至るべきも、與に往くべからざるものは、之に就くも、其道を知らないから、慎みて之と與にするな。我は子を去らうと、船に棹して去り、葦間に延縁し、水波が定まつて、舟の去ること遠いといふ話がある。道を問うて、若し得ることがあれば、魚を買つて、錢を論ずるな。

和梅戸曹會獵鐵溝

梅戸曹が鐵溝に會獵するに和す

山西從古說三三、
誰信儒冠也捍城、
竿上鯨鯢猶未掩、
草中狐兔不須驚、
東州趙叟飲無敵、
南國梅僊詩有聲、
不向如臯間射雉、
歸來何以得卿卿、

古今體詩 和梅戸曹會獵鐵溝

【字解】(一) 戶曹 民戸を主る屬官。漢は公府に戶曹掾あり州郡は史と爲す。唐は諸府を戶曹といひ、餘を司戸といふ。(二) 會獵 魏武帝遣孫權書に、與諸軍會獵於吳。(三) 三三 後漢、段熲傳に、熲字は紀明、初、孝廉に擧げられ、皇甫威明・張然明と並に名を知られて顯達す。京師稱して涼州の三三となす。贊に曰く、山西多猛、三三僊蹤。(四) 儒冠 漢の酈食其傳に、

諸客冠儒冠來者、沛公輒解其冠、溺其中。杜子美が贈韋左丞詩に、孰袴不餓死、儒冠多誤身。【五】捍城詩、周南に、越越武夫、公侯干城、傳にいふ、干、扞也。左氏は干城を以て扞城となす。【六】鯨鯢左傳、宣公十二年に、古者、明王伐三不敬、取其鯨鯢而封之、以爲大戮、於是乎有京觀、以懲淫慝。京觀は尸を積みて、其上に高く土を盛るをいふ。耳塚の類。【七】草中狐兔云、杜子美の冬狩行に、草中狐兔盡何益、天子不在咸陽宮。【八】東州趙使云云左傳、宣公十二年に、逢大夫與其二子乘、謂其二子曰、無顧、顧曰、趙使在後。【九】南國梅僊漢、梅福傳に、梅福、字は子真、九江壽春の人、南昌尉に補せらる。一朝妻子を棄てて、行く所を知らず。後、吳市の門卒に隱る。今に至るまで、人以て仙となす。【一〇】如臯間射雉左傳、昭公二十八年に、賈大夫惡、娶妻而美、三年不言不笑、御以如臯射雉、獲之、其妻、始笑而言。【一一】卿卿妻から夫を呼ぶ辭。世説、或溺篇に、王安豐婦、常卿安豐、安豐曰、婦人卿卿、於禮爲不敬、後勿復爾、婦曰、親卿愛卿、是以卿卿、我不卿卿、誰當卿卿、遂恆聽之。

【題義】此詩は梅戸曹が鐵溝に會獵した時の作を和したのである。東坡の自注にいふ、近臯數盜と。又いふ、是日惟梅趙不射と。

【詩意】山西は昔から猛士が多く、後漢の世に、段紀明・皇甫威明・張然明の三人、竝に名を知られて顯達した。之を涼州の三明と稱する。漢の高祖は、儒を好まず。儒冠を冠して來たものは、其の冠を解いて、其の中に溺したと傳へて居る。又、杜子美も儒冠多く身を誤まると言つた。誰か信せん儒冠するものも、亦、三明のやうに城を捍ぐことを。昔は明王が不敬の罪を伐つて、其の惡人の巨魁を討ち取り、之を埋めて、其上に土を盛つて、大なる誅戮をなしたといふ表に京觀といふものを作つて、天下後世の惡人を懲らしたさうである。近頃、此地で數盜を梟したが、梟された竿上の巨魁は、猶ほ未だ土に掩はない。従つて草中の狐兔も、驚くことがない。會獵すると、獲物は多いであらう。晉の趙旃は、敗軍のとき、其の所持の良馬二頭を以て其の兄と叔父とを濟うて逃がしやり、自分は他の馬を以て反らうとした所、途中で敵と出會つた。馬が鈍くて、車の進みが遅いので、車馬を棄てて、徒歩立となり、林の中に逃げ込んだ。其時に逢(氏)大夫と、其の二子とは、車に乗つて居たが、大夫は二子の命を救ひたいままにいふやう、決して後を振り向くな、振り向くと、助からないと言ひつつ趙旃の危急なことを知らぬいふりして走らうとした。然るに其の二子は、父の此の言葉を聽かないで、後を向き、趙使(使は年上のものを尊ぶとなへ)が徒歩立になつて御坐ると言ひけるにぞ、其父は怒つて、今は是迄なり、趙使を棄て置き難いとて、其二子を車から下し、傍らの木を指し、汝等の戸を此の木の下で拾ふであらうとて、趙旃を車へ乗せて免れしめた。翌日、例の木を表に二子の戸を求めた所、果して重つた二戸を木の下に見出した。敵に會はなかつたといふ此の故事を借りて東州の趙使は飲むに敵なしと用ひたのである。南昌尉梅福は、妻子を棄てて、行く所を知らず、後、仙となつたと傳へて居るが、其の梅仙は詩名がある。梅戸曹に比したのである。昔、賈國の大夫は、容貌は悪く、妻を娶つたが、其の妻は美人なので、夫を嫌ひ、三年の間、物も言はず、笑もしなかつた。或日、賈大夫は妻と馬車に御して臯澤へ如き、自ら雉一羽を射止めた。妻は始めて口を開いて笑ひ、夫に言葉を交はした。賈大夫のいふやう、才之不三以己、我不能射、女遂不言不笑と。此度の會獵に向つて臯に如いて間に雉を射ないなら、何を以て家に歸つて、妻からの親みの言葉即ち卿卿を得ようぞ。

(卿卿といふのは、卿を親み卿を愛す、是を以て卿を卿とす。我、卿を卿とせざれば、誰か當に卿を卿とすべきといふのである。)

【餘録】清、陸錫熊(字は健男、耳山と號す)いふ、王聿觀林詩話、嘗見東坡手寫會獵詩云、向不_二如_レ阜間射_レ雉、何以得_二卿卿、世本作_二不向、特未嘗見_二寫本_一耳と。

祭常山回小獵 常山を祭つて回り小獵す

青蓋前頭點皂旗。青蓋前頭皂旗を點じ、
黃茅岡下出長圍。黃茅岡下長圍を出づ。
弄風驕馬跑空立。風を弄して驕馬跑いて空しく立ち、
趁兔蒼鷹掠地飛。兔を趁うて蒼鷹地を掠めて飛ぶ。
回望白雲生翠巘。回望すれば白雲翠巘に生じ、
歸來紅葉滿征衣。歸り來れば紅葉征衣に滿つ。
聖明若用西涼簿。聖明若し西涼簿を用ひば、
白羽猶能效一揮。白羽猶ほ能く一揮を效さん。

【字解】一、常山 浙江、常山

縣の東、三十里に在る。唐、此を以て縣に名づく。一に長山に作る。絶頂に湖あり、故に亦、湖山といふ。輿地紀勝に、即古信安嶺也。二、青蓋 青蓋車は、青色の覆ある車、古天子又は皇太子の乗用。吳志に、三嗣主寡に、青蓋入洛陽。後漢、董卓傳に、乘金華青蓋。三、皂旗 黒繪の旗。紀昀いふ、旗當作旂と。皂は俗字。四、長圍 南史に、侯

景作長圍圍梁。宋書に、魏主就賊質求酒、封洩便與之、魏主怒、築長圍、一夕便合。杜牧之の東兵詩に、漸見長圍雲欲合。

【五】跑 あがくと訓す。足の爪で土をひき掻く。廣韻に、跑、足跑地也と見ゆ。白樂天の渭村退居詩に、廐馬騎初跑。【六】蒼鷹 羽毛の蒼白色を帯びた鷹、戰國策に、蒼鷹擊于殿上。【七】掠地 劉禹錫の白鷹詩に、輕抛一點入雲去、喝殺三聲掠地來、綠玉臂攢雞腦破、元金爪擊兎心開。【八】征衣 旅衣に同じ。唐、許渾(字は仲晦)の詩に、朝來有鄉信、猶自寄征衣。【九】聖明 天子を稱する敬語。元の陸都刺(字は天錫)の詩に、小臣涓滴皆君賜、惟有丹心答聖明。【一〇】用西涼簿 晉、張重華傳に、重華據西涼、用主簿謝艾爲將軍、進軍臨河、麻秋以三萬衆距之、艾乘輅車、一馬に駕する輕い車。冠白帽、鳴鼓而行、秋望而怒曰、艾年少書生、冠服如此、輕我也、命黑稍龍驤三千人馳擊之、左右大擾、艾乃下車、蹕胡牀、指麾處分、賊以爲伏兵發、懼不敢進、艾乘勝、奔擊大敗之。【一一】白羽猶能效一揮 晉、顧榮傳に、顧榮與周玘等、潛謀起兵攻敏、榮發橋斂舟於南岸、敏率萬餘人、出不獲濟、榮應以白羽扇、其衆潰散。

【題義】此詩は、東坡が密州に知たりし時、常山を祭つて回り、同官と射を習ひ鷹を放ちて、本州小廳の上に題したもので、王注に熙寧八年作とある。紀昀いふ、寫得興致と。

【詩意】常山を祭つて回るとき、同官と小獵を試みた。其の時のことをいふと、青蓋車の前頭には、黒繪の旗を點じ、黃茅岡の下で、長圍をなした。それは獲物を多くしようとしたからである。驕れる馬は、風を弄して跑き、空しく立つて居り、蒼鷹は兔を趁ひ、地を掠めて飛んで居る。回望すれば、白雲は翠巘(巘はけはしい山)に生じ、歸つて見ると、紅葉が旅衣に満ちて居る。聖明、もし西涼の主簿謝艾を用ひなば、白羽扇を以て一揮を効して戦功を立てることであらう。謝艾は、本、書生ではあるが、能く兵を用ひた。故に東坡も以て自ら比し、若し我を用ひて將としたならば、亦、決して謝

艾には減じないと信ずる。(結句は鮑明遠が詩の留我一白羽、將以分虎竹の意がある。故に専ら顧榮の事を用ひたのではない。)

和章七出守湖州二首

章七出でて湖州に守たるに和す 二首

方丈僊人出淼茫

方丈の僊人淼茫に出づ、

高情猶愛水雲郷

高情猶は愛す水雲の郷

功名誰使連三捷

功名誰か三捷を連ねしむる、

身世何縁得兩忘

身世何に縁つて兩忘を得ん。

早歲歸休心共在

早歲にして歸休心共に在り、

他年相見話偏長

他年相見ば話は偏へに長からん。

只應未報君恩重

只應に未だ君恩の重きに報いざるべし、

清夢時時到玉堂

清夢は時時玉堂に到らん。

【字解】(一) 章七 章惇。字は

子厚、建州浦城の人。(七は兄弟排行) 父兪、蘇州に徙る。子厚は豪雋、

善く文を屬し、書札は古人を追ふ。

再び甲科に擧げられ、商洛の令に調せらる。三司使を以て、出でて湖州

に知たり。(二) 湖州 今の浙江、

吳興縣は、其の舊治。唐の時、州を置き、元は路に改め、明は府となし、

清は之に因り、民國は廢す。(三)

方丈僊人 史記、封禪書に、蓬萊方丈瀛州、此三神山者、相傳在渤海

中。(四) 淼茫 水の廣廣とした貌。郭璞の江賦に、滔天淼茫。(五) 高情 謝靈運の詩に、達人貴自我、高情屬天運。(六) 三捷 詩、小雅、采芣に、一月三捷。三は數の多きをいふ。(七) 兩忘 莊子、大宗師に、不若如兩忘而化其道。白樂天の詩に、性與

時相遠、海將世兩忘。(八) 早歲 東坡の詩に、早歲便懷齊物志。(九) 歸休 陶淵明の斜川の詩に、開歲侯五十、吾生行歸休(一〇) 只應 一本に只因に作る。(一一) 玉堂 漢、揚雄傳に、歷金門一上玉堂有日矣。文選、班孟堅が西部賦に、神仙長年、金華玉堂、李宗諤の翰苑雜記に、太宗皇帝御書、飛白玉堂之署四字、淳化三年賜、今在本院玉堂門上。

【題義】熙寧八年十月、章子厚は、出でて湖州に知となる。詩を作りて東坡に寄せ、東坡の和韻したのが、此詩である。吳興備志に、惇嘗以詩寄東坡、坡用其韻和之、子厚得詩、不樂數日。杳初白いふ、五六淡語似樂天、亦似牧之一也。

【詩意】方丈神山の仙人は、水天渺茫たる處から見はれ出づる。故に其の高情は、猶ほ水雲の郷を愛するのである。此起句に就いて、宋の王明清が揮塵餘話に、

章兪者、(章惇の父) 郇公之族子、不自拘檢、妻之母楊氏、年少而寡、兪與之通、生子、楊氏以一盒貯水、絨置其內、遣人持以還兪、兪以兒五行甚佳、雇乳者、謹視之、既長、登第、與東坡締交、後送其守湖州詩、有方丈仙人出淼茫、以爲譏己、由是怨之、紹聖初、東坡渡海、蓋修報也、所謂燕國夫人墓、獨處而無附者、即楊氏也云云。

と見えて居る。王文誥はいふ、公如知有三其事、惟當憐惇之不幸、何忍揭其所生、且公陷臺獄、惇力解之、公謫黃州、惇力勸之、凡此皆可明惇之心、不得以元祐國是爲讎、而牽涉之上也、此乃元符以後、受惇害者、特揚其醜、借公爲播傳地耳、惇父子固不足惜、但公自海外還、聞惇謫雷、驚歎彌日、

且囑黃師是、開慰其母、以是知必無此心矣云云。
 功名誰か戦捷を連ねしめる。莊子は是非の間に、其の心を勞せんよりは、是非兩ながら忘れて、道に化し自然に任せんには如かずと言つたが、身世、何に縁つてか兩忘を得ようぞ。若い時分から歸休の心は、君も我も共にある。故に他日、相見ば、談話は偏へに長いことであらう。只、應に未だ重い君の恩に報いることが出来なかるべく、そして、清い夢は時時金門を歴て玉堂に至ることであらう。

絳闕雲臺總有名。

絳闕雲臺總て名あり、

應須極貴又長生。

應に須らく貴きを極め又長く生くべし。

鼎中龍虎黃金賤。

鼎中の龍虎黃金賤しく、

松下龜蛇綠骨輕。

松下の龜蛇綠骨輕し。

雲水未渾纓可濯。

雲水未だ渾らず纓濯ふべし、

弁峰初見眼應明。

弁峰初めて見ば眼應に明かなるべし。

兩卮春酒眞堪羨。

兩卮の春酒眞に羨むに堪へたり、

獨占人間分外榮。

獨り占む人間分外の榮。

金丹之術、有日魄・月魄・白虎・青龍・真鉛・正汞・蓋五行強名耳。施注に、歌云、寶鼎存金虎、元田養日鶴、今考寶鼎二句、乃韓淵言

【字解】絳闕、闕、傅玄の西都賦に、巍巍絳闕、續仙傳に、謝自然入海至一山、遇道士、曰、天台司馬承禎、身居赤城、名在絳闕、真良師也。【二】雲臺、後漢、朱景等傳贊に、顯宗追感前世功臣、圖畫二十八將於南宮雲臺。【三】極貴又長生、王注に、清虛真人裴君內傳に、道人支子元相、君曰、子日中珠子、正似北斗瑤光星、既有貴爵、又當神仙。【四】鼎中龍虎云云、王注に、

志歌也。韓淵は韓退之の姪孫。退之は之に學を勉めしむ。淵曰く、吾が學ぶ所は、公の知る所にあらずと。退之、其の意を言はしめると、詩を爲りて曰く、青山雲水窟、此地是吾家、後夜流瓊液、凌晨咀絳霞、琴彈碧玉調、爐養白朱砂、寶鼎存金虎、元田養日鶴、一瓢藏世界、三尺斬妖邪、酌造逡巡酒、能開頃刻花、有人能學我、同去看仙葩。【五】綠骨輕、東坡の自注に、君好爐火、而餌茯苓。【六】雲水、輿地志に、雲溪在湖州府城、雲者、以衆流合集爲義、凡四水、曰苕溪、前溪、餘不溪及北流水、通謂之雲溪。一日、四水蕩激時、雲然有聲、故名。【七】弁峰、寰宇記に、弁山在烏程縣、一名下山、山石瑩然如玉。施注に、張元云、吳興山城名下山、峻極、非清秋爽月、不見其頂。周處風土記に、下山當作冠弁之弁。【八】眼應明、韓退之の過襄陽城一詩に、穎水嵩山刮眼明。【九】兩卮春酒云云、詩、國風に、爲此春酒、以介眉壽。時に子厚二親恙なし、故にいふ。卮酒は杯に注いだ酒。【一〇】分外榮、杜子美、柴門詩に、賞妍又分外、理懷夫何誇。

【詩意】晉の傅玄は、海に入つて一山に至る。道士いふ、身は赤城に在り、名は絳闕に在ると。又、後漢の顯宗は、前世の功臣を南宮の雲臺に圖畫した。絳闕や雲臺は、巍巍としてすべて名がある。之に對しては、人須らく貴を極め、又、長生を思ふべきで、既に貴爵があり、又神仙を望む。青山雲水の窟は、是れ我が家、金丹と仙藥を煉るは、是れ我が事である。鼎中に黄金の龍虎を存して、黄金賤しく、爐火薪を加へて綠骨が輕い。湖州雲溪の水は、まだ渾らないから、冠の纓を濯ふべく、烏程縣の弁峯は峻を極めて、清秋爽月でなければ、頂が見えないが、今は目を刮して、分明である。童子厚君には兩親が健在で、兩卮の春酒、眉壽を祝するは、眞に羨ましい。君は人間分外の榮を獨占されて居ると謂つてもよろしい。

【餘錄】丁未録に、章惇擧進士甲科、王安石用事、李承之薦惇可用、安石召見之、惇素辨、又、

善迎合、安石大喜、數年遂至三侍從三司使、上嘗譽張方平之美、以問惇、惇以告呂惠卿、故御史蔡承禧彈惇云、朝登陛下之門、暮入惠卿之室、爲此也、上由是惡惇、安石亦仇惠卿、黜之、陳州中丞鄧綰言、惇人物佻薄、行跡醜穢、與惠協濟爲奸、宜早罷斥、遂自權三司使、出知湖州とある。章子厚は好んで出世間法を論ず、故に詩中多く學仙事を用ふ。施注に據ると、東坡の意は、陽羨に卜居せんと欲す。子厚詩を寄せていふ、君方陽羨卜新居、我亦吳門葺舊廬、身外浮雲輕土直、(肥料にするあくた)眼前陳迹付籬籬、(竹席)澗聲山色蒼雲上、花影溪光罨畫餘、(罨畫は彩色したる繪)他日扁舟約來往、共將詩酒狎樵漁と。是時、子厚之二親は恙なし、故に兩卮春酒真堪羨、獨占人間分外榮の句がある。王文誥いふ、施注有東坡既買田陽羨、子厚在湖州寄詩二句、謬甚、買田、乃元豐七年事、彼何由於熙寧中知之、且公買田之日、惇在政府、不在湖州、亦非吳門葺舊廬時也、惇詩所指者、卽惠泉山下土如濡、陽羨溪頭米勝珠一首、公作此詩時、惇在京東、亦不在湖州、其葺廬之事、既無所考、則作詩之地、亦無由知之、且此詩、自熙寧七年後、無時不可作、不必實其處也云云と。

次韻劉貢父李公擇見寄二首

劉貢父・李公擇寄せらるるに次韻す 二一首

白髮相望兩故人。

白髮相望む兩故人、

眼看時事幾番新。

眼に見る時事幾番新なるを。

曲無和者應思郢。

曲和するものなし應に郢を思ふべし、

論少卑之且借秦。

論は少しく之を卑うして且く秦を借る。

歲惡詩人無好語。

歲惡くして詩人好語なし。

夜長鰥守向誰親。

夜長く鰥守誰に向つて親まん。

少思多睡無如我。

思ふこと少なく睡ること多きは我に如し

鼻息雷鳴撼四隣。

鼻息雷鳴して四隣を撼かす。くはなし、

【三】幾番 李建勳(字は致堯)の採菊詩に、簇簇竟相鮮、一枝開幾番。【四】曲無和者云云 宋玉の對楚王問に、客有歌於郢中者、其始曰下里巴人、國中屬而和者數千人、其爲陽阿薳露、屬而和者數百人、其爲陽春白雪、屬而和者數十人、引商刻羽、雜以三流徵、屬而和者不過數人、其曲彌高、其和彌寡。【五】論少卑之云云 漢、張釋之傳に、釋之言便宜事、文帝曰、卑之、毋甚高論、令今可行、於是言秦漢間事。漢、賈山傳に、言治亂之道、借秦爲喻、名曰至言。【六】歲惡 越絕書に、陽入深者、則歲惡。東坡の自注に、公擇來詩、皆道吳中饑苦之事。【七】好語 李賀の詩に、沙路歸來聞好語、早火不光天下雨。【八】鰥守 老いて妻なきを鰥といふ。東坡の自注に、貢父近喪妻。【九】少思多睡 孫綽、褚哀碑に、少思寡慾。

【題義】此詩は熙寧八年六月の作である。李公擇の詩を寄せた時、尙ほ未だ湖を離れなかつたから、

古今體詩 次韻劉貢父李公擇見寄二首

【字解】(一)劉貢父 劉敞、字

は貢父。司馬光と同じく資治通鑑を修む。官、中書舍人に至る。公非集あり。敞、初、王安石と甚だ相得、安石、政を執るに及び、屹として肯て附かなかつた。前に出づ。【二】李公擇 李常、字は公擇。王安石の新法を立つる、公擇、其の不便を極言す。哲宗の時、累に御史中丞に拜せらる。公擇、少うして書を盧山白石僧舎に讀む。後、抄する所の書萬卷を室に留め、李氏山房と名く。

詩中に吳中の飢苦をいふ。東坡の此詩を作つた時、劉放は曹州の任にあつた。年譜を按ずるに、熙寧八年和李公擇來字韻詩と見え、紀年録にも、八年六月、和李公擇詩とある。皆、劉貢父の一首に及んで居ない。王文誥いふ、和刘貢父詩、亦八年所作、無疑と。紀昀は、前詩を評して、三四、宋調之不佳者と。後詩を評して、四句太質と。

【詩意】劉貢父と李公擇との兩故人は、共に白髪となつて、相對する。果して如何なる感慨がある。(王文誥いふ、劉・李總起と。)眼に見る時事は幾たびも新になる。昔、客が郢中に歌ふ、其曲がいよいよ高くなると、屬いで和するものが、いよいよ寡かつたといふことである。今、我が曲に和するものがないので、應に郢中を思ふべきである。漢の張釋之は便宜の事を言つた時、文帝曰く、之を卑うせよ、甚だしく高論するなど。釋之は是に於て秦漢間の事を言つたといふことである。同じく漢の賈山も亦、治亂の道を言ふに、秦を借りて喩となしたのである。歲惡しくして、吳中は飢苦が多いから、詩人に好語がない。夜長うして鰥居の此の身は、誰に向つて親まう。少しく思ひ、多く睡るは、我に及ぶものはない。鼻息は雷の如く鳴つて、四隣を撼かした。(撼はゆすり動かす意である。査初白いふ、蘇軾和刘放詩に、白髮相望兩故人、眼看時事幾番新は、以て朝廷近日新法を更立して、事尤も多きを譏諷したのであると。)

何人勸我此間來。

何人か我に勸めて此の間に來らしむる、

【字解】【一】絃管生衣 王羲之

絃管生衣 甌有埃。

絃管衣を生じ甌に埃あり。

綠蟻沾脣 無百斛。

綠蟻脣を沾して百斛なく、

蝗蟲撲面 已三回。

蝗蟲面を撲ちて已に三回。

磨刀入谷 追窮寇。

刀を磨して谷に入りて窮寇を追ひ、

灑涕循城 拾棄孩。

涕を灑ぎ城を循りて棄孩を拾ふ。

爲郡鮮歡 君莫歎。

郡を爲むる歡鮮し君歎くこと莫れ、

猶勝塵土 走章臺。

猶ほ塵土の章臺に走るに勝る。

蘭亭記に、絲竹管絃之盛。王維の詩に、人家在仙掌、雲氣欲生衣。【二】甌有埃 後漢、范冉(一名は丹)傳に、冉、字史雲、所止單陋、有時絕粒、閭里歌之曰、甌中生塵范史雲、釜中生魚范萊蕪、桓帝時爲萊蕪長。【三】綠蟻 文選、謝玄暉の詩に、嘉飭聊可薦、綠蟻方獨持。嘉飭は良い魚、綠蟻は酒。【四】沾脣 史記、秦始皇紀後贊に、太史公曰、餐未及下咽、酒未及濡脣。

【五】蝗蟲撲面云云 東坡、密州に赴き、始めて境に入る。民の蒿蔓を以て蝗蟲を裏んで之を瘞むるを見る。道左に壘壘として相望むもの二百餘里。蓋し是に至つて蝗を捕ふること已に三次。【六】追窮寇 兵法に、窮寇勿追。王文誥いふ、公論河北東盜賊二狀云、比年以來、蝗旱相仍、盜賊漸熾。又、與三文寬夫書云、備員偏州、民事甚簡、但風俗武悍、特好強劫、加以比歲薦饑、饑饉薦に臻る、椎剽之姦、殆無虛日、自軾至此、明立遺賞、隨獲隨給、人用競勸、盜亦斂跡。【七】拾棄孩 本集、與朱壽昌書に、軾向在密州、過饑年、民多棄子、因盤量勸誘、米得三出、割數百石、別儲之、專以收養棄兒、月給六斗、比赤年、養者與兒、皆有父母之愛、遂不失所、所活亦數千人。此條は、乃ち此句の本事。別本に棄骸に作るは誤。【八】鮮歡 文選、陸士衡の苦寒行に、慘愴常鮮歡。【九】走章臺 漢、張敞傳に、敞守京兆尹、稱職、然無威儀、時罷朝會、過走馬章臺街。

【詩意】誰が我に勸めて、此の間に來らしめたのか、絲竹管絃の盛なる、宛ら舞衣を生じようとする。

併し其の一面には、粒食を絶つものもあつて、釜中に魚を生じ、甑（炊器）の中に塵を生ずる貧者もある。綠蟻（美酒の異名）の杯は屑を沾して、酔うて陶然たる一面には、貯米百斛とない有様であるのに、蝗蟲が面を撲つて、其の害に堪へない。而も之を退治すること已に三回に及んで居る。比年、蝗害と早魃とで、盜賊が漸く横行する。刀を磨いて山谷に入り、窮寇を追ふこともある。又、饑饉の年の常として、民が多く其の子を棄てる。涕を灑いで、城を循りて棄てた孩兒を拾ふことがある。まことに、郡を爲めて居ても歡が鮮ない。併し君よ歎くことなけれ、猶ほ馬を塵土の章臺街に走らせるに勝つて居るではないか。（要するに此詩は、蝗蟲・盜賊・災傷・饑饉の苦を言ひ、以て朝廷政事の缺失を譏り、及び新法不便の致す所を警告したのである。）

和張子野見寄三絕句

張子野寄せらるる三絕句に和す

過舊遊

舊遊に過る

前生我已到杭州。前生我已到杭州に到る、
到處長如到舊遊。到處長舊遊に到るが如し。
更欲洞霄爲隱吏。更に洞霄に隱吏と爲つて、
一庵閒地且相留。一庵閒地に且く相留まらんと欲す。

【字解】（一）張子野 張先、字は子野。烏程の人。詩格清麗、尤も樂府に長ず。雲破月來花弄影、浮萍斷處見山影、隔牆送過秋千影の句があつたので、時に張三影と號す。（二）前生云云 前生は、現世のま

への世。東坡の答錢塘主簿陳師仲書にいふ、一歲率常四五夢、至西湖上、此殆世俗所謂前緣者在杭州、嘗遊壽聖院、入門便悟曾到、能言其院後堂殿山石處と。故に詩中に、前生已到の語がある。（三）洞霄 宮の名、杭州圖經に、洞霄宮、在餘杭縣西南十八里、唐大曆五年、建爲天柱觀、祥符元年、改今額。（四）隱吏 杜子美の送裴氏二詩に、隱吏逢梅福。（五）閒地 白居易の詩に、閒宮在閒地、賈島の詩に、堦前多是竹、閒地擬栽松。

【題義】張子野の寄せられた詩に和したのである。王文誥いふ、自此題後、無復與子野唱和上矣と。

【詩意】首を回らせば、前の世、我は已に杭州に到つたのである。今も一歲、率ね四五度は、夢に西湖の上に至るが常である。前縁が杭州にあるからであらう。嘗て壽聖院に游んで、門に入つて、便ち曾到を悟つた。故に此詩に前生我已到杭州と言つたのであらう。到る處、何時も舊遊に到る思ひがある。更に洞霄宮に閉ぢ籠つて、一隱吏となつて、一庵を結び、閒な地に且らく相留まつて居たいものである。

見題壁

壁に題するを見る

狂吟跌宕無風雅。狂吟跌宕として風雅なし、
醉墨淋漓不整齊。醉墨淋漓として整齊ならず。
應爲詩人一回顧。應に詩人の一たび回顧する爲なるべし、

【字解】（一）狂吟 白樂天の詩に、狂吟一千字。（二）跌宕 ほしいままに檢束がない。蜀志の簡雍傳に、性簡傲跌宕、滑稽諷諫。（三）

山僧未忍掃黃泥。山僧未だ黄泥を掃ふに忍びず。

風雅。文選、序に、風雅之道、粲然可觀。晉康論に、採詩觀禮、以別

風雅。【四】醉墨淋漓。歐陽修の詩に、新詩醉墨時一揮。楊億の詩に、圓荷清曉露淋漓。

【五】整齊。史記、貨殖傳に、其次整齊之

【六】未忍掃黃泥。王注にいふ、此乃隨手便遭黃土掃、癡心更望碧紗籠之意と。施注にいふ、小説有富家子杜四郎、嘗戲爲三詩、草、號三杜荀鴨、以比三荀鶴、每有詩、即題三屋壁、親賓或汗三墁之、即云、三十年來塵撲面、如今始得三秋泥。秋は鉄の屬。

【詩意】狂吟して屋壁に題する。題する所の詩は、跌宕（ほしいままに、しまりが無い）で風雅に乏しい。醉墨一揮して、したたるがやうであるが、字體が少しも整齊して居ない。併し他日、まさるに詩人の一たび回顧せんが爲でもあらうか、山僧は未だ黄泥を掃ふに忍びないやうである。昔、富家の子に杜四郎といふ人があつた。嘗て、戲に詩草を爲つて杜荀鴨と號け、唐の杜荀鶴（字は彦元、九華山人と號す）に比した。荀鶴は官、翰林學士知制誥に至り、其の詩律は、自ら一家を成して居る。荀鴨は一詩ある毎に之を屋壁に題した。すると親戚や賓客が或は之を墁で塗る。荀鴨は即ちいふ、三十年來塵撲面、如今始得三秋泥と。此詩の結句は此の故事に據つたのである。

竹閣見憶

竹閣憶はる

柏堂南畔竹如雲。

柏堂南畔竹雲の如し、

此閣何人是主人。

此閣何人か是れ主人。

【字解】【一】竹閣。今、廣化寺

となる。白侍郎の遺像がある。【二】

鶴。世説に、孟昶在京口、嘗見王恭乘高輿、披鶴裘表於時微雪、

但遣先生披鶴氅。

但先生をして鶴氅を披しめば、

不須更畫樂天真。

須ひす更に樂天の眞を畫くことを。

昶於三籬間一窺之、歎曰、此眞神仙中人。【三】畫樂天真。竹閣に白樂天の祠堂がある。

【詩意】柏堂の南畔には、竹が澤山にあつて雲のやうである。此の竹閣、何人が是れ主人であるか、閣に白樂天の祠堂がある。今、張先生をして鶴の羽衣を披しめると、更に白樂天の眞像を畫く必要もないであらう。

和蔣夔寄茶

蔣夔が茶を寄せらるるに和す

我生百事常隨緣。

我生は百事常に縁に隨ふ、

四方水陸無不便。

四方水陸便ならざるなし。

扁舟渡江適吳越。

扁舟江を渡りて吳越に適き、

三年飲食窮芳鮮。

三年飲食芳鮮を窮む。

金盞玉膾飯炊雪。

金盞玉膾飯雪を炊ぎ、

海螯江柱初脫泉。

海螯江柱初めて泉を脱す。

臨風飽食甘寢罷。

風に臨んで飽食甘寢罷み、

【字解】【一】蔣夔。夔は代州の

教授となつて、任に赴くとき、子由、

行を送る詩あり。本集にも、送蔣夔

赴代州學官詩がある。蔣夔は熙寧

の末に、代州に任じ、元豐二年に、

調せられて京兆に任ぜられ、府學教

授となる。【二】扁舟。小船。史記、

貨殖傳に、乃乘扁舟、浮于江湖。

【三】芳鮮。新しい魚。傳毅の七激に、

酌旨酒、割芳鮮。【四】金盞玉膾

一甌花乳浮輕圓。一甌的花乳輕圓を浮ぶ。

自從捨舟入東武。舟を捨てて東武に入りしより、

沃野便到桑麻川。沃野便ち桑麻の川に到る。

剪毛胡羊大如馬。剪毛の胡羊大さ馬の如し、

誰記鹿角腥盤筵。誰か記せん鹿角腥くして盤筵。

厨中蒸粟堆飯糗。厨中の蒸粟飯糗堆く、

大杓更取酸生涎。大杓更に取つて酸涎を生ず。

柘羅銅碾棄不用。柘羅銅碾棄てて用ひず、

脂麻白土須益研。脂麻白土益研を須ふ。

故人猶作舊眼看。故人猶ほ作す舊眼の看、

謂我好尚如當年。謂ふ我が好尚は當年の如しと。

沙谿北苑強分別。沙谿北苑強ひて分別、

水脚一綫誰先。水脚一綫誰か先なるを争ふ。

清詩兩幅寄千里。清詩兩幅千里に寄せ、

蓋はあへもの。膾はなます。大業拾遺に、吳郡獻三松江鱸魚膾、須三八九月霜下之時、鱸魚白如雪、取三尺以下者、作之、以三莖菜花葉三相間、和以三細縷金橙一食之、所謂金盞玉鱸、東南佳味也。【五】飯炊雪。杜子美の詩に、香稻雪翻匙。【六】海蟹蟹をいふ。蟹は本字。【七】江柱。江瑤柱。江瑤は、又、江瑤に作る。玉瑤ともいふ。蚌の屬。足根の細絲を以て近海の泥沙中に附着す。前後の兩柱、美味を以て著はる。俗に江瑤柱と稱す。【八】脱泉。白樂天が放魚の詩に、脱泉雖已久、得水猶可蘇。【九】甘寢。韓退之の箴詩に、倒身甘寢百疾愈。【一〇】一甌花乳。甌は小さい瓶。花乳は茶の異名。劍南の詩に、茶癩乳花圓。劉禹錫の茶詩に、欲知花乳清冷味、須是眠雲鼓石人。【一一】東武

紫金百餅費萬錢。紫金百餅萬錢を費す。

吟哦烹噍兩奇絕。吟哦烹噍兩ながら奇絶、

只恐偷乞煩封纏。只恐る偷乞封纏を煩はすを。

老妻穉子不知愛。老妻穉子愛を知らず、

一半已入薑鹽煎。一半は已に薑鹽に入つて煎らる。

人生所遇無不可。人生遇ふ所可ならざるなし、

南北嗜好知誰賢。南北嗜好知る誰か賢なるを。

死生禍福久不擇。死生禍福久しく擇ばず、

更論甘苦爭蚩妍。更に甘苦を論じ蚩妍を争ふ。

知君窮旅不自釋。知る君窮旅自ら釋てず、

因詩寄謝聊相鐫。詩に因つて寄謝し聊か相鐫る。

食之、謂之飯羹。【一八】大杓。世説に、諸阮飲酒、不復用常杯、斟酌以三大甌盛酒、圍坐相向、大杓更飲之。【一九】柘羅銅碾。蔡君謨が茶録に、茶羅以絶細爲佳、羅底用東川鴨溪絹之密者、投湯中揉洗以覆之、茶碾以銀或鐵爲之、黃金性柔、銅及礪石、皆能生銹不入用。【二〇】脂麻。胡麻の異名。本草に、胡麻、一名脂麻。王注に、蜀人以脂麻白土煎茶。【二一】舊眼看。吳志、呂蒙傳に、士別三日、即更刮目相待。【二二】好尚。嗜好といふに同じ。蜀志、法正傳に、雖好尚不同、以公義相取。【二三】

縣の名。漢書、地理志に、琅邪郡、東武縣。【二四】沃野云云。文選、張平子の西京賦に、廣衍沃野、厭田上上。東坡、超然臺記に、余自錢塘

移守膠西、釋舟楫之安、而服車馬之勞、去雕牆之美、而蔽采椽之居、背湖山之觀、而行桑麻之野、即此詩中の意である。【二五】剪毛。張平子

子の東京賦に、馭不詭遇、射不剪毛。【二六】鹿角。小魚の名。東坡

の詩に、我是騎鯨手、聊堪充鹿角。

【二七】盤筵。韓退之の詩に、解裝且盤筵。白樂天の詩に、盤筵占地施。

【二八】厨中。蒸粟、東坡の自注に、山東喜食粟飯、飲酸醬。【二九】飯羹。王注に、山東人理肉於飯下而

食之、謂之飯羹。

【三〇】大杓。世説に、諸阮飲酒、不復用常杯、斟酌以三大甌盛酒、圍坐相向、大杓更飲之。

【三一】柘羅銅碾。蔡君謨が茶録に、茶羅以絶細爲佳、羅底用東川鴨溪絹之密者、投湯中揉洗以覆之、茶碾以銀或鐵爲之、黃金性柔、銅及礪石、皆能生銹不入用。

【三二】脂麻。胡麻の異名。本草に、胡麻、一名脂麻。王注に、蜀人以脂麻白土煎茶。

【三三】舊眼看。吳志、呂蒙傳に、士別三日、即更刮目相待。

【三四】好尚。嗜好といふに同じ。蜀志、法正傳に、雖好尚不同、以公義相取。

沙谿北苑 呂仲吉の茶記に、壺源其別有八、沙谿其一也。黃儒、品茶要錄に、壺源、沙谿、(皆、北苑の地名)其地相背、中隔一嶺、無數里之遠、然茶產頗殊、凡壺源之茶、售以十、則沙谿之茶售以五。石林避暑錄に、北苑茶正所產、爲三會坑、謂三之正焙、非三會坑一爲沙谿、謂三之外焙、丁謂の茶錄に、北苑、里名、官焙曰龍焙、蓋造御茶也。【二四】水脚爭誰先、蔡君謨の茶錄に、建安國試以水痕、先者爲負、耐久者爲勝、故較三勝負之說曰、相去一水兩水。【二五】費三萬錢、杜子美の詩に、左相日興費三萬錢。【二六】吟哦烹噍、吟哦は吟咏といふに同じ。白樂天の詩に、醉臥獨吟哦。說文に、噍、齧也と見ゆ。【二七】薑鹽煎、王注に薑鹽煎茶、亦蜀中風俗。本集に、題三薛能茶詩後云、唐人煎茶用薑、故能詩云、鹽漬添長戒、薑宜煮更誇。查初白いふ、據此、則又有二用鹽者一矣、近世亦有二用此二物者輒大笑之、然茶之中等者、用薑煎一信佳也、鹽則不可。【二八】爭三蚩妍、美惡を争ふ。漢、趙壹が疾レ邪賦に、孰知辨三其蚩妍。

【題義】代州學官の蔣夔が茶を寄せられた詩に和したのである。王文誥いふ、公與子由一送蔣夔赴代州學官、作詩、乃熙寧十年在汴京事也。紀昀は此詩を評していふ、開合變動、筆力不凡也。又いふ、結處一齊翻盡、乃通篇俱化、烟雲筆墨脫洒之至と。

【詩意】我が生は自然に任せ、百事常に縁に随つて居る。水に在れば、水によるしく、陸に在れば、陸によるしい。四方の水陸、すべて便ならざるはない。そこで小舟に乗つて江を渡つて吳越に適き、三年間、平生の飲食は、新しい魚類に飽いた。吳郡から松江の鱸魚を獻する、白きこと雪の如し。其の三尺以下のものを取つて、膾を作り、香菜花葉を以て相間へ、和するに細縷金橙を以てする。所謂金の鱸玉の鱸で、金玉は美味の形容、東南の佳味である。飯炊雪は、鱸魚の白きを形容した言葉である。蟹も蚌も捕へ得たので、之を調理し、風に臨んで十分に食べ、身を倒して甘寝した。甘寝も罷

んで、一甌の茶乳は、輕圓を浮べる。所謂花乳清冷の味を知らんと欲せば、須らく是れ雲に眠り、石に跂つの人たるべきである。我は舟を捨てて、琅邪の東武縣に入りしより、湖山の觀に背いて、桑麻の野を行く。毛を翦つた胡羊は、馬ほどの大さである。誰か記せん、鹿角といふ小魚の腥くして席に盤つて居るを。新風味を思はしめる厨の中の蒸粟は、山東の人が好んで食ふ所、肉を飯下に埋めた飯糰といふものも傍に堆くあるので食に飽くことが出来る。大約更に酸醬を酌んで、涎を生ずる。又、茶羅は細いほど佳いから、羅底は東川鵝溪絹の密なるものを用ひる。茶碾は、銀若しくは鐵で作る。黄金は性が柔かであり、銅や礪石は、銚を生ずる恐があるからである。胡麻や白土で茶を煎、碾るには盆研を用ひるから、石碾輕飛瑟瑟塵、乳花烹出建茶新の句もある。時は移り俗は變る、士別れて三日、當に目を刮して相待つべきも、故人は猶ほ舊眼の看をなし、我の嗜好は、當年の如しと言つて居る。沙谿の茶、北苑の茶、強ひて分別し、水痕一綫、誰か先なるかと、只管勝負を争つて居る。君が清詩兩幅を千里から寄せられ、綠華紫英(皆、茶の名)百餅の惠投は、萬錢に値する。茶の品は、龍鳳團より貴きはない。凡て八餅、重さ一斤。慶曆の間、蔡君謨、福建の運使となり、始めて小片の龍茶を造る。其の品は絶精、之を小龍團といふ。凡て二十餅、重さ一斤、其價は金二兩。然れども金は有るべく、茶は得べからず。毎に南郊の致齋の時、中書樞密院、各一餅を賜ふ。四人之を分ち、宮人、往往金を其の上に鏤む。其の貴重すること此の如くである。寄せられた清詩も、惠まれた紫金茶も、兩ながら奇絶である。ただ儉むもの、乞ふもの多いために、封纏を煩はすことを恐れる。老妻

も、小供も、之を大切にすることを知らないで、半分は既に薑鹽を入れて煎てしまった。人生は遇ふ所、可ならざるはない。南と北と嗜好に相異があつても、孰れが賢つて居るかも解らない。人間の死生禍福、擇ぶべきであるに、久しく之を擇びもしないで、更に世味の甘苦を論じて、美と醜と争つて居るのは、憫むべきである。君は窮旅に在つても、自ら釋てない。詩に因つて寄謝して、聊か相鑄諭する。(鑄諭とは、深く勧め切に諭すことである。)

光祿庵二首

光祿庵 二首

文章恨不見文園。

文章文園を見ざるを恨み、

禮樂方將訪石泉。

禮樂方に將に石泉を訪はんとす。

何事庵中著光祿。

何事を庵中光祿を著け、

枉教閒處筆如椽。

枉げて閒處をして筆椽の如からしむる。

【字解】

【一】訪石泉 唐書に、

田游巖、頻召不出、高宗幸嵩山、親至其門、游巖野服出拜、帝問、先生比佳否、對曰、臣所謂泉石膏肓、烟霞痼疾。【二】光祿 宋史に、光祿寺卿、掌三祭祀、朝會、宴饗、酒醴、膳羞之事。【三】筆如椽 晉、王珣傳に、孝武時、爲僕射、夢、人以三大筆如椽與之、既覺、語人云、此當有三大筆事、俄而帝崩、哀册諡議、皆、珣所草。

差之事。【三】筆如椽 晉、王珣傳に、孝武時、爲僕射、夢、人以三大筆如椽與之、既覺、語人云、此當有三大筆事、俄而帝崩、哀册諡議、皆、珣所草。

【題義】 本集に與陳履常尺牘云、遠承寄貺詩刻、讀之灑然輒和光祿庵二絕、聊以寄欽羨之懷、一也。末に又いふ、高密(縣の名、今、山東膠東道に屬す。)連年旱蝗、應付朔方、百須紛然疲茶、仰企仙館、如在三雲漢一矣と。

【詩意】 文は春華の如く、思は湧泉の如しといふ言葉があるが、往いて其の文園を見ざるを恨むのである。禮樂は治の具であるから、方に石泉の高士を訪はんとする。唐の田游巖は太白山に隱る。後、箕山に入つて、許由の祠傍に居る。高宗、嵩山に幸し、駕を枉げて、親ら門に至る。游巖は、野服して出で拜す。帝、左右に命じて扶け止め、謂ひて曰く、先王此に來る佳なりや否やと。答へて曰く、臣は所謂泉石膏肓、烟霞痼疾なるものと。(二句は此故事に據つたのである。)何事を庵中に、光祿の二字を著けて光祿庵と命名し、枉げてかかる閒處をして筆椽の如からしめるのであるか。(光祿庵主の文章が立派であることを言つたので、椽大の筆といふのは、大手筆といふ意である。)

城中太守的何人。

城中の太守的に何人、

林下先生非我身。

林下の先生は我身にあらす。

若向庵中覓光祿。

若し庵中に向つて光祿を覓めば、

雪中履迹鏡中眞。

雪中の履迹鏡中の眞。

【字解】 【一】的何人 的は適と同じ。ちやうどと譯す。王文譜いふ此似指徐州也と。【二】林下先生 山林に幽棲せる隱士。世説に、

王夫人、神情散朗、故有林下風氣。【三】鏡中眞 合注に、即鏡花水月之意。證道歌に、鏡裏看形見不難、水中捉月爭拈得。

【詩意】

城中の太守は、まさに何人であらうか、山中に幽棲する林下先生は、我身ではない。若し此

の光祿庵中くわくわんちゆうに向つて光祿其人くわくしにんを覓もとめば、恰あたも是れ雪中せつちゆうに履ふんだ足迹あしあとの如ごとく、鏡中きやうちゆうに形かたちを看みるが如ごとくである。雪中せつちゆうに履ふんだ足迹あしあとと、鏡かがみに映うつつた形かたちとは、目めには見みゆるも、捕ほ捉とくし難がたいのである。

蘇東坡詩集 卷十四

古今體詩 六十六首

立春日病中邀安國仍請率禹功同來僕雖不能飲當請成伯主會某當杖策倚几於其間觀諸公醉笑以撥滯悶也二首

立春の日、病中、安國を邀へ、仍つて請うて禹功を率ゐて同じく來らしむ。僕飲むこと能はずと雖も、當に成伯に請うて會を主らしむべし、某は當に策を杖いて几に其の間に倚り、諸公の醉笑するを觀て、以て滯悶を撥すべきなり 二首

孤燈照影夜漫漫。孤燈影を照して夜漫漫、拈得花枝不忍看。花枝を拈り得て看るに忍びず。白髮敲簪羞彩勝。白髮簪を敲て彩勝を羞ぢ、

古今體詩 立春日病中邀安國仍請率禹功同來二首

【字解】 立春日。太陽曆、二月三日頃。二十四氣の一、大寒の次の氣節。史記、天官書四時之卒始也。
安國。宋、文助、字は安國、書

黃者煮粥薦春盤

黃者粥を煮て春盤を薦む。

東方烹狗陽初動

東方狗を烹て陽初めて動き、

南陌爭牛臥作團

南陌牛を争うて臥して團を作す。

老子從來興不淺

老子從來興淺からず、

向隅誰有滿堂歡

隅に向つて誰か滿堂の歡あらん。

【詩云】。【五】倚几 几によりもたれる。莊子、齊物論に、隱几而坐。【六】撥滯悶 撥は撥去の意、除き去ること。滯悶は、蘇

舜欽の詩に觀此巨派注、頗覺滯悶。【七】孤燈 白樂天の長恨歌に、夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠。【八】漫漫 夜の長い

貌。寧戚、飯牛歌に、長夜漫漫何時旦。【九】敲簪 白樂天の詩に、敲簪白接羅。【一〇】羞彩勝 荆楚歲時記に、人日剪綵爲

人、或鏤金箔爲人、以貼屏風、或戴之頭鬢、又造華勝、相遺、起於晉代云云。李商隱の詩に、鏤金作勝傳荆俗、翦綵爲人

紀晉風。【二】黃者 本草に、黃者、俗作葦、本集の與米元章書云、且復疲葦、食黃葦粥、甚美、此因病中用之、非立春故

事也。【三】薦春盤 立春の日に、盤に食物を盛る。玉燭寶典に、新正十五日、作膏粥、以祠門戶。風土記に、月正元日、五蕪鍊

形。注にいふ、五辛所以助發五臟氣也。四時寶鑑に、唐人立春日、作春餅生菜、號春盤。【四】烹狗 凡そ祭祀に、犬曰羹

獻。曲禮に見ゆ。【五】爭牛 論衡に、立春爲土象人男女各二、乘耒把鋤、或立土象牛、順氣應時、示率下也。【六】興

不淺 晉の庾亮、字は元規、風格峻整、任へて散騎侍郎となる。蘇峻反す、亮、諸軍を督して、之を平ぐ。亮、武昌を鎮す、諸佐吏

殷浩の徒、秋夜に乗じて南樓に登る。亮忽ち至る。諸人起つて之を避く。亮、徐に曰く、諸君少住、老子於此興復不淺と。便ち密

牀に據り、浩等と談詠し、以て夕を竟る。其の坦率多く此に類す。【七】向隅云 韓詩外傳に、一人向隅、滿坐不樂。

【題義】 此詩は熙寧九年（東坡四十一歳）正月の作。立春の日、病中に文助、喬敘、趙成伯等を邀へ

て宴會を爲したが、東坡は酒を飲むことが出来ないで、策杖、几に倚り、諸人の醉笑するのを傍觀して悶滯を撥去したのである。紀昀いふ、五句滯笨、六句鄙俚と。

【詩意】 孤燈は影を照して寂しく、夜は漫漫として長い。物思ふ我は、未だ眼を成すことが出来ないで、花枝を拵り得て、而も之を看るに忍びないのである。白髮の此身は、花も昔となつたから、簪を絞つて彩勝を挿すことを羞むる。病中の此身は、疲勞が甚たしいので、黃葦粥を食つて、食慾を助

ける。一體、立春の日は、特に春餅や生菜を作つて盤に盛る。これを春盤と號ける。祭祀に、犬肉を宗廟に供へる、之を羹獻といふ。人が食ふ所の餘を取つて犬に與へると、犬は之を食ひて肥える。肥

えると、鬼神に獻祭することが出来るといふ意から名ける。東方春の祭に、羹獻を供へて、陽氣が初て動く。立春には土象人を爲り、土象牛を立てる。南陌（陌はあせみち）に其の牛を争うて、臥して一團をなして居る。昔、晉の庾亮の武昌を鎮したとき、諸佐吏が秋夜に乗じて、南樓に登る。亮、忽ち至る。諸人、起つて之を避けると、亮は徐に曰く、老子此に於て興復淺からずと。今日の宴會も、亦

之に類して居る。一人隅に向はば、滿座樂まない。今日隅に向はば、誰か滿堂の歡樂があらうぞ。【餘録】 宗廟の祭にささげる供物の美名を擧げると、禮記の曲禮に、凡そ宗廟之禮、牛曰一元大武、豕曰剛鬣、豚曰脂肥、羊曰柔毛、雞曰翰音、犬曰羹獻、雉曰疏趾、兔曰明視、脯曰尹祭、彘魚曰

商祭、鮮魚曰脰祭、水曰清滌、酒曰清酌、黍曰薺合、粱曰薺其、稷曰明粢、稻曰嘉蔬、韭曰豐本、鹽曰鹹醴、玉曰嘉玉、幣曰量幣。一元は一頭で、數をいふ。武は足迹、肥牛は脚大であるから、武も亦

大、故に大武といふ。剛鬚は豕の肥えるときは、鬣毛剛くして大、故にいふ。膾肥の膾は、充滿の貌。羊毛は細にして柔弱、故に名く。翰音の翰は長なり。雞が肥えると鳴聲が長い。羹獻は、人食ふ所の羹の餘を取りて、犬に與へると、犬が之を食うて肥える。肥えると、鬼神に獻祭すべしといふ意より名く。趾は足、雉が肥えると兩足開張するより名く。兔が肥えると目が開く、故に名く。脯は乾した肉。麩魚は乾魚。脰祭は新鮮なるものは、煮るときは、脰直である。麝は香氣。其は語助。豊本の本は根、非は根が豊厚なるを以て名く。

齋居臥病禁烟前。 齋居病に臥す禁烟の前、

辜負名花已一年。 名花に辜負する已に一年。

此日使君不强喜。 此日使君強ひて喜ばざれば、

早春風物爲誰妍。 早春の風物誰が爲に妍なる。

青衫公子家千里。 青衫公子家千里、

白髮先生杖百錢。 白髮先生杖百錢。

曷不相將來問病。 曷ぞ相將し來つて病を問はざる、

已教呼取散花天。 已に呼んで散花天を取らしむ。

【字解】 一 齋居 東坡の詩に、

羨君常齋居、散帙滿三前後。

禁烟 寒食の節の異稱。周禮、司烜

氏に、仲春以三木鐸修火、禁於國

中。注にいふ、爲三季春將出火也。

元微之の連昌宮詞に、店舎無煙宮樹

綠。唐、常袞が大赦の制に、屬禁煙

之令節。

二 辜負 白樂天の詩に、

猶有二般辜負事、不將歌舞管絃

來。俗には孤負と同じ意に用ひて居

る。

【五】 不强喜 史記、魏其武安侯傳に、韓御史良久謂丞相曰、君何不三自喜。

【六】 青衫 青色の衣。衫は單衣の通稱。白

樂天の琵琶行、江州司馬青衫濕。

【七】 杖百錢 晉書、阮修傳に、修、字宣子、嘗步行、以三百錢掛杖頭、至酒店、便獨酣暢。

【八】 散花天 維摩經に、會中有二天女、以天花散、諸菩薩悉皆墮落。李商隱の詩に、維摩一室雖多病、亦要天花作道場。

【詩】 仲春寒食の節は、店舎に煙なきも宮樹は綠である。併し齋居病に臥して、名花に負くことが已に一年となつた。今日の酒宴には、刺史に於かれても、強ひて喜ばなければなるまい。さもなくば、早春の風物は、一體誰が爲に美しいのであるかと言はなければならぬ。青衫を著けた公子は、家を離れてここに千里。白髮の先生杖百錢は、晉の阮修が嘗て步行し、百錢を以て杖頭に掛け、酒店に至つて、便ち獨り酣暢したことを言つたのであらう。何ぞ相來つて病を問はざる、已に呼んで散花天を取らしめた。散花天は天花を以て散ずるといふ意である。(宴を開く意) 李義山も、維摩一室病多しと雖も、亦、天花の道場を作すを要すと言つた。

答李邦直

李邦直に答ふ

美人如春風。著物物未知。 美人は春風の如く、物に著いて物未だ知らず。

羈愁似冰雪。見子先流澌。 羈愁は冰雪に似て、子を見て先づ流澌す。

子從徐方來。吏民舉熙熙。 子徐方より來り、吏民は舉熙熙。

扶病出見之。驚我一何衰。

病を扶けて出て之を見る、我の一に何ぞ衰へたるに驚く。

知我久慵倦。起我以新詩。

我の久しく慵倦を知り、我を起すに新詩を以てす。

詩詞如醇酒。盎然熏四支。

詩詞醇酒の如く、盎然として四支を熏す。

徑飲不覺醉。欲和先昏疲。

徑に飲んで醉ふを覺えず、和せんと欲して先づ昏疲す。

西齋有蠻帳。風雨夜紛披。

西齋蠻帳あり、風雨夜紛披。

放懷語不擇。撫掌笑脫頤。

懷を放つて語擇ばず、掌を撫し笑つて頤を脱す。

別來今幾何。春物已含姿。

別來今幾何、春物已に含姿。

柳色日夜暗。子來竟何時。

柳色日夜暗し、子の來る竟に何れの時ぞ。

徐方雖云樂。東山禁游嬉。

徐方樂しといふと雖も、東山游嬉を禁す。

又無狂太守。何以解憂思。

又狂太守なし、何を以て憂思を解かん。

聞子有賢婦。華堂詠螽斯。

聞く子に賢婦あり、華堂螽斯を詠すと。

曷不倒囊橐。賣劍買蛾眉。

曷ぞ囊橐を倒にし、劍を賣りて蛾眉を買ひ、「ざる。」

不用教絲竹。唱我新歌詞。

絲竹を教ふるを用ひずして、我に新歌の詞を唱へしめ。

【字解】 一、李邦直 名は清臣。進士に擧げらる。神宗召して兩朝國史編修官となす。哲宗の朝、范純仁位を去り、獨り中書を

顧にす。邦直は詞藻を以て知を人主に受く。然れども利祿に志して、操持悖謬、鄧溫伯・章惇諸人と朋黨の説を紹述し、正人黨逐、幾んど嗾類なし。後、其の罪を追治し、雷州司戸に貶せらる。公、高密に守たるとき、邦直は京東挺利を以て部を行り、密に至る。
【三】 美人 楚辭に、望美人兮未來。【二】 羈愁 容愁といふに同じ。陳子良の詩に、故鄉千里外、何以慰羈愁。【四】 流澌 氷がとけて流れる。韻書にいふ、澌、流氷也。楚辭に、流澌紛兮將來下。東方朔七諫に、赴湘沅之流澌兮、恐逐波而復東。
【五】 從徐方來 毛詩、大雅、常武に、徐方不回、王曰還歸。【六】 熙熙 和く貌。老子に、衆人熙熙、如享大宰、如登春臺。
【七】 扶病 白樂天の寄元微之詩に、可能扶病暫來無。【八】 醇酒 史記、信陵君傳に、飲醇酒、近婦女。【九】 盎然 盛にあふれる貌。劉後村の詩に、先生如春風、盎然熾陳亥。【一〇】 徑飲不覺醉 史記、淳于髡傳に、可一斗徑醉。徑は竟なり。つひにと訓す。【一一】 紛披 物のばらばらに亂れる。文選、王褒の洞簫賦に、若凱風紛披。容輿而施惠。東坡の詩に、誰道茅簷劣容膝、海天風雨看紛披。【一二】 語不擇 孝經に、口無擇言。【一三】 撫掌笑脫頤 晉、陸雲傳に、張華撫手大笑。漢、匡衡傳に、諸儒語曰、匡說詩解人頤。如淳曰く、使人笑而不能止也。【一四】 別來 晉、溫嶠傳に、王敦與王導書曰、太真別來幾日作如此事。【一五】 春物 謝朓の詩に、春物方駘蕩。【一六】 含姿 韓退之、同冠映の詩に、宿雪尙含姿、朝日忽升曉。東坡の詩に、千花百草爭含姿。【一七】 雖云樂 韓退之の晚秋郾城聯句詩に、從軍古云樂、談笑青油幕。【一八】 有賢婦 史記周本紀に、太姜・太任、皆賢婦人。【一九】 華堂 文選、荀叔夜の琴賦に、華堂曲宴、密友近賢。【二〇】 螽斯 毛詩小序に、螽斯、后妃、子孫、衆多也。螽斯は蝗の類、一回に九十九子を生む。李邦直は初め、韓魏公の兄の女を娶り、再び孫巨源の女を娶る。賢婦は孫氏をいふ。【二一】 囊橐 底のある囊と底のない橐。詩、大雅に、于橐于囊、思戢用光。【二二】 蛾眉 白樂天の詩に、黃金不惜買蛾眉。【二三】 絲竹 禮記に、金石絲竹、樂之器也。尙書序に、金石絲竹之音。【二四】 唱我新歌詞 劉禹錫の楊柳枝詞に、請君莫奏前朝曲、唱我新翻楊柳枝。

【題義】 哲宗の朝、李邦直は、首として紹述を以て帝の意を迎へ、且つ激怒の詞が多かつた。そして鄧溫伯・章惇の諸人は之を助けて朋黨をなしたのである。東坡が七年瘴海に在つて、僅かに生還が

出來た。其の禍本を推原すると、實に邦直から之を發したのである。此詩は、東坡の密州に在つた時の作である。

【詩意】美人を望むも、未だ來らずといふ言葉がある。美人は春風の如くであつて、物に著いても、物は之を知らずに居る。故郷は千里の外、何を以てか客愁を慰めようぞ。併し客愁は、氷雪の如くであつて、君を見ると、解けて流れてしまふ。君は遠く徐方から來られる、吏民は皆、君を見て熙熙として和らぎ、春臺に登るやうである。それで病を犯してまでも出でて之を見る。君は我の衰へたるに驚き、又、久しい間、慵々倦倦で居た我を知る。そこで、我が心を起すに新詩を以てされた。詩詞は、醇酒の如くであり、春風の如くであつて、盎然（あふれる）として四肢を熏する。而も竟に飲んで酔ふことを覺えない。又、和せんと欲して、先づ目も昏み、體も疲れる。西齋に、えびす製の帳があるが、風雨の夜などばらばらと亂れて居る。懷を放つて、而も擇言がなく、皆、よい言葉である。手を撫でて大に笑ひ、人をして頤を解かしめる。さて一別以來、幾日ぞ、春物は方に駘蕩、千花百草が争うて姿を含んで居る。客舎は青青であるも、柳色は日夜に暗い。君の來るは竟に何れの時ぞ。徐方は樂しいといふと雖も、東山は游嬉を禁じて居る。又志大に、言大なる太守も居ないから、何を以て我が憂思を解かうぞ。聞けば君には賢婦人孫氏がおはし、そして家門が繁榮で、蠡斯の詵説（衆多なるをいふ）たるが如しといふことである。なせ財囊を倒にし、劍を賣りて美人を買ひ、そして之に教へるに、絲竹の樂器を以てして、我が爲に新歌の詞を唱へしめるやうになさらないか。私には切に

之を君に懇望するのである。

和文與可洋川園池三十首

文與可が洋川園池に和す 三十首

湖橋

湖橋

朱欄畫柱照湖明。

朱欄畫柱湖を照して明かに、

白葛烏紗曳履行。

白葛烏紗履を曳いて行く。

橋下龜魚晚無數。

橋下の龜魚晚に無數、

識君拄杖過橋聲。

君が杖を拄へて橋を過ぐる聲を識らん。

【字解】一 文與可 文同、字は與可、東川梓潼の人、嘗て洋州に守となり、最後に湖州に知たり。竹を畫くことが精妙である。文湖州墓志に、熙寧中、知陵州、既復舊秩、歷度支司封員外郎、徙知洋州云云。

【三】洋川園池

九域志に、洋州、洋川郡屬三利州路。名勝志に、今漢中府洋縣。唐地理志に、洋州洋川郡、武德元年、析梁州之西鄉黃金興勢置。【三】朱欄 李義山の詩に、朱欄迢遞壓湖光。李嘉祐の詩に、高閣朱欄不厭遊、葦葭白水繞長洲。【四】烏紗 帽の名。東晉の時、宮官、烏紗帽を著く、即ち烏紗帽である。其の後、貴賤、冥私に於て、皆、之を著く。唐に至つて、遂に官服となる。柳宗元の詩に、朝帽挂烏紗。【五】龜魚 韓退之が新亭の詩に、瓦影蔭龜魚。【六】無數 戰國策に、呂不韋謂父曰、耕田之利、幾倍、日十倍、珠玉之贏幾倍、日百倍、立國家之主、贏幾倍、日無數。

【題義】文與可は東坡と相厚し、東坡が杭州に通判であつた時、與可が詩を寄せていふ、北客若來休問話、西湖雖好莫吟詩と。此三十首は、與可が洋川園池の作に和したのである。

【詩意】朱塗りの欄干や彩色した柱が湖水を照らして、はつきりして居る。人が白い葛の烏紗帽を冠り、履を曳いて歩み行く。橋の下には、龜魚が數知れない。定めし君が杖に拄へられて橋を渡り行く聲を聞き識るであらう。(紀昀いふ、暗用ニ堂堂策策事、寫得閒遠と。)

【餘錄】文與可の湖橋詩にいふ、飛橋架三橫湖、偃若長虹臥、自問一日中、往來凡幾過と。

橫湖

橫湖

貪看翠蓋擁紅粧。

翠蓋の紅粧を擁するを貪り見て、

不覺湖邊一夜霜。

覺えず湖邊一夜の霜、

卷却天機雲錦段。

天機の雲錦段を卷却して、

從教匹練寫秋光。

從教匹練をして秋光を寫さしむるを。

【字解】(一) 橫湖 名勝志に、

橫湖在洋縣城西、遠望若匹練之橫、

故名。樂城集和橫湖一詩に、湖裏種

荷花、湖邊種楊柳、何處渡橋人、問

是人問否。(二) 翠蓋 文選、曹子

建の七啓に、俯倚金較、仰撫翠蓋。

宋玉の高唐賦に、蜺爲旌翠爲蓋。【三】紅粧 文選、古詩に、娥娥紅粉粧、織織出素手。【四】天機 淮南子に、內有三以通于天機一とある。こゝは天の機織の意。【五】雲錦段 河南記に、嵩山有雲錦二谿、谿多荷花異於常者。文選、木元虛の海賦に、雲錦散交於沙汭之際。韓退之の曲江荷花詩に、擘舟昆明度雲錦、脚敲兩舷叫吳歌。

【詩意】此の橫湖に蓮の花が開いたときは、譬へば紅粧を施した美人を翠の蓋を取つて擁衛して居るやうな状である。(翠蓋も紅粧も荷花を形容したのである。)此の美景を貪り見て、湖邊に在る我は

一夜の中に、霜あることを覺えなかつた。天機即ち造化の機織で織り成した此の自然の雲錦段を卷き取つてしまひ、跡にはただ水ばかりが澄みきつて居る。其の状をいふと、恰も一匹の練のやうでまことに美しい。此の練に秋光を寫すのも、妙であらう。荷が盡きて、水は益々光明となる。(此詩は其の景色の澄靜を寫したのである。紀昀いふ、就原唱翻入一層と。)

書軒

書軒

雨昏石硯寒雲色。

雨昏うして石硯寒雲の色、

風動牙籤亂葉聲。

風動いて牙籤亂葉の聲。

庭下已生書帶草。

庭下已に生ず書帶草、

使君疑是鄭康成。

使君疑ふらくは是れ鄭康成ならん。

【字解】(一) 書軒 名勝志に、

書軒在州宅。(二) 石硯 南史、王

慈傳に、取素琴石硯及孝子圖一而已。

【三】牙籤 書帙のこはせ。鄭侯家多

レ書、挿架三萬軸、一一懸牙籤、新

若手未觸。【四】書帶草 三齊記略

に、鄭康成居不其城南山中、教授、山下草如薤葉、長尺餘、人號康成書帶草。【五】使君 刺史をいふ、文與可を指す。【六】鄭康成 漢、鄭玄、字は康成、高密の人。關に入り、馬融に事ふ。居ること三年、疑義を質し畢りて、辭し歸る。融曰く、鄭生今去る、吾道東すと。

【詩意】雨は昏く書軒を鎖して、石硯も寒雲の色である。風は動いて、書帙のこはせは、亂葉の聲をなして居る。書軒の庭の下には已に書帶草を生じた。昔、漢の鄭康成は、不其城南の山中に居つて教授し、山下の草は薤葉の如く、長尺餘、人は康成の書帶草と號したさうである。此の書軒の主人であ

蘇東坡詩集 卷十四
使君は、疑らくは、是れ鄭康成の再生でもあらうか。(文與可が書軒の詩は、清泉繞庭除、綠篠映軒檻、坐此何所爲、惟宜弄鉛槧。)

冰池

ひょうち

不嫌冰雪繞池看。冰雪を嫌はず池を繞つて看る、

誰似詩人巧耐寒。誰か似ん詩人の巧みに寒に耐ふるに。

記取羲之洗硯處。記取す羲之硯を洗ふ處、

碧琉璃下黑蛟蟠。碧琉璃の下黒蛟蟠まるを。

【字解】(一) 巧耐寒 杜子美の詩に、勝裏金花巧耐寒。(二) 羲之 晉書、王羲之傳に、嘗與人書云、張芝、臨池學書、池水盡黑、使二人耽之若此、未必後之也。(三) 洗硯 承天歸宗寺禪院は、晉咸康六年に王羲之が置いたもので、右軍の墨池がある。(四) 碧琉璃 李涉の詩に、兩重星點碧琉璃。黑蛟躍。杜子美の詩に、濤翻

【詩意】 冰雪をば嫌はないで、何時までも池邊を繞つて見て居る。詩人の巧く寒に耐へる此の態度に似たるものは、誰であらうか。思ひ出すのは、昔、晉の王羲之が承天歸宗寺禪院の硯を洗つた處である。碧琉璃の下に、黒蛟の蟠まるのを見るのである。池に臨んで書を學び、池水の盡く墨くなつたのを言つたのである。(文與可の冰池の詩は、日暮池已冰、翩翩下鳧鷖、不怕池中寒、便於冰上宿といふのである。)

竹塢

ちくう

晩節先生道轉孤。晩節先生道轉た孤なり、

歲寒惟有竹相娛。歲寒惟竹の相娛むあり。

麤才杜牧眞堪笑。麤才杜牧眞に笑ふに堪へたり、

喚作軍中十萬夫。喚んで軍中の十萬夫となす。

【字解】(一) 竹塢 小さい土手。杜牧之の詩に、一榻擁秋寒、小窓侵竹塢。李商隱の詩に、竹塢無塵水檻清。(二) 晩節 晩年に同じ。文選、謝靈運の詩に、晩節值衆賢。杜子美の詩に、晩節漸於三詩律細。(三) 麤材 王注に、先生談錄云、唐之盛時、内重外輕、任三方面者、目爲麤材。張燕公云、魏無通材、供國麤使。白樂天が賈舍人に答ふる詩に、一別承明三領郡、從教人道是麤材。北夢瑣言に、唐自大中以來、以兵爲戲、廊廟之上、恥言韜略、就有如盧潘薛能者、目爲麤材。(四) 十萬夫 杜牧之の晩晴賦に、竹林外裏兮十萬丈夫、甲刃縱橫密陳而環侍。

【詩意】 晩節先生、晩節を全うして、道いよいよ高く、いよいよ孤である。歲寒うして、惟竹が青青として相娯めて居る。何ぞ一日も此君なかるべけんや。唐は宣宗の大中以來、兵を以て戲となし、武事に任ずるものを目して麤材となした。杜牧之が賦に竹林外裏の十萬丈夫、甲刃縱橫(樹などの高く茂り合ふ貌)密陳して環侍と、竹を軍事的に喚びなしたのは、其の麤材なる、眞に笑ふに堪へたことである。(文與可の竹塢詩は、文石間蒼苔、相引入深塢、莫憾青琅玕、無時露如雨といふのである。)

荻蒲

てきほ

古今體詩 和文與可洋川園池三十首・冰池・竹塢・荻蒲

雨折霜乾不耐秋。雨に折れ霜に乾いて秋に耐へず、
 白花黃葉使人愁。白花黃葉人をして愁へしむ。
 月明小艇湖邊宿。月明かにして小艇湖邊に宿す、
 便是江南鸚鵡洲。便ち是れ江南の鸚鵡洲。

【字解】(一) 荻蒲 荻は蘆の類、蒲はガマ、水草の一。(二) 不耐秋 一本に不リ奈秋に作る。(三) 白花黃葉 韓退之の梨花詩に、白花倒燭天夜明、羣雞驚鳴官吏起。易林に、桑芳將落、隕其黃葉。(四) 小艇 庾信詩に、小艇釣蓮谿。(五) 鸚鵡洲 鄂州岸下の大江中に在る。九域志に、鄂州古迹有鸚鵡洲。庾信の詩に、春洲鸚鵡色、流水桃花香。李太白詩に、鸚鵡洲橫漢陽渡。

【詩意】 荻蒲は雨に折れ霜に乾いて秋に耐へない。白花黃葉、將に落ちんとし、人をして愁へしめる。月明の夜、小艇に棹して、湖邊に宿す。便ち是れ江南の鸚鵡洲である。(後漢書に據ると、黃祖が江夏の太守であつた時、長子が犬を射て、賓客を會した。鸚鵡を此洲に獻じたものがあつたから、名けたといふことである。文與可の荻蒲の詩は、枯荻饒霜風、暮影寒索索、無有限有微禽、捉之宿如客といふのである。)

蓼嶼

蓼嶼

秋歸南浦蟪蛄鳴。秋歸つて南浦蟪蛄鳴き、
 霜落橫湖沙水清。霜落ちて横湖沙水清し。

【字解】(一) 蓼嶼 文與可の蓼嶼の詩に、孤嶼紅蓼深、清波照寒影、時有雙鷺驚、飛來作佳景。(二)

臥雨幽花無限思。雨に臥す幽花限りなき思ひ、
 抱叢寒蝶不勝情。叢を抱く寒蝶情に勝へず。

在二於耳。蟪蛄は蟬の屬。【三】 幽花 杜子美の詩に、幽花敲滿樹、小水細通池。【四】 寒蝶 飛翹翹。皮日休の詩に、秋花如有恨、寒蝶似無嚮。

【詩意】 秋になつて、南浦に蟬が鳴いて居る。霜が落ちて、横湖の沙水が清い。(第一句は時をいひ、第二句は、處をいふ。)幽花は、雨に臥して限りなき思ひをなして居るやうに見え、寒蝶も叢を抱いて情に堪へない様子である。(第三第四の對句は、蓼嶼中の景物をいふ。露葉今は昔にあらず、霜叢疇か依るべきと言つたやうな趣である。)

望雲樓

望雲樓

陰晴朝暮幾回新。陰晴朝暮幾回か新なり、
 已向虛空付此身。已に虛空に向つて此身を付す。
 出本無心歸亦好。出づるも本無心歸るも亦好し、
 白雲還似望雲人。白雲還雲を望む人に似たり。

虛空、如蓮花不着水。【四】 無心 陶淵明の歸去來辭に、雲無心而出岫。白樂天の詩に、浮雲暗歸山。【五】 望雲 唐の狄仁傑

古今體詩 和文與可洋川園池三十首・蓼嶼・望雲樓

が他郷に在つて、其の父母の所在地を望んだ故事。舊唐書、狄仁傑傳に、仁傑授三并州法曹參軍、其親在三河陽別業、仁傑登太行山、反顧見三白雲孤飛、謂三左右曰、吾親舍三其下、瞻恨久之、雲移、乃得去。仁傑は、中宗の時、梁國公に封ぜられ、文惠と諡す。

【詩意】望雲樓上に立つて望むと、或は陰り或は晴れて朝暮の氣象は幾回か變つて行く。已に虚空に向つて此身を寄せたのであるから、雲の無心にして岫（山の洞穴）を出づるが如く、又、浮雲の暗くなつて山に歸るがやうである。出づるも無心、歸るも亦好い。白雲も亦、狄仁傑のやうに雲を望むがやうである。（仁傑は嘗て并州に赴き、太行山に登り、白雲の孤飛するを見て曰く、吾が親は其下に舍すと。紀昀は此詩を評して、純用三宋格、然較勝三唐裝面空調」と。文與可の望雲樓の詩に、巴山雲之東、秦嶺樓之北、樓上卷簾時、滿樓雲一色とある。）

天漢臺

天漢臺

漾水東流舊見經

漾水東流舊經に見ゆ

銀潢左界上通靈

銀潢左界上靈に通ず

此臺試向天文覓

此の臺試みに天文に向つて覓めば、

閣道中間第幾星

閣道中間の第幾星

漢水

【三】

舊見經

經は尙書を指す。尙書、禹貢に、幡豕導漾、東流爲漢。紀昀いふ、舊見經、字腐と。

【四】銀潢 宋、夏竦の賦

【字解】【一】天漢臺 文與可の

天漢臺の詩に、北岸亭館衆、最先登

此臺、臺高望羣峰、萬里雲崔嵬。

【二】漾水 陝西、寧羌縣に在る。尙書注に、孔安國曰、泉始出、水爲漾水、東南流爲沔水、至漢中、東行爲

に、銀潢之影横、秋、帝臺之漿映日。雞跖集に、許洞謂銀河爲銀潢、李賀謂爲銀浦、一曰銀潢。史記、天官書に、絕漢曰天漢。【五】左界、謝希逸の月賦に、斜漢左界、北陸南障。【六】閣道云云、漢、天文志に、天一紫宮後十七星、絕漢抵營室二曰閣道。又、營室爲清廟二曰離宮閣道、漢中四星曰天駟。

【詩意】天の川といふ名を帯びた天漢臺に登つて、遙に望むと、陝西の漾水は、東南に流れて沔水となり、漢中に至り、東行して、漢水となる。其事は、委しく尙書に書いてある。銀河の左界は、上、靈に通じて居る。今、此の天漢臺を、試みに天文に向つて覓めると、何の星の處になるであらう。漢を絶つて營室に抵るを閣道といふが、其の閣道中間の第幾星に當るであらうか。

待月臺

待月臺

月與高人本有期

月は高人と本期あり、

挂簷低戸映蛾眉

簷に挂り戸に低れて蛾眉に映す。

只從昨夜十分滿

只昨夜十分に満ちしより、

漸覺冰輪出海遲

漸く覺ゆ冰輪の海を出る遲きを。

に、挂簷晚雨思山閣。【四】蛾眉 美人の眉。詩、衛風、碩人篇に、螭首蛾眉。鮑照が蕪月詩に、月映西北墀、娟娟似蛾眉。白樂天が燕子樓の詩に、黄金不惜買蛾眉。【五】冰輪 月の異名。東坡の詩に、雲峰缺處涌冰輪。

【字解】【一】待月臺 文與可の

待月臺の詩に、城端築層臺、木杪轉

深路、常此候明月、上到天心去。

【二】高人 高士といふに同じ。略

賓王の詩に、高人儻有訪、興盡詎須

【詩意】文與可は高人といふべきである。月は此の高人と、何か期約でもあるらしい。なせといふに、月が來つて簷に挂つたり、又、戸に低れさがつたり、又、與可が房中の美人に映じたりなどして遊んで居るやうである。只、昨夜は十五夜で、十分の満月であつたから、だんだん月が海上に出ることの遅きを覺えた。(この中に待月の意を含んで居る。紀昀いふ、寫待字好、惟嫌不似寄題耳と。)

二樂樹

二樂樹

此間眞趣豈容談。

此間の眞趣は豈談すべけんや、

二樂并君已是三。

二樂君を并せて已に是れ三。

仁智更煩訶妄見。

仁智更に煩はして妄見を訶し、

坐令魯叟作瞿曇。

坐に魯叟をして瞿曇を作さしむ。

【字解】二樂樹 名勝志に、

二樂樹、在洋州郡圃北隅。樂城集に

和三樂樹詩を載せていふ、動靜惟

所、遇、仁智亦偶然、誰見二物外、猶

有天地全。【三】眞趣 江淹の詩に、

悠悠蘊眞趣。王禹偁の詩に、忘機

得眞趣、懷古生遠思。【三】二樂 論語、雍也篇に、知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽。【四】訶妄見

訶は通じて呵に作る。咎むる意。妄見は虛妄の思想といふ意で、迷へる心の前に現する假相をいふ。東坡の自注にいふ、來詩云、二見

因妄生と。【五】魯叟 孔子をいふ。叟は長老の稱。東坡の詩に、空餘魯叟乘桴意。【六】瞿曇 佛をいふ。釋迦譜に、淨飯遠

祖、捨國修行、受瞿曇姓、故曰瞿曇氏。涅槃經に、迦毗羅城有釋種子、字、悉達多、姓瞿曇氏、道誠。

【詩意】此間の眞の面白味は、神會にあつて、口に出しては言へないものがある。知者は水を樂しむ、

仁者は山を樂しむ。山水の二樂に、君を并せて是れ三樂である。更に此の仁の力、智の力を煩はして理に背いた虛妄の思想を呵止する。これは要するに孔夫子をして釋氏の事を作さしめるのである。

灤泉亭

灤泉亭

聞道池亭勝兩川。

聞道らく池亭兩川に勝ると、

應須爛醉答雲烟。

應に須らく爛醉雲烟に答ふべし。

勸君多揀長腰米。

君に勸む多く長腰の米を揀び、

消破亭中萬斛泉。

消破す亭中萬斛の泉。

【字解】灤泉 名勝志に、

灤谷在洋縣北三十里、灤水出焉、後

魏之儋城郡以此名、儋水源出三石鏗

山、在三縣北六十里。樂城集に、和灤

泉亭詩云、泉來草木滋、泉去池塘滿、

委曲到三庭、清冷備晨盥。【三】

爛醉 酣醉といふ

に同じ。杜子美の詩に、爛醉是生涯。黃庭堅の文に、爛醉不辭謝而就臥、鼻軒如雷。【四】雲烟 劉孝孫の詩に、飛軒俯三松柏、抗

殿接雲煙。【五】長腰米 王注にいふ、長腰米、漢上米之絶好者、諺云、長腰粳米、縮項鱈魚、皆言其好也。長腰精、酒を醸し

て極めて佳。李賀の憶昌谷山居詩に、長鎗江米熟、小樹棗花香。

【詩意】聞けば、灤泉亭の勝景は、劍南の兩川に勝つて居ると、應に酒を此亭に呼んで酣醉して雲烟に答ふべきである。就いては、君に勸めることがある。多く長腰の米を揀ぶやうに。それは長腰の精は酒を醸すに、極めて佳いからである。既に長腰の米を得て、亭中の萬斛の泉を消破したいものであ

る。(王文誥いふ、句足爛醉之義と。)

吏隱亭

吏隱亭

縱橫憂患滿人間。 縱橫憂患人間に滿つ、
頗怪先生日日閒。 頗る怪む先生日日閒なるを。
昨夜清風眠北牖。 昨夜清風北牖に眠り、
朝來爽氣在西山。 朝來爽氣西山に在り。

の反。閒暇閒居などの閒。後漢、王符傳に、其民間暇、而力有餘。孝經に仲尼閒居。 北牖 北のまど。王侯が涼風至賦に、北牖閒眠、西園夜宴。【五】 爽氣在西山、韓偓の詩に、西山爽氣生襟袖。

【字解】【一】 吏隱 汝南先賢傳、鄭欽の事に出づ。宋之問の詩に、宦遊非吏隱。杜子美の詩に、浣花溪裏花含笑、肯信吾兼吏隱者。【二】 縱橫 唐、盧綸の詩に、川原唯寂寞、岐路各縱橫。【三】 日日閒 閒は忙

【詩意】 縱橫と色色な憂患は、絶えず人間に滿ちて居るのに、先生の日に閒暇無事であるのは不思議である。昨夜、清風が至つて、北の牖で閒かに眠つた。今朝起きて見ると、西山の爽かな氣持が襟や袖に生じた。(王文誥いふ、同一太守也、與可、無時不樂、而公以爲憂、蓋其趨向不同故也と。文與可の吏隱亭詩は、竹籬如雞栖、茅屋類蝸殼、靜几默如禪、往來人不覺といふのである。)

霜筠亭

霜筠亭

解籜新篁不自持。 籜を解く新篁自ら持せず、
嬋娟已有歲寒姿。 嬋娟として已に歲寒の姿あり。
要看凜凜霜前意。 凜凜たる霜前の意を看んと要せば、
須待秋風粉落時。 須らく秋風粉落の時を待つべし。

昇が贈郭桐廬詩に、悲歡不自持。【四】 嬋娟 好き貌。楚辭に、脩竹之嬋娟。文選、嘯賦に、蔭修竹之嬋娟。白樂天が悟眞寺の詩に、亂竹低嬋娟。孟東野の嬋娟篇に、竹嬋娟籠曉煙。【五】 歲寒姿 虞世南の詩に、欲識歲寒性、惟有歲寒知。【六】 凜凜 凄清の貌。唐の方干が詩に、暮見凌雲飄粉籜。

【字解】【一】 霜筠亭 文與可の霜筠亭の詩に、危亭入水深、正坐脩篁裏、坐久寒偏入、暫來須索起。【二】 解籜 鮑明遠の詩に、晚篁初解籜、籜は竹皮。笋の譜に、笋一名初篁。【三】 不自持 文選、任彦

【詩意】 新しい篁の外皮が解れたばかりの時は、見るからに弱くて、自ら維持も出来ないやうである。併し已に歲寒の姿がある。歲寒うして然る後に、松柏の後凋を知る。竹も同じで、未だ杪霜に到らなければ、猶ほ衆卉と雜然として羣を同じうして居る。秋風粉落の後に至つて、始めて其の特操を見るのである。

無言亭

無言亭

殷勤稽首維摩詰。 殷勤稽首す維摩詰、

古今體詩 和文與可洋川園池三十首・吏隱亭・霜筠亭・無言亭

【字解】【一】 無言亭 樂城集に、和無言亭詩云、處世欲無言、事

敢問如何是法門。敢て問ふ如何是れ法門。
彈指未終千偈了。彈指未だ終らず千偈了ず、
向人還道本無言。人に向つて還道ふ本言無しと。

至或未可、惟有此亭空、燕坐聊從我。【一】殷勤、懇懇と同じ。鄭重なる意。維摩經、問疾品に、療治有損、不至增乎、世尊懇懇致問無量。【二】稽首。書經に、王拜首稽

首。荀子、大略篇に、平衡曰拜、下衡曰稽首、至地曰稽顙。頭と腰と衡の平かなるが如きを平衡といひ、頭を屈して地に至るを稽首といふ。【四】維摩詰。淨名と譯す。毗舍離國、毘耶離城の長者にして、釋尊と時代を同じうす。【五】法門。佛門に同じ。維摩經にいふ、何菩薩入不二法門、各隨所樂說之。舊唐書、蕭瑀傳に、梁武帝窮心于釋氏、簡文銳意于法門。【六】彈指。維摩經に、度三百千劫、猶如彈指。印度に於ける時の單位。劫は時の最大單位、刹那は其の最小單位。壯士の一彈指の間には、六十五刹那があるといふ。東坡の詩に、三過門前一老病死、一彈指頃去來今。【七】偈。具には偈陀、釋氏の詩詞、佛の功德を讚美する頌詩の義、漢譯されたものは、多く四句を用ふ。【八】無言。蘇子由の詩、去住只今誰定是、相逢一笑各無言。

【詩意】毘耶離城の長者維摩詰は、鄭重に稽首をなして、さて言ふやう、法門とは是れ如何なるものぞ。法門とは佛道に入る門戸で、彈指の間に佛道が行はれて居る。即ち一彈指の間に、六十五刹那がある。刹那は時の最小單位である。又、其の一彈指の間に、過去・未來・現在があり、そして千偈陀の佛の功德を讚美する頌詩が了るのである。そこで、人に向つて、また道ふのに、佛法の極意は、本來無言で、文字を立てない。(紀昀いふ、氣機一片と。又いふ、此宋格而不嫌宋格者、無言亭、先是宋題、則不得不作宋詩一矣と。)

露香亭

露香亭

亭下佳人錦繡衣。亭下の佳人錦繡の衣、
滿身瓔珞綴明璣。滿身の瓔珞明璣を綴る。
晚香消歇無尋處。晚香消歇して尋ぬるに處なし、
花已飄零露已晞。花は已に飄零し露は已に晞く。

【字解】【一】露香亭。文與可が露香亭の詩に、宿露蒙曉花、阿娜清香發、隨風入懷袖、果日不消歇。

【二】錦繡。戰國策に、不能出其金玉錦繡、取卍相之尊者乎。【三】瓔珞。玉をつなげる頸飾。後漢書、

三韓傳に、瓔珞以綴衣爲飾。西域記に、西域國人、首冠花綵、身衣瓔珞。【四】明璣。左思の吳都賦に、瀟丹明璣。【五】晚香。晚香玉は花の名。一名月下香といふ。暮に開き、朝に斂まりて、香氣が頗る烈しい。夜に入つて尤も馥郁、故に此稱がある。【六】消歇。消えてやむ。文選、鮑明遠が城東橋詩に、容華坐消歇。庾信が詩に、壯情已消歇、雄圖不復申。【七】飄零。文選、謝惠連の雪賦に、從風飄零。新論に、秋葉誠危、因微風而飄零。【八】已晞。詩に白露未晞。同じく小雅、湛湛露斯、匪陽不晞。湛湛は、露茂盛の貌。潘安仁、藉田賦にも、若湛露之晞朝陽。

【詩意】露香亭下の美人は、身に錦繡を纏うて居る。(廬山記に、由天池直下山十五里、洞名錦繡谷、谷中奇花異卉、不可殫述、三四月間、紅紫匝地、如被錦繡とあるが、此詩は、此を用ひたのであらう。)滿身の頸飾は、明璣を綴つて、まことに、美事である。晚香の花も消えやんで、馥郁たる香も尋ねるに所がない。花は已に飄零し、露も已に朝陽に晞いたのである。

涵虛亭

涵虛亭

古今體詩 和文與可洋川園池三十首・露香亭・涵虛亭

水軒花樹兩爭妍。水軒花樹兩ながら妍を争ふ、
 秋月春風各自偏。秋月春風各自自ら偏す。
 惟有此亭無一物。惟此亭あつて一物なし、
 坐觀萬景得天全。坐して觀る萬景の天全を得るを。

【字解】(一) 涵虛亭 欒城集に、和涵虛亭一詩云、虛亭面三疏篁、窈窕衆景聚、更與三坐中人、行尋望三來處。(二) 水軒 劉克莊の詩に、先借三青風一掃三水軒、更呼三涼月一倒三金尊。(三) 花樹 許渾の詩に、楊堤惜別春潮晚、花樹留歡夜漏分。樹は屋あ

る臺。(四) 爭妍 闘妍と同じ。陸游の詩に、野草幽花自闘妍。(五) 萬景 晉、陸雲の南征賦に、端澄形三於萬景。【詩意】水軒と花樹と、何れも美を争つて居る。従つて秋月と春風とは、各自自ら偏つて居る。軒は水の旁に在り、樹は花の上にある。見る所のものは、水の景であり、又、花の景である。故に秋月と春風とに在つて、各自偏つて居る譯である。若し虚を涵せば、則ち一物を著けないのであるから、天全の景でなくて何であらうか。虚を涵すといふ名を帯びた此の涵虚亭、見る所ただ一の亭があるのみで、他に一物もない。坐して萬景の天全を得るを觀るのである。(王文誥いふ、空即是色、莫不有是理也、如必謂三之禪、則大可可笑矣と。)

谿光亭

谿光亭

決去湖波尙有情。決去する湖波尙情あり、
 却隨初日動簷楹。却つて初日に隨つて簷楹に動く。

【字解】(一) 谿光亭 文與可が谿光亭の詩に、橫湖決三餘波、灑灑瀉三寒溜、日景上三高林、清光動三窗牖。

溪光自古無人畫。溪光古より人の畫くなし、
 憑仗新詩與寫成。新詩に憑仗して與に寫成す。

漁舟。憑はより頼む意。仗も憑む意。【詩意】新詩 古詩話に、詩人以畫爲三無聲詩、詩爲三有聲畫。

(二) 簷楹 簷は楹と同じ。ノキ。楹は圓く大いなる柱。(三) 憑仗 鄭谷の蓼花詩に、故鄉歸不得、憑仗繫三

【詩意】谿光亭の眺めをいふと、先づ目に映るは横湖で、谿の水を決して横湖として居る。そして其の波は日光に隨つて以て動き、檐と楹との間に旋つて居る。戀戀として去り兼ねる趣があるから、此を情ありと言つたのであらう。此の溪光は、古より畫にした人がない。畫は古來無聲の詩として居る。それで有聲の畫ともいふべき新詩に頼つて、之を寫し成したのである。(梅聖俞の言に、詩家必能狀三難三寫之景、如三在目前、合不三盡之意、見三於言外、然後爲三至矣とある。有聲の畫の妙處を言つたのである。さて紀昀は此詩を評して、本色語、却極三清楚一と言つて居る。)

過溪亭

過溪亭

身輕步穩去忘歸。身は軽く歩穩かに去つて歸るを忘る、
 四柱亭前野杓微。四柱亭前野杓微なり。
 忽悟過溪還一笑。忽ち溪を過ぐるを悟りて還一笑、
 水禽驚落翠毛衣。水禽驚き落す翠毛の衣。

古今體詩 和文與可洋川園池三十首・谿光亭・過溪亭

【字解】(一) 過溪亭 文與可の過谿亭詩に、小杓過三清谿、有亭纔四柱、地僻少三人行、翩翩下三鷗鷺。(二) 野杓 爾雅に、略杓、獨木橋也。王注に、杓、橫木、渡水也、名三略杓。陸龜蒙の詩に、經三略杓一時冠暫亞、

佩答簪（魚籃）後帶頻揚。又、東坡の詩にも、略横秋水。【三】過谿一笑云云。廬山記に、太平興國寺、流泉匝寺下、入虎谿、昔遠師送客過此、虎則號鳴、時、陶元亮、居栗里山南、陸修靖、亦有道之士、遠師嘗送此二人、與語道合、不覺過之、因相與大笑、今世傳三笑圖、蓋起於此。

【詩意】一身軽く、行歩は穩かに、去つて家に歸るを忘れる。地は僻なるが故に、人の行くこと少く、獨木を横へて、清谿を過ぐ。亭あれども、纔に四柱、故に四柱亭と名ける。昔、遠公は陶元亮、陸修靖と道を談じて、覺えず虎谿を過ぎ、因つて相與に大に笑つた。水禽は定めし笑聲に驚いて、翠毛の衣を落したことであらう。（紀昀いふ、末句渲染有神と。王文誥いふ、今詳翫此語、實從虎號奪胎、可謂變化無迹矣と。）

披錦亭

披錦亭

烟紅露綠曉風香。烟は紅に露は緑にして曉風香しく、燕舞鶯啼春日長。燕は舞ひ鶯は啼いて春日長し。誰道使君貧且老。誰か道ふ使君貧しうして且つ老ゆと、繡屏錦帳咽笙簧。繡屏錦帳笙簧咽ぶ。

傷春詩に、鶯啼燕語荒城裏。【四】春日長。白樂天の牡丹芳詩に、戲蝶雙舞看人久、殘鶯一聲春日長。【五】繡屏。唐薛逢詩に、人倚繡屏一開賞。夜。溫庭筠詩に、繡屏銀鴨香篝深。【六】錦帳。梁簡文帝の詩に、斜燈入錦帳。徐陵の詩に、流蘇錦帳挂香囊。【七】

【字解】一 披錦亭 文與可の

披錦亭詩に、紫紅層若雲、密葉疊如浪、青帝下尋春、滿園開步障。【三】曉風。唐、明皇の詩に、馬色分朝影、雞聲逐曉風。杜常の詩に、曉風殘月入華清。【四】燕舞鶯啼。孟東野の

笙簧。笙のふえの舌。庚信の春賦に、更交笙簧、遷移華柱。

【詩意】披錦亭の眺をいふと、滿園步障を開いたやうで、烟は紅に、露は緑で、曉風も香しい。又、青空には燕が舞ひ、樹には鶯が啼いて、轉た春日の長きを覺えしめる。使君（刺史）は貧しくして且つ老ゆと誰がいふのか。貧しいどころではない、繡屏に倚つて居り、錦帳を繞らして居り、そして笙の笛を弄して居る。（咽笙簧、笙の笛の舌に咽ぶは、笙の笛を弄する意である。）

禊亭

禊亭

曲池流水細鱗鱗。曲池流水細鱗鱗、高會傳觴似洛濱。高會觴を傳へて洛濱に似たり。紅粉翠蛾應不要。紅粉翠蛾應に要せざるべし、畫船來往勝於人。畫船來往人に勝る。

【字解】一 禊亭 司馬彪、續漢禮儀志に、三月上巳、官民並禊、飲於東流水上。樂府集に、和禊亭一詩云、觴流無定處、客醉醒還酌、母令仲御歌、空使三人驚愕。【二】曲池流水。曲水流觴に同じ。舊三月三

日の酒宴をいふ。曲折せる水流に盃を泛へて飲む。【三】鱗鱗。水紋の鱗の状をなせる形容。何遜の下三山詩に、鱗鱗逆去水、瀾瀾（水の流れる貌）急還舟。【四】高會。盛會に同じ。史記、高祖紀に、置酒高會。【五】似洛濱。竹林七賢論に、王濟嘗解禊洛水。晉書、夏統傳に、統詣洛、三月上巳、洛中王公已下、並至浮橋、士女駢填、車服燭路。晉、束皙傳に、武帝問三曲水之義、晉進曰、昔、周公城洛邑、因流水以泛酒、故逸詩云、羽觴隨波。又、秦昭王以三日置酒河曲、見金人奉水心之劍、曰令三君制有西夏、乃霸諸侯、因此立爲三曲水、二漢相緣、皆爲盛集。文選、顏延年應詔燕三曲水詩に、李善曰、水經注云、舊樂遊苑、宋元嘉十一年、以其地爲三曲水、文帝引流轉酌賦詩。【六】紅粉翠蛾。鄭雲叟の詩に、翠娥紅粉嬋娟女、殺盡世人一人不知。李太白の

古今體詩 和文與可洋川園池三十首 披錦亭 禊亭

贈三楚司馬詩に、百尺清潭寫翠娥。【七】畫船 畫舫 畫舸に同じ。白樂天の詩に、春池八九曲、畫舫兩三艘。東坡の詩に、全家依畫舫、極目亂紅粧。五代史、前蜀世家に、龍舟畫舸、照耀江水。

【詩意】 晉の永和九年三月三日、王羲之は、文人を會稽山陰の蘭亭にあつめ、曲水流觴の遊をなした。其の蘭亭集の序に、此地有崇山峻嶺、茂林脩竹、又有清流激湍、映帶左右、引以為流觴曲水、今、此の禊亭の波に隨つて觴を傳へる盛會は、洛水の濱の宴遊によく似て居る。李太白の詩に百尺清潭寫翠娥とあるが、禊亭曲水の宴には、必ずしも紅粉翠娥の美人を要しない。畫舫・畫船の來往して、人の目を樂しましめることは、粉黛の美人に勝つて居る。

茵茗亭

茵茗亭

日日移牀趁下風。 日日牀を移して下風を趁ふ、

清香不斷思何窮。 清香斷えず思何ぞ窮まらん。

若爲化作龜千歲。 若爲化して龜千歲と作り、

巢向田田亂葉中。 巢うて田田たる亂葉の中に向はん。

下方の義。左傳、僖公十五年に、羣臣敢在下風。【四】清香 韓偓の詩に、卷荷忽被微風觸、瀉下清香露一杯。【五】若爲 いかでと訓す。如何なり。晉信若爲通、若爲看去風、鄉愁など用例多し。【六】化作龜千歲 柳子厚の詩に、若爲化作身千億、偏上三峰頭、望故鄉。史記、龜策傳に、有三神龜、在江南嘉林中、常巢於芳蓮之上。又いふ、余至江南、長老云、龜千歲乃遊蓮葉之上。抱朴

【字解】 茵茗亭 蓮の花。

爾雅に、荷、芙蕖、其華、茵茗。文與可の茵茗軒詩に、朝陽媚秋漪、茵茗隔深竹、誰開翠錦幃、無限點銀燭。【三】移牀 庾信の詩に、隔花遙勸酒、就水更移牀。【四】下風 勸酒、就水更移牀。【五】若爲 いか

子に、千歲龜、浮於蓮葉之上、或在叢著之下。【七】田田 荷葉の水に浮べる貌。樂府、江南曲に、江南可採蓮、蓮葉何田田。李商隱の詩に、荷葉正田田。

【詩意】 蓮の花の亭、花を愛し、花を隔てて相語る。水に臨み水に就いて牀を移す。日日牀を移しては、下方を趁うて居る。卷荷は忽ち微風に觸れて、清香を瀉ぎ出す。清香は斷えないで、思は何ぞ窮りあらうぞ。いかでか、化して龜千歲と作り、巢うて田田たる蓮の亂葉の中に向はん。(田田は、荷葉の水に浮べるを形容した言葉である。樂府、江南曲に、江南可採蓮、蓮葉何田田とある。)

茶蘼洞

茶蘼洞

長憶故山寒食夜。 長も憶ふ故山寒食の夜、

野茶蘼發暗香來。 野茶蘼の發いて暗香の來りしを。

分無素手簪羅髻。 素手の羅髻に簪するなきを分とし、

且折霜蕤浸玉醅。 且つ霜蕤を折りて玉醅に浸す。

て、疾風甚雨あり、之を寒食といふ。清明節の前二日。【四】暗香 何處からとなく來る香。許渾の詩に、高竹動疎翠、早蓮飄暗香。林逋の詩に、疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏。【五】素手 白く美しい手。古詩に、娥娥紅粉妝、纖纖出素手。【六】羅髻 髻は總髮。髮を頭上にあつめて束れたるもの。【七】霜蕤 說文に、蕤、草木華垂の貌。【八】玉醅 醅は酒の未だ漉さないもの。【詩意】 平生夢寐の間に往來するものは、父母の地であつて、長も故山の寒食の夜、野茶蘼が開いて、

古今體詩 和文與可洋川園池三十首 茵茗亭 茶蘼洞

【字解】 茶蘼 蔓生の灌木。

樂城集に、和茶蘼洞詩に、猗猗翠蔓長、藹藹繁香足、綺席墮殘英、芳樽瀉餘醴。【二】長憶故山 一本、半雨半晴に作る。【三】寒食 荆楚歲時紀に、冬至の後、一百五日にし

何處からとなく香が來つたことを憶ひ出すのである。白く美しい手で頭髮に簪を挿すことも、今の我身にはないから、暫く白い葦草でも手折りてよい酒に浸すことでもしよう。

【餘録】 王文誥いふ、曉嵐（紀昀をいふ）論、和洋州詩、每謂、寄題詩、不便、全著、自己、此固哉高叟之說也、（孟子、告子篇に、固哉、高叟之爲、詩也とある。固は固陋、執滯して通ぜざるをいふ。爲詩は猶ほ説詩といふが如し。）一題作三十首、非一題作三三首者可比、何死法之足論乎、且與可、只有老妻、竝無三姬侍、亦蜀人也、此詩、本意就與可論、亦恐道治平末、同與可在蜀之事、不可死看也、彼以爲理法細密、我以爲眼界窄塞、識者辨之と。

質簞谷

質簞谷

漢川修竹賤如蓬

漢川の修竹賤うして蓬の如し、

斤斧何曾赦籜龍

斤斧何ぞ曾て籜龍を赦さん。

料得清貧饒太守

料り得たり清貧の饒太守、

渭川千畝在胸中

渭川の千畝胸中に在ることを。

【字解】 一、質簞谷 陝西、洋縣の西北に在る。谷中に竹多し。名勝志に、質簞谷在洋縣城西北五里。質簞は大竹の名、射筒となすによるし。柳宗元、柳州山水記に、質簞湖間、皆有之。異物志に、質簞生水邊、長數尺、圍一尺五六寸、一節相去六七寸、廬陵界有之、始興（江名）以南尤多。【二】漢川 宋の縣名。故城は今の湖北漢川縣北に在る。【三】修竹 長く延びた竹。北史、柳弘傳に、修竹夾池。【四】斤斧 をの、まさかり。大なるを斧といひ、小なるを斤といふ。斧斤といふに同じ。淮南子に、草木未落、斤斧不得入山林。孟子、梁惠王篇に、斧斤以時入山林。【五】籜龍 籜龍兒は竹子。

朱喬年の詩に、一雷驚起籜龍兒。盧仝寄男詩に、竹林吾最惜、新筍好看守、萬籜抱龍兒、攢迸溢林藪、吾眼恨不見、心腸痛如撈、籜龍正稱寤、莫殺入汝口、丁寧囑付汝、汝活籜龍否。【六】清貧饒太守 傳燈錄に、寧可清貧自樂、不作濁富多憂。饒は食物を食る意。【七】渭川千畝 史記、貨殖傳に、渭川千畝竹、此其人與千戶侯一等。

【詩意】 漢川縣には竹が多い。長く延びた竹も價が賤くて蓬のやうである。草木未だ落ちざれば、斤斧、山林に入るを得ずといふが、斤斧、何ぞ曾て籜龍兒を赦さうぞ、片端から掘つて食用に供する。文與可には、竹の多い地に太守となつて居らるるが、料り得たり、清貧にして而も平生食物を食る太守の胸中には、渭川千畝の竹があることを。（東坡嘗て文洋州の爲に、質簞偃竹記を作つていふ、余詩、料得清貧饒太守、渭川千畝在胸中、與可、是日與妻游谷中、燒籜筍晚食、發函得此詩、失笑、噴飯滿案と。さて、文與可の質簞谷の詩は、千輿翠羽蓋、萬綺綠沈槍、定有葛陂種、不如何處藏。又、鑿城集、和質簞谷詩にいふ、誰言使君貧、已用谷量竹、盈谷萬萬竿、何曾一竿曲と。）

寒蘆港

寒蘆港

溶溶晴港漾春暉

溶溶たる晴港春暉を漾はし、

蘆筍生時柳絮飛

蘆筍生ずる時柳絮飛ぶ。

還有江南風物否

還江南の風物ありや否や、

桃花流水鯉魚肥

桃花流水鯉魚肥えたり。

古今體詩 和文與可洋川園池三十首 質簞谷 寒蘆港

【字解】 一、寒蘆港 蘆は冬の初に枯れて、花さく。之を賞して寒蘆港と名く。港は水派、溝の類。文與可が寒蘆港の詩に、落月照冰壺、曉氣何太爽、兩岸雪煙昏、鳧鴨出深港。【二】溶溶 水の盛に流れる貌。

劉向の九歎に、揚流波之潢潢兮、體溶溶而東回。杜牧之が阿房宮の賦に、二川溶溶、流入三宮。【三】春暉 李白の詩に、晴窗綠柳、相逢且欲醉春暉。【四】蘆筍 蘆牙に同じ。あしの根に生ずるめげえ。張籍の詩に、南塘水深蘆筍齊。【五】柳絮飛 柳の實の熟して飛散する。晉書、王凝之妻謝道韞傳に、謝安嘗內集、俄而雪驟下、安曰、何所似也、安兄子朗曰、撒鹽空中、差可擬、道韞曰、未若柳絮因風起。【六】桃花流水 桃の花の開く頃、河水融解して、水勢暴漲する、之を桃花水といふ。永衡記に、黃河二月三月水、名桃花水。續仙傳に、張志和が漁父詞に、西塞山邊白鷺飛、桃花流水鱖魚肥。【七】鯢魚 玉鶻に、刀魚也。刀魚は、身狭く薄く、頭は長い。恰も刀の形をなせるよりいふ。

【詩意】溶溶として流れる晴港の水は、春の光を濼はして居る。蘆の芽生がする時分に、柳の綿のやうな雪が亂れ飛ぶ。以上二句の景の外に、更に又、江南の風物ありや否や。(斯やうに問ひかけて、従つて江南の風物を舉げる)曰く、桃花の開く頃の暖かい水や鯢魚は、皆、江南の賞すべきものである。(山海經に據るに、鯢は狹薄にして長頭、大なるものは長尺餘、一名は刀魚ともいふ。三月八月を以て出づ。故に順時といふ云云とある。)桃花水の時分は、鯢魚はまさに肥えて居る。

野人廬

野人の廬

少年辛苦事犁鋤。少年辛苦犁鋤を事とし、

剛厭青山遠故居。剛に厭ふ青山の故居を遠るを。

老覺華堂無意味。老いて覺る華堂の意味なきを、

【字解】【一】野人廬 文與可、野人廬詩に、蕭條野人廬、籬巷雜蓬蒿、每三二過衡門、歸心爲之起。【二】

辛苦 左傳、昭公三十年に、子西諫

却須時到野人廬。却つて須らく時に野人の廬に到るべし。

曰、吳光新得國、而親其民、親民如子、辛苦同之、將用之也。

【三】犁鋤 犁は牛馬に牽かせて耕す農具。鋤は草を去る耕具。杜子美の詩に、歸來輒擬荷鋤犁。韓退之の贈唐衢詩に、手把鋤犁、餓三空谷。【四】剛 マサニと訓す、詩に用ふる俗語、適然の意。【五】華堂 李太白の詩に、好鳥集嘉木、高才列華堂。杜牧之の詩に、華堂今日綺筵開、誰喚三分司御史來。【六】野人廬 柳子厚の韋使君の詩に、稍窮樵客路、遙駐野人居。

【詩意】少年の時は、辛苦力を勞して、ただ耕作を事としたので、まさに青山の故居を遠るのを厭つたものである。老い來つては華堂の全く意味のないことが解かつた。却つて須らく時に野人の廬に到るべきである。(王注に、方在田畝、見青山、爲可厭、爲官則思野樂と。此詩は此意を敷衍したものである。紀昀いふ、淺語却真と。)

此君庵

此君庵

寄語庵前抱節君。語を寄す庵前の抱節君、

與君到處合相親。君と到る處合に相親しむべし。

寫真雖是文夫子。眞を寫すは是れ文夫子と雖も、

我亦眞堂作記人。我も亦眞堂記を作る人。

曰、何可一日無此君耶。

【三】抱節君

竹の異名。

張正見が階前嫩竹の詩に、欲知抱節成龍處。【三】寫眞 杜子美の丹青引

古今體詩 和文與可洋川園池三十首・野人廬・此君庵

【字解】【一】此君庵 文與可の

此君庵の詩にいふ、叢筠裏園欄、欄は大木、浮影碧如水、誰深愛君心、過橋先到此。此君は、竹の異名。晉書、王徽之傳に、嘗寄居空宅中、便令種竹、或問其故、但嘯詠指竹

に、必逢佳士亦寫真。

【詩意】王徽之は竹を指して、何ぞ一日も此君なかるべけんやと言つた。此君庵の前に在る竹君に言葉を送る、君とは到る處で、まさに相親しむべし。文夫子（與可）は、能く竹を畫いて眞を寫すが我も亦、眞堂記を作る人である。（王注にいふ、名竹爲抱節君、先生之新語也、與可畫竹、名之曰墨君、有堂焉、先生作墨君堂記と。紀昀は此詩を評して波峭多姿と言つた。）

金橙徑

金橙徑

金橙縱復里人知。

金橙縱ひ復里人知るも、

不見鱸魚價自低。

鱸魚を見ざれば價自から低し。

須是松江烟雨裏。

須らく是れ松江烟雨の裏に、

小船燒薤擣香齏。

小船薤を燒いて香齏を擣くべし。

【字解】（一）金橙徑 舊本に、香橙徑に作る、王文誥いふ、公詩亦作金橙、則題作香橙徑、似誤、今更正。文與可が金橙徑の詩に、金橙實佳果、不爲土人重、上苑聞未多、誰能爲移種。藥城集、和金橙徑詩に、葉如石梅堅、實比霜柑大、穿徑得新苞、合公憶鱸膾。【二】鱸魚 晉書、張翰傳に、翰因秋風起、思吳中菰菜、蓴羹、鱸魚膾。鄭谷詩に、秋風不致憶鱸。【三】松江 吳松江（今の江蘇、華亭縣）には鱸魚を産す。赤壁賦に、巨口細鱗、狀如松江之鱸。【四】烟雨裏 杜牧之の江南春詩に、南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中。【五】薤 おほいら。葱に似た葷菜。【六】齏 あへもの。種種の味を合せ調へた料理。

【詩意】蘇子由の詩に、漂泊江南春欲盡、金橙彷彿慰人心とある。金橙は江南の珍味である。金橙

はたとひ、里人が之を賞美しても、鱸魚を見なければ、價は自から低い。鱸魚の膾、金橙の齏、相待ちて美味をなすのである。須らく是れ鱸魚の産地である吳松江の煙雨の中、小船に坐し、薤を燒いて香齏を擣くべきである。（王注にいふ、鱸魚所ニ以爲膾、金橙所ニ以爲齏、松江之鱸、江南所稱也、此爲金齏玉膾云云と。大業拾遺記にいふ、吳郡獻松江鱸魚膾、須三九月霜下之時、鱸魚白如雪、取三尺以下者作之、以香菜花葉相間、和以細縷金橙食之、所謂金齏玉膾東南之佳味也と。）

南園

南園

不種天桃與綠楊。

天桃と綠楊とを種るすんば、

使君應欲候農桑。

使君應に農桑を候することを欲すべし。

春疇雨過羅紈膩。

春疇雨過ぎて羅紈膩かに、

麥壠風來餅餌香。

麥壠風來つて餅餌香ばし。

翠楊といふに同じ。王融の詩に、淇上綠楊稀。【四】春疇 一本に桑畦に作る。【五】羅紈 羅鐵論に、羅紈文繡。羅は帛の美なるもの。紈は素である。【六】麥壠 一本に夏壠に作る。壠は田中の高い處。【七】餅餌 急就篇に、餅餌麥飯甘豆羹。

【詩意】此詩は勸農をいひ、暗に太守に切ならしめて居る。天天たる桃の木と緑の楊とを種るなければ、使君（太守）は應に農桑の事を務めるを欲するであらう。（彼を抑へて、此を揚ぐ。そして重きこ

とは下の聯にある。春の晴に雨が過ぎて、羅紉が肥えた。桑と言はないで、羅紉と言つたのは、桑の用である。夏の壠に風が來つて、餅餌が香しい。麥と言はないで、餅餌と言つたのは麥の用である。【餘録】宋の釋惠洪が冷齋夜話に、荆公詩、綠成白雪、桑重綠、割盡黃雲、稻正青、東坡詩、春畦雨過羅紉賦、夏壠風來餅餌香。如下華嚴經、舉果知因、譬如蓮花、方其吐花、而果具蕊中、造語之工、至此盡古今之變一とある。

北園

北園

漢水巴山樂有餘

漢水巴山樂み餘あり、

一麾從此首歸塗

一麾此より歸塗に首はん。

北園草木憑君問

北園の草木君に憑つて問ふ、

許我他年作主無

我に他年主と作ることを許さんや無や。

勝志に、漢中府、洋縣、東連襄漢、南蔽巴蜀、又いふ、漢山在漢中府西南二十里、北距漢水、南接巴山。【三】巴山、大巴山ともいふ。陝西西鄉縣西南に在る。【四】一麾、王注にいふ、一麾字、顏延年詠阮始平詩、屢薦不入官、一麾乃出守、本言麾去之塵。杜牧詩云、欲把一麾江海去、乃誤以爲旌麾之塵、今先生卻用杜牧詩。王文誥いふ、顏延年詩、作塵旌、解義亦通。【五】歸塗、歸路に同じ。隋、孔德紹詩に、今日桃源客、相顧失歸塗。

【詩意】東漢水は洋洋として、漢中・興安・鄖陽・襄陽・安陸・漢陽の六府の境を流れて大江に入る。大巴

【字解】【一】北園、樂城集、和北園二詩に、使君美且仁、徧地種桃李、豈獨放春花、行看食秋子。

【二】漢水、東漢水ともいふ。舊漢中・興安・鄖陽・襄陽・安陸・漢陽・六府の境を流貫して、江に入る大川。名

山は、漢江に臨み、三峽に接す。山南は、即ち古の巴國である。漢水・巴山、遊覽の樂み之餘ある。一たび磨いて、此より歸路に向はうと思ふ。就いては、試みに君に憑つて北園の草木に尋ねて見たいことがある。それは別でもない、他年、我が來つて、此土の主となるを許してくれるか、どうかである。

【餘録】紀昀いふ、三十首、各自爲意、然湖橋一首、確是總起、此首確是總結、而又各自還本位、不著痕迹、此布局之妙也。王文誥いふ、但南園北園、非游覽地、知州勸農處也、每三月至園、散父老酒食、謂之開園、故二題獨殿後、曉嵐(紀昀)未通全部、而所論近是、已仁至義盡矣。

寄題刁景純藏春塢

刁景純の藏春塢に寄題す

白首歸來種萬松、白首歸り來りて萬松を種ゑ、
待看千尺舞霜風、待ち看る千尺霜風に舞ふを。

年拋造物陶甄外、年は造物陶甄の外に抛ち、
春在先生杖屨中、春は先生杖屨の中に在り。

楊柳長齊低戸暗、楊柳長齊戸に低れて暗く、
櫻桃爛熟滴階紅、櫻桃爛熟階に滴りて紅なり。

何時却與徐元直、何れの時か却つて徐元直と、

何時却與徐元直、何れの時か却つて徐元直と、

古今體詩 和文與可洋川園池三十首・北園 寄題刁景純藏春塢

【字解】【一】寄題、其の地に至らないで、其の状況を想像して作り寄するをいふ。

【二】刁景純、刁約字は景純。丹陽の人。宋の康定中、歐陽永叔と同じく館閣に在りて禮書を修む。後、史館に直し、浩然として山林の志あり。冠を掛けて歸り、室を潤州に築き、藏春塢と號し、日

日其中に游息す。【三】陶甄、埴をこれて陶器を作る。揚子に、甄、陶天

共訪襄陽龐德公。 共に襄陽の龐德公を訪はん。

區夏、陶甄萬方。何晏が景福殿の賦に、甄陶國風。張華が女史箴に、茫茫造化、兩儀始分、散氣流形、既陶且甄。【四】楊柳長齊云云。白樂天が夢游春詩に、門柳暗全低、簷櫻紅半熟。【五】爛熟。陸游の詩に、世態十年看爛熟。【六】徐元直。嘗て諸葛亮を昭烈に薦む。曹操、其の母を獲るに及び、庶、昭烈に謂て曰く、本、將軍と事を謀らんと欲す。今、老母を失つて方寸亂る。請ふ此れより辭せんと。司馬徽、清雅にして善く人を知る。昭烈、士を徵に訪ふ。徽曰く、諸葛孔明、龐士元なりと。時に龐德公も亦、善く品藻し、徽を稱して水鏡となす。【七】龐德公。荊州刺史劉表、しげしげ延請すれども屈せず。乃ち就いて之を候す。龐公、隴上に耕し、妻、前に饋す、相敬する賓の如し。表問うて曰く、先生、官祿を受くるを肯んぜず、將、何を以て子孫に遺すかと。公曰く、人皆之に遺すに危を以てす。我獨り、之に遺すに安を以てすと。

【題義】此詩は熙寧九年、東坡が四十一歳の時の作。時に東坡は密州に在り、祠部員外郎に遷り、十二月、移つて徐州に知となつた。刁景純は、時に年八十二。王文誥いふ、此後無復有與景純唱和詩矣と。

【詩意】刁景純が藏春塢の前には、岡があつて、皆、松を種ゑて居る。之を萬松岡といふ。東坡詩ありいふ、與君栽插萬松岡と。松を種ゑて千尺の長きに至り、霜風の中に、舞ふやうになるまでには、十年や二十年では、到底望まれない。まして白首となつて歸り來り、はじめて之を種ゑたるに於ては、なほ更のことである。(これは長生の意を言つたのであらう。衆人は、皆、造物が陶甄、陶甄とは、萬物を造り出すことである。其の作用の中に在るなれど、景純はさうではない。其の長壽は、人に過ぎ超えて居る。これは要するに、流年を陶甄の外に抛つたものである。(起句より此に至る三句は、共に一

意である。此の次の三句は、皆、藏春のことをついふ。)それで景純は春は杖屨の中に在つて自然を友として居る。藏春塢は、景純の樂地である。其の景物をいふと、楊柳は長く齊しく戸に低れて暗い。櫻桃は爛熟して階に滴つて紅である。何れの時か徐元直と共に襄陽の龐德公を訪問しようぞ。(これは東坡が自らを司馬德操に比し、景純を以て龐德公に比したのである。徐庶(字は元直)司馬徽(字は德操)及び諸葛孔明などは、皆、龐德公に従つて益を受けた人人である。そして德公(字は山民)は鹿門山に隠れた君子である。)

【餘録】龐德公は南郡襄陽の人、岷山の南に居て、未だ嘗て城府に入らず。襄陽記に詳かなり。襄陽記に、諸葛孔明每至德公家、獨拜三牀下、德公初不令止。司馬德操、嘗詣德公、值其渡沔上冢、德操徑入其室、呼德公妻子、使速作黍。徐元直向云、當來就我與德公談、其妻子皆、羅拜堂下、奔走共設、須臾、德公還直入相就、不知何者是客也。唐宋詩醇の評に、三四一聯、句法獨創、後人效之、未免學步邯鄲、至五六一聯、軾乃脫化張謂春園家宴詩、櫻桃解結垂檐子、楊柳能低入戶之句、今注詩者、乃引白居易夢游春五言云、門柳暗全低、簷櫻紅半熟、而不引張詩、既爲未諳源委、且奈下何舍盛唐而述中唐也と見えて居る。又、王直方の詩話にいふ、東坡作藏春塢詩、有二年拋云云之句、而秦少游作兪充哀詞、乃云、風生使者旌旄上、春在將軍俎豆中、余以爲倣太甚と。

玉盤盃二首 并序

玉盤盃二首 并序

東武舊俗。每歲四月。大會于南禪資福兩寺。以芍藥供佛。而今歲最盛。凡七千餘朵。皆重跗累萼。繁麗豐碩。中有白花。正圓如覆盃。其下十餘葉。稍大承之。如盤。姿格絕異。獨出於七千朵之上。云得之于城北蘇氏園中。周宰相莒公之別業也。而其名俚甚。乃爲易之。

【訓讀】東武の舊俗、每歲四月に、大に南禪・資福兩寺に會し、芍藥を以て佛に供す。而して今歲最も盛に、凡そ七千餘朵、皆重跗累萼、繁麗豐碩、中に白花あり、正圓にして覆盃の如し。其の下十餘葉、稍大にして之を承くる盤の如し。姿格絶異、獨り七千朵の上に出づ。云ふ、之を城北蘇氏の園中に得と。周宰相莒公の別業なり。而して其の名俚甚だし、乃ち爲に之を易ふ。

【字解】【一】玉盤盃 芍藥の覆盃の如きより名く。牡丹にも、玉盤妝あること、洛陽花木記に見ゆ。【二】重跗累萼 跗は草木の實の殼(子房)、萼は花のうてな、花被の外側の部分。【三】豐碩 宋史、張齊賢傳に、齊賢姿儀豐碩、議論慷慨有二大略。【四】姿格 厚德錄に、李丞相沆有二世僕、連宅金數十千、遁去、有女將三十歲、美姿格、自寫一券、繫于帶、願賣于宅、以償焉、丞相大憫之。【五】莒公 王注に、莒公、即蘇禹珪也、爲周相、後周、廣順元年罷。【六】別業 別墅に同じ。南史、謝靈運傳に、修營別業。傍レ山帶レ江、盡幽居之美。

雜花狼藉占春餘

雜花狼藉として春餘を占むるも、

【字解】【一】狼藉 紛亂の意。

芍藥開時掃地無。芍藥開く時地を拂うて無し。

兩寺粧成寶瓔珞。兩寺粧ひ成す寶瓔珞、

一枝爭看玉盤盃。一枝争ひ看る玉盤盃。

佳名會作新翻曲。佳名會す新翻曲と作らん、

絕品難逢舊畫圖。絶品逢ひ難し舊畫圖。

從此定知年穀熟。此より定めて知る年穀の熟すること、

姑山親見雪肌膚。姑山に親しく雪の肌膚を見る。

歐陽修の詩に、杜家花雖非絶品、猶可開顏爲之飲。【五】姑山、雪肌膚 莊子逍遙遊篇に、藐姑射之山、有神人人居焉、肌膚若氷雪、渾約若處子、其神凝、使物不疵癘、而年穀熟也。

【題義】此詩は熙寧九年四月の作である。東武には、毎年四月、芍藥を佛に供する風俗がある。今年は花が盛に南禪・資福の二寺に開いたので、東坡は美事な一朵を取り、玉盤盃と名けた。美しい姿は、他衆の及ぶ所ではない。そこで此の二首を作つたのである。

【詩意】色色の花は、咲き亂れて、晩春の花壇を占めて居たが、芍藥の開く時分は、何れも凋んで、地を掃つて無くなつた。南禪寺、資福寺では、四月の佛會に澤山な芍藥を佛に供する。重つた子房、花の萼、其の美事なことは、恰も寶瓔珞を垂れて、寶鈴が無數に其の上に懸つて居るがやうである。(瓔珞)

史記、滑稽傳に、履馬交錯、杯盤狼藉。【二】寶瓔珞 西域の人、身に佩ふる裝具。頭に在るを瓔といひ、身に在るを珞といふ。法華經に、有七寶塔、從地湧出、無數幢幡、以爲嚴飾、垂寶瓔珞、寶鈴萬億而懸其上。【三】佳名 陶淵明が斜川詩の序に、有愛佳名、欣對不足、李商隱の詩に、佳名留渭川。【四】絶品 宋史、食貨志に、皆、絶品也。

瑤は身に佩ぶる飾のことで、頭にあるを璣といひ、身にあるを瑤といふ。其の中でも、白い花の一枝がある。形は正圓で覆盃（盃は鉢）のやうで、下に十餘葉が之を承けて居るのは、盤のやうである。玉盤盃の名は、まことに空しくない。佳名を撰んだので、必ず新翻の曲も出来よう。絶品は逢ひ難き舊畫圖であるが、忽ち麗日に鮮色を籠め、和風が異香を散ずる。やがて綠葉は陰を成して花も子を結ぶ。此より定めて年穀の熟することと信ずる。そして姑射山に親しく雪の肌の人を見るのである。（莊子に據ると、藐たる姑射山に神人がある。肌は氷雪の如く、綽約として處子の如し。風を吸ひ露を飲み、五穀をば食はない、雲に乗り、龍に御し、そして四海の外に遊ぶ。又、其の神人の精神は、凝り定まつて、何事に遇ふも、決して動くことなく、其の住める處は、百物疵癘の患なく、五穀豊熟の樂がある。此詩の結句は、此故事を用ひたのである。）

花不能言意可知。

花言ふこと能はざるも意知るべし、

令君痛飲更無疑。

君をして痛飲せしめて更に疑ふ無し。

但持白酒勸佳客。

但白酒を持して佳客に勸め、

直待瓊舟覆玉彝。

直ちに瓊舟の玉彝を覆ふを待つ。

負郭相君初擇地。

負郭の相君初めて地を擇び、

【字解】(一) 痛飲 劇飲に同じ。

世説、任誕に、痛飲酒、熟讀離騷、便可稱名士。(二) 白酒 梁武帝

の詩に、玉盤著朱李、金杯盛白酒。

(三) 瓊舟覆玉彝 周禮に、六彝皆有舟。六彝は雞彝・鳥彝・兪彝・黃彝・虎彝・雉彝をいふ。彝は酒樽、

看羊屬國首吟詩。

看羊の屬國首めて詩を吟ず。

吾家豈與花相厚。

吾が家豈花と相厚きか、

更問殘芳有幾枝。

更に問ふ殘芳幾枝あると。

舟は尊の下臺、今の承盤の如きものである。(四) 負郭相君 負郭は、

城に近くして、よく肥えた田。史記、蘇秦傳に、蘇秦既約六國從、爲三從

約長、并相六國。又、使三晉有洛陽

負郭田二頃、吾豈能佩三六國相印乎。

【五】看羊屬國云云 漢書に、蘇武使匈奴、欲降之、知武終不可屈、乃徙武北海無人處、

牧羊、武仗漢節、牧羊、臥起操持、節旄盡落、後歸拜典屬國。典屬國は、古、夷狄の事を掌る官名。

【詩意】花は語らないが、其の意の在る所は、よく知れる。即ち君に十分酒を飲ませて、更に疑ふ所

がないやうに思はれる。ただ白酒をば佳客に勸め、其の飲み乾かして、瓊舟に酒樽を覆ふの時を待つ

のである。吾をして洛陽負郭の田二頃あらしめば、豈、能く六國の相印を佩びんやと言つた蘇秦は、

初めて地を擇び、從約の長となり、六國に并せ相となつた。又、匈奴に使用して、屈せず、十九年の間、

漢節を持して辛苦した蘇武も、漢が匈奴と和親したので、還ることが出来た。其の時、河梁の別を愴

み、李陵と五言の詩の唱和があつた。玉盤盃は、之を城北の蘇氏園中に得たのであるから、蘇秦や蘇

武の故事を引用したのである。(査初白いふ、拈蘇字、痕迹不化と。)蘇氏の園、蘇家の花、我家は、な

んと花と縁の厚いのであるか。更に問ふ、殘花は、なほ幾枝あるかと。

【餘録】姑谿題跋にいふ、東坡守東武、得異花於芍藥品中、既名之、又賦二詩、以志其事、崇寧(宋

徽宗の年號)四年、傅君仲訓、偶出花圖、相示、而東坡小楷二詩、在其下、蓋當日本也、予得此花、

又見其字、泫然流涕、因次其韻。姑谿集の懷舊詩にいふ、陳迹回頭似夢餘、花應長好但人無、詩成固已名千古、墓上誰傾飯一盂、流落丹青驚始見、形容筆墨竟難圖、公孫自是天同派、謾說周人載碩膚、第二首にいふ、花存人往祇天知、目暗心搖卻自疑、尙向漢廷傳詔令、如下登魯廟、見中樽彝、一時鸚鵡娛賓賦、百世甘棠美召詩、安得殘春逢海上、盡傾衰淚灑新枝。

和潞公超然臺次韻

潞公の超然臺に和して韻に次す

我公厭富貴、常苦勳業尋。

我が公は富貴を厭ひ、常に苦しむ勳業の尋ぐを。

相期赤松子、永望白雲岑。

相期す赤松子、永く望む白雲の岑。

清風出談笑、萬竅爲號吟。

清風は談笑に出で、萬竅爲に號吟す。

吟成超然詩、洗我蓬之心。

吟じて超然の詩を成し、我が蓬の心を洗ふ。

嗟我本何人、麋鹿強冠襟。

嗟我本何人ぞ、麋鹿強ひて冠襟。

身微空志大、交淺屢言深。

身は微にして空しく志大に、交は淺くして屢言深し。

囑公如得謝、呼我幸寄音。

公に囑す如し謝するを得ば、呼我は幸に音を寄す。

但恐酒錢盡、煩公揮橐金。

但恐る酒錢盡き、公を煩はして橐金を揮ふを。

【字解】

【一】潞公 東都事略に、文彦博、字は寬夫、汾州介休の人。嘉祐中、河陽三城節度使、同平章事を以て潞國公に封ぜらる。宋史本傳に、位將相五十餘年、徧歷公孤兩以太師致仕、元豐中居洛陽、與富弼等十三人爲耆英會。

【二】超然臺 子由超然臺賦略にいふ、子瞻守高密、因其城上之廢臺、而增葺之、以告轍曰、將何以名之、轍曰、天下之士、奔走於是非之場、浮沈於榮辱之海、囂然盡力、而忘反、亦莫自知也、而達者哀之、非以其超然不累於物耶、老子曰、雖有榮觀、燕處超然、試以超然名之可乎、乃爲之賦。

【三】勳業 宋史、韓琦傳に、琦與范仲淹、富弼、皆以海內人望、同時登用、中外跂想其勳業。

【四】赤松子 仙人の號。神農の時、雨師となること、劉向列傳に見ゆ。

【五】白雲 莊子、天地篇に、乘彼白雲、至於帝鄉。東坡の潮州韓文公廟碑に、公昔騎龍白雲鄉、手扶雲漢二分天章。

【六】清風 詩、大雅に、吉甫作頌、穆如清風。東坡、赤壁賦に、清風徐來、水波不興。

【七】談笑 孟子、告子篇に、越人關弓而射之、則已談笑而道之。

【八】萬竅爲號吟 莊子、齊物論に、大塊噫氣、其名爲風、是唯無作、作則萬竅怒呬。萬木の穴、風を受けて鳴り響く。

【九】蓬之心 莊子、逍遙游に、夫子猶有蓬之心也夫。其心を茅塞する義。心の邪に比す。

【一〇】麋鹿 麋は鹿の大なるもの。孟子、梁惠王篇に、樂其有麋鹿魚鼈。晉、陸雲傳に、山鹿野麋。

【一一】志大 毛詩傳に、志大心勞、所以求者、非其道也。

【一二】交淺屢言深 史記、范雎傳に、何交疏而言深也。後漢、崔駰傳に、交淺而言深者愚也。戰國策に、客有見人於服子者、服子罪之曰、交淺而言深、是亂也。客曰、不、然、交淺而言深也、昔者、堯見舜於草茅之中、桑陰移而受天下傳、使交淺者、不可深談、則天下不傳也。

【一三】得謝 禮記に、大夫七十而致事、若不得謝、則必賜之几杖。

【一四】寄音 陸機の詩に、歸雲難寄音。

【一五】酒錢 杜子美の戲簡鄭廣文詩に、頼有蘇司業、時時與酒錢。

【一六】揮橐金 古詩に、揮金留上客。杜子美の詩に、揮金應物理。文選、張景陽、詠史の詩に、揮金樂當年、歲暮不留儲。漢書、陸賈傳に、出所使越橐中裝、賣千金二分其子。蔡襄の詩に、橐金均散心如水。

【題義】

此詩は熙寧九年四月の作。文彦博に答へて、超然臺の詩に和したのである。續通鑑長編に據るに、熙寧九年八月、判大名府文彦博再任とあれば、東坡との倡和は、潞公が正に大名に在る時であ

つた。文彦博の超然臺の詩は、莒侯之燕處、層臺踰二十尋、俛鎮千乘國、前瞻九仙岑、勿作西州意、姑爲東武吟、名教有靜樂、紛華無動心、憑高肆遠目、懷往散冲襟、琴觴興不淺、風月情更深、民被襦袴惠、境絕枹鼓音、欲識超然意、鶴原賦擲金、といふのである。

【詩意】天下の士は、是非の場に奔走し、榮辱の海に浮沈して居るが、我が潞國公は、元來、富貴を厭ひ、常に勲業の尋ぐを煩はしく思つて居られる。それで仙人赤松子と相約して、かの白雲を望んで帝郷に遊ばうと欲するものが、平生の志であるやうに思はれる。故に談笑も自ら清い風を生じ、風が作れば則ち萬木の穴が鳴り響く。其の聲が、この超然の詩を作り成して、我が茅塞した心を洗ふのである。ああ我は元來、何人ぞ、山の鹿、野の麋と毫も異らないのに、強ひて冠を著けたり襟を正したりする。身は微でも、志が大であり、交の浅いのに、言が深いのである。君によくよく御依頼をする。我がもし致仕が出来た曉には、幸に音信をするが、但、心配なのは、我に酒を買ふ錢が無くなることである。君よ、どうか、其の囊金を揮つて、我に散じて下さい。

聞喬太博換左藏知欽州以詩招飲

喬太博左藏に換つて欽州に知たるを聞き、詩を以て招飲す

今年果起故將軍。今年果して故將軍を起す、

【字解】喬太博 喬綏、字は

幽夢清詩信有神。幽夢清詩信に神あり。

馬革裹屍眞細事。馬革屍を裹むは眞に細事、

虎頭食肉更何人。虎頭肉を食ふは更に何人ぞ。

陣雲冷壓黃茅瘴。陣雲冷かにして壓す黃茅瘴、

羽扇斜揮白葛巾。羽扇斜に揮ふ白葛巾。

痛飲從今有幾日。痛飲今より幾日かある、

西軒月色夜來新。西軒の月色夜來新なり。

馬功、太博となり、欽州に知たり。東坡の詩にいふ、云侯瑊瑊器、清廣常薦盛と。再び施州に知たり。東坡の詩に又いふ、愧無負郭田千頃、空有載行書五車と。【一】左藏、武職である。宋史、職官志に、西京左藏庫使あり。蓋し喬禹功、文階を以て武職に改めたのであらう。【二】欽州、元和郡縣志に、漢平南越、置合浦郡。欽州は即ち合浦縣の地。梁

は安州を置く。開皇十八年、欽州と爲す。欽江を取つて名となす。東、廣州に至る三百三里。【四】果起故將軍 王注に、先生鐵溝行贈喬太博詩云、明年定起故將軍、未肯先誅霸陵尉。李廣、嘗て、夜、一騎を從へ、霸陵亭に至る。霸陵の將、酔うて廣を呵止す。廣の騎曰く、故の李將軍なりと。尉曰く、今の將軍も、尙ほ夜行するを得ず。何ぞ乃ち故をやと。亭下に宿せしむ。居る何もなく、廣は右北平の太守となる。即ち霸陵の尉を請ひ、之を斬る。施注に、故此云果、且曰信有神也と。【五】幽夢 柳子厚の詩に、月明空階曙、幽夢綵雲生。【六】信有神 杜子美の獨酌詩に、醉裏從爲客、詩成覺有神。【七】馬革裹屍 後漢、馬援傳に男兒、要當死於邊野、以馬革裹屍還葬耳、何能臥牀上、在兒女子手中耶。【八】虎頭食肉 後漢、班超傳に、超行詣相者、相者曰、生、燕領虎頭、飛而食肉、此萬里侯相也。【九】陣雲 史記、天官書に、陣雲如立垣。庾信の擬詠懷詩に、陣雲平不動、秋蓬卷欲飛。【一〇】黃茅瘴 通眞子、瘴氣論に、嶺南瘴、猶如嶺北傷寒也、從仲春訖仲夏、行青草瘴、季夏訖孟冬、行黃茅瘴、黃茅は、本草に、黃茅似菅茅、而莖上開葉、可爲素綯。【一一】羽扇 語林に、諸葛武侯、捉白羽扇、指揮三軍。蜀、諸葛亮傳に、亮與司馬宣王、對於渭濱、王戎服莅事、使二人視亮、乘素車、葛巾羽扇、指揮三軍。【一二】白葛巾 葛巾は葛製の頭巾、宋書

古今體詩 聞喬太博換左藏知欽州以詩招飲

陶潛傳に、值其酒熟、取頭上葛巾漉酒。

【題義】此詩も、熙寧九年四月の作である。喬禹功が欽州に知となつたと聞いて詩を以て招宴したのである。紀昀いふ、招飲說得真至と。

【詩意】東坡の前年、喬太博に贈つた詩にいふ、明年定起故將軍、未肯先誅霸陵尉と。昔李將軍が、或夜、一騎を従へ、霸陵亭に至つた。霸陵の將、酔うて廣を呵止す。廣の騎曰く、故の李將軍であると。尉曰く、今の將軍でも夜行は出来ない。まして故をやと。さて喬禹功は、明年は必ず故將軍を起さうと言つてたが、果して今年は故將軍を起すこととなつた。(喬禹功の欽州に知事となつたことをいふ)幽夢も、清詩も、まことに神通があつた譯である。後漢の馬援は、男兒は戰場に活動し馬革を以て其の屍を裹むべきである。何ぞ牀上に臥して、兒女子の手に死なんやと言つたが、馬革を以て屍を裹むは、真に細事である。又、同じく後漢の班超は、燕領虎頭で、萬里侯の相があると相者に評されたが、虎頭、肉を食ふは、更に何人であらう。思へば陣雲は冷かた且つ垣を立てたやうに黄茅瘴(病氣の名)を押し去つた。又、白葛巾を著け、羽扇を斜に揮つて居る喬禹功をも、思うて已まない。たとひ、痛飲しても、今より幾日を得られようぞ。頭を擧げると、月色は西軒を照らして夜來殊に新なるを覺える。(東坡の詩話にいふ、昔、余與北使劉霄會食、霄誦僕詩、痛飲從今有幾日、西軒月色夜來新、曰、公豈不飲者耶と。)

【餘録】左藏は國庫なり。隋の文帝の時、庫藏みな滿つ。乃ち更に左藏の院を開き、屋を構へて以て之を受く。唐の時、左右藏、皆、命丞を置く。左藏は錢帛、雜綵、天下の賦調を掌る。右藏は金玉、珠寶、銅鐵、骨角、齒毛、綵畫を掌る。宋の初め、諸州貢賦、均しく左藏に輸す。南渡せしの後、左藏内庫及び封樁庫(宋の太祖の時、帑藏盈溢を以て、講武殿後に於て、別に内庫を爲り、以て軍旅饑饉の預防となす、之を封樁庫といふ)を分設す。元、禁中出納は、三庫に分つ。御用寶玉、遠方珍異は、内藏に隸す。金銀、質孫衣段は(質孫衣は一色衣をいふ、元史に、質孫、漢言一色服也、内庭大宴、別服之)右藏に隸す。常課衣段、綺羅、練布は左藏に隸す。

喬將行烹鷺鹿。出刀劍以飲客。以詩戲之

喬將に行かんとす、鷺鹿を烹、刀劍を出し以て客に飲ましむ、詩を以て之に戯る

破匣哀鳴出素蚪。破匣哀鳴素蚪を出す、
倦看鷓鴣聽呦呦。看るに倦む鷓鴣呦呦を聽く。
明朝只恐兼烹鶴。明朝只恐る兼ねて鶴を烹るを、
此去還須却佩牛。此に去り還須らく却つて牛を佩ふべし。
便可先呼報恩子。便ち先づ報恩子と呼ぶべし、

古今體詩 喬將行烹鷺鹿出刀劍以飲客以詩戲之

【字解】一、破匣。匣は箱。大なるを箱といひ、小なるを匣といふ。杜子美の詩に、平生白羽扇、零落蛟龍匣。二、素蚪。蚪はミツチ。龍の子の角あるもの。素蚪は刀劍をいふ。後漢、馬衍の賦に、駟素蚪而馳騁兮。三、鷓鴣。鷓の鳴く聲。孟

不妨仍帶醉鄉侯。妨げず仍ほ酔郷侯を帶ぶるを。
他年萬騎歸應好。他年萬騎歸る應に好かるべし、
奈有移文在故邱。奈んぞ文を移して故邱に在る有らん。

四七〇
子滕文公篇に、惡用是鴟鴞者爲哉。
鴟は鴟に同じ。【四】 呦呦 鹿の鳴
く聲。詩、小雅に、呦呦鹿鳴、食野
之苹。【五】 烹鶴 雲谿友議に、
章鵬翼題、盱眙邵明府壁云、自從煮

鶴燒琴後、背御青山臥明月。李義山雜纂に、燒琴煮鶴。【六】 佩牛 漢、龔遂の事を用ふ。龔遂は山陽の人。宣帝、位に即
き、渤海盜起る。遂に命じて、渤海の太守となす。單車、郡に至り、民に農桑を勸む。民、皆劍を賣りて牛を買ひ、刀を賣りて犢を
買ひ、境内に治る。【七】 報恩子 韓退之の送三石處士赴河陽幕詩に、長把三種樹書、人云避世士、忽騎將軍馬、自號報恩子。
【八】 醉鄉侯 唐、王績は、醉郷記を撰し、以て劉伶の酒德頌に配す。皮日休の詩に、他年謁帝言何事、請贈劉伶作醉侯。唐人
の詩に、若使劉伶爲酒帝、亦須封我醉鄉侯。【九】 萬騎 文選、班孟堅の東都賦に、萬騎紛紜。【一〇】 移文 孔稚珪、北山移文
引にいふ、周彦倫、先隱北山、後出爲海鹽令、欲還山、稚珪乃假山靈之意、作文移之、不許其至。

【題義】 此詩も前詩と同じく、熙寧九年四月の作である。喬禹功の送別に、鵝や鹿を烹、刀劍を出し
て客に飲ましめ、詩を以て之に戲れたのである。紀昀いふ、哀鳴字不妄と。

【詩意】 破匣の中から、刀劍が哀鳴して出た。行く人を送るのであらう。又、送別の酒宴には、鵝の
肉や鹿の肉を烹る。所謂鴟鴞の聲は、鵝の發する所で、我は之を看るに倦む。呦呦は鹿の鳴く聲、其
の聲を聞けば、其の肉を食ふに忍びない。更に明朝の酒宴には、兼ねて鶴をも烹ることを恐れる。李
義山が殺風景にも、煮鶴燒琴ことが載つて居る。さて喬君には此を去つて、また須らく却つて牛を
佩ぶべきである。昔、漢の宣帝の時、龔遂は渤海の太守となり、民に農桑を勧めた所、民は皆劍を賣

つて牛を買ひ、刀を賣つて犢を買ひ、境内が大に治まつたといふことである。喬君も龔遂に倣うて
歸耕する。便ち先づ知遇に感じて恩を報ゆるといふ意より、報恩子と呼んだのであらう。古人の詩に
も、若し劉伶をして酒帝とならしめば、亦須らく我を酔郷侯に封すべしとあるが、喬君にも十分に酒
を飲んで酔郷侯となることは、固より御隨意である。北山移文の引に、周彦倫は、先づ北山に隠れ、
後に出でて、海鹽の令となつた。山に還らうとすると、稚珪は、乃ち山靈の意を假り、文を作つて之
を移して、其の至るを許さなかつたといふ話がある。併し喬君は他年、萬騎を率ゐて、歸るが好いで
あらう。奈んぞ北山移文に倣うて文を移し、故邱に在らしめるといふことがあらうぞ。言ひ替へると、
故山を出でて、四方の人となるべきである。

奉和成伯兼戲禹功

成伯に奉和し、兼ねて禹功に戲る

金錢石竹道傍秋。金錢石竹道傍の秋、
翠黛紅裙馬上謳。翠黛紅裙馬上に謳ふ。
無限小兒齊拍手。限なき小兒齊しく手を拍つ、
山公又作習池遊。山公又習池の遊を作せばなり。

【字解】 一 成伯 趙成伯をい
ふ。尙書郎を以て密州に倅たり。
二 禹功 喬敍、字は禹功。前に出
づ。三 金錢 金錢花をいふ。翠
芳譜に、草本、秋開花、色黃、似錢
而欠三稜廓、午開子落、故名三子午花。

又名三夜落金錢。酉陽雜俎に、金錢花、一云出外國、梁時、荊州掾屬、雙陸賭金錢、錢盡以金錢花相足、魚宏謂、得花勝得錢。
古今體詩 奉和成伯兼戲禹功

【四】石竹。カラナアソコ。山野に自生する草、夏月花開く。【五】翠黛紅裙。杜子美の詩に、燕姬翠黛愁紅裙。又、越女紅裙濕、燕姬翠黛愁。【六】小兒齊拍手。李太白、襄陽歌に、襄陽小兒齊拍手。【七】習池遊。襄陽記に、漢侍中習郁於峴山南作魚池、池邊有高隄、種竹及長楸、芙蓉蕩芙蓉水、是遊燕名處也、山簡每臨此池、未嘗不三三醉而還、曰、此是我高陽池也、襄陽小兒歌之曰、山公時一醉、徑造高陽池、日暮倒載歸、若乎無所知。若乎の若は、酩に通ず。韓退之の詩に、若乎馬上知爲誰。

【題義】此詩も、前と同じく熙寧九年四月の作。趙成伯の詩に和し、兼ねて喬禹功に戯れたのである。【詩意】金錢花や石竹が道傍に、秋を飾つて居る。又、翠黛の美人、紅の裙の妓女が馬上に謳つて過ぎ行く。晋の山簡は、高陽習家の池に至る毎に、酒を飲んで輒ち大に酔つて歸つた。歌にいふ、山公出何許、往至高陽池、日夕倒載（後向に馬を騎る）歸、酩酊無所知と。襄陽の小兒は、齊しく手を拍つて囃したてた、といふことである。今、喬禹功も、亦、然りて、山公のやうに習池の遊をなされることであらう。

寄黎眉州

黎眉州に寄す

膠西高處望西川。膠西高き處西川を望めば、應在孤雲落照邊。應に孤雲落照の邊に在るべし。瓦屋寒堆春後雪。瓦屋寒は堆し春後の雪、峩眉翠掃雨餘天。峩眉翠は掃ふ雨餘の天。

【字解】一 黎眉州 名は鏗、字は希聲。熙寧八年、尙書屯田郎中を以て眉州に知たり。希聲、春秋を治めて歐陽修に知らる。宋史に、黎鏗、渠江人、英宗以蜀士問歐陽修、

治經方笑春秋學。經を治して方に笑ふ春秋の學、好士今無六一賢。士を好む今六一の賢無し。且待淵明賦歸去。且つ淵明の歸去を賦するを待つて、共將詩酒趁流年。共に詩酒を將て流年を趁はん。

對曰、文行蘇洵、經術黎鏗。本集の眉山遠景樓記略に、太守黎希聲先君子之友人也。子由集末の自注に、轍昔侍先人於京師、與希聲鄰居大學前。二 膠西 今の山東膠縣高密等の地。三 西川 蜀の地。元和郡縣志に、眉州屬劍南道、西川節度使所轄云云。四 落照 梁、簡文帝の詩に、落照度窗邊。五 瓦屋 山の名。太平寰宇記に、雅州榮經縣榮水在城北、經水在城南、一出瓦屋山、一出改丁河。名勝志に、瓦屋山在榮經縣東北二十里、形如瓦屋、上有念佛鳥、娑羅花、其巖朝現三辟支、午現三普賢。六 峩眉 蜀の山名。水經注に、峩眉山去成都南千里、秋日清澄、望見兩山相峙如蛾眉焉。名山記に、峩眉山、周匝千里、石籠一百十二、大洞十二、小洞二十八。蜀都賦に、抗峩眉之重阻。七 治經 云云 韓退之が寄盧同詩に、春秋三傳束高閣、獨抱遺經究終始。宋の張端義が貴耳集に、王荊公斥詞賦尊經、獨以春秋一非聖經不試、所以元祐諸人多作春秋傳解、則其議論素不同矣。宋の晁公武が讀書志に、春秋經解、黎鏗撰、鏗、蜀人、歐陽公之客、名其書爲經解者、以經解經也、後、又爲經論附焉。

【題義】黎眉州は春秋を治めて家法があるので、歐陽文忠公は之を喜んだ。王安石は素より春秋を喜ばない、目して斷爛朝報となす。是の時、安石方に志を得たから、故にいふ、治經方笑春秋學と。又、歐陽公の黎生蜀に還るを送る詩がある、故にいふ好士今無六一賢と。東坡は眉の人、そして黎は方に眉に守たり。故に淵明歸去の句がある。紀昀いふ、懸空擲筆而下、起勢極爲超拔、三四接得有レ力、後半亦沈著と。

【詩意】膠西の高地から蜀の地西川を望むと、西川は一片の離れ雲に、夕陽の落ちて居る邊に在るであらう。其の地方は氣候も寒く、春後の雪は、瓦屋山に堆く、そして、雨後の空には峩眉山の翠色が天に秀でるを見るであらう。君は其地に在つて經書を研究し、春秋の學を治めて、かの王安石一派の春秋を喜ばない癖見を笑ふのは、卓見といふべきである。方今、世に士を好むこと歐陽公の如き賢人のないことを惜しむのである。(東坡の自注に、君以春秋受知歐陽文忠公、公自號六一居士とある。)併しながら、我も他日、陶淵明のやうに、歸去來の辭を賦して眉州に歸ることを得たならば、共に詩酒を以て楽しく餘生を送らうと思ふ。(東坡は眉山の人であるから、淵明賦歸去といつたのである。)互に其の時の到るを樂みにして相待たう。(共將詩酒と言つたのは、陶淵明の歸去來の辭に、携幼入室、有酒盈樽とあるからである。)

和趙郎中捕蝗見寄次韻

趙郎中蝗を捕へて寄せらるるに和して次韻す

麥穗人許長。穀苗牛可沒。

麥穗人許く長く、穀苗牛沒すべし。

天公獨何意。忍使蝗蟲發。

天公獨り何の意ぞ、蝗蟲をして發せしむるに忍びんや。驅攘は令典に著はる、農事安くんぞ忽にすべけんや。

我僕既胼胝。我馬亦款矻。

我が僕既に胼胝、我が馬亦款矻。

飛騰漸云少。筋力亦已竭。

飛騰漸く云に少なく、筋力亦已に竭く。

苟無百篇詩。何以醒睡兀。

苟くも百篇の詩なくば、何を以て睡兀を醒ますん。

初如疏吠澮。漸若決澗渤。

初めは吠澮を疏するが如く、漸くにして澗渤を決する。往來供十吏。腕脫不容歇。

往來十吏に供す、腕脫するも歇むを容さず。平生輕妄庸。熟視笑魏勃。

愛君有逸氣。詩壇專斬伐。

君が逸氣あるを愛す、詩壇に斬伐を專にす。

民病何時休。吏職不可越。

民の病は何れの時か休まん、吏の職は越ゆべからず。

慎毋及世事。向空書咄咄。

慎んで世事に及ぶこと母れ、空に向つて咄咄と書す。

【字解】【一】趙郎中 趙郎中成伯をいふ。施注に、趙郎中成伯、時官制未改、以尚書郎倅密州。【二】麥穗 唐・戴叔倫(字は幼公)の詩に、暖日菜心稠、晴煙麥穗抽。【三】許長 韻會に、許、語助也。かくと訓す。東坡の詩に、明朝門外泥一尺、始悟三更雨如許。【四】牛可沒 韓退之の稻畦の詩に、魚肥知已秀、鶴沒覺初深。【五】天公 天帝に同じ。晉書、天文志に、是天公憤憤、無卓白之徵也。卓白は黑白といふ同じ。【六】驅攘著令典 唐の開元四年に、山東大に蝗あり。民祭り、且つ拜して、敢て捕へず。姚崇曰く、詩云、去其螟蟻、及其蠹賊、秉畀炎火。光武詔曰、勉順時政、去彼螟蟻。此除蝗證也。【七】胼胝 びあかされ。手に胼といひ、足に胝といふ。莊子、讀玉篇に、手足胼胝。王注に、禹治水、手足胼胝、謂三手上重繭也。淮南子に、舜、黜黑、禹胼胝。呂氏春秋に、舜之未遇、手足胼胝。【八】款矻 骨折りて疲れる。【九】飛騰 飛揚と同じ。韓退之の詩に、飛

黃騰踏去。【一〇】睡兀。酒德頌に、兀然而醉。【一一】映澹。田間のみぞ。尙書、益稷に、濬映澹。距河。嵇康の養生論に、益之
以映澹、而泄之以尾閭。注にいふ、映澹、細流也、尾閭、海水泄處也。【一二】灑渤。海の別名。漢、司馬相如の子虛賦に、浮灑渤
灑、游孟諸。【一三】供二十吏。漢、游俠傳に、陳遵爲河内太守、至官、召善書吏十人治私書、謝京師故人、選馮几口占書數
百封。唐、王勳傳に、爲鳳閣舍人、壽春等五王出閣、有司具儀、忘載册文、羣臣已在、方悟其闕、勳召五吏、執筆分占、其
辭粲然。【一四】腕脫云云。唐、蘇頌傳に、玄宗平内難、書詔填委、獨頌爲中書舍人、在太極後閣、口所占授、功狀百緒、輕重無
所差、書吏白曰、丐公徐之、不然手腕脫矣。【一五】熟視笑魏勃。前漢、高五王傳に、灌嬰聞魏勃本教齊王反、既誅呂氏、
罷齊兵、使使召責問魏勃、勃曰、失火之家、豈暇先言丈人、後救火乎、師古曰、言以社稷將危、故舉兵以匡之、不暇待
詔命也。因退立、股戰而栗、恐不能言者、終無他語、灌將軍熟視笑曰、人謂魏勃勇、妄庸人耳。【一六】逸氣。すぐれた氣
象。晉書、王舒傳に、正足舒其逸氣耳。文心雕龍に、時有逸氣。【一七】斬伐。詩の小雅に、斬伐四國。【一八】吏職不可越
漢宣帝紀に、吏或越職踰法、以取名譽、譬猶踐薄冰、以待白日、豈不殆哉。【一九】及世事。白樂天の重題詩に、宦游自此
心常別、世事從今口不言。【二〇】書咄咄。晉、殷浩傳に、雖被放黜、口無怨言、但終日書空作咄咄怪事四字而已。

【題義】趙成伯が密州に倅であつた時、蝗蟲の害が甚しかつたので、捕蝗といふことを詩に作つて
寄せられた。其の詩に次韻したものである。紀昀いふ、不免有努力之狀と。

【詩意】麥の穂は秀でて、人の丈位に長くなつた。穀の苗も、牛を隠す程に生長した。然るに天帝に
は何の御心で、蝗蟲を降したまうたのであるか、併し蝗蟲はどこまでも除かなければならない。故に
之を驅り、之を攘ふべきことは、其の都度お上の令典に著はれて居る。農事は一日も忽にすること
が出来ないからである。かくて我が僕は日日の勞働の爲に、手も足も輝となつた。我馬も毎日耕作
に使はれて、全く疲れてしまつた。其の爲に、飛揚することも少くなり、筋力も己に竭きた。もし、

我に百篇の詩の心を慰めることでもなかつたなら、何を以て睡魔の兀兀たるを醒まさうぞ。最初は、
田間の溝を疏するがやうに心地よく、だんだん海水を決するがやうに、愉快となつて來た。昔、漢の
陳遵は、河内の太守となつて、書を善くするもの十人を召して、私書を治めしめたといふことである
が、往來の交通は十吏に書かせて、其の手腕の脱けるやうになつても歇めることを容さなかつた。前
漢の灌嬰は、魏勃が齊王に反を教へたと聞き、既に呂氏を誅し、齊兵を罷めた後に使を使はして魏勃
を責問した。勃は失火の家、豈、先づ丈人に言つて、後に火を救ふに暇あらんやと分疏した。併し、
退き立ち、股戦して言ふことが出来なかつた。灌將軍は、之を熟視して笑つていふやう、人は魏勃
を勇ありと評判して居るも、全く妄庸人のみと。君も平生、妄庸を輕んずる。そして熟視して魏勃を
笑つて居られる。我は君のすぐれた氣象のあるのを愛する。君は詩壇に雄飛して斬伐を専らにして居
る。其の後塵を逐ふものもない。又、今の世、民の疾苦は、何れの時か休まうぞ。併し、吏たるもの、
職を越え、法を踰えて名譽を取るは、譬へば猶ほ薄氷を踐んで白日を待つやうなもので、殆いと謂ふ
べきである。それで慎んで世事を口にすること勿れ、かの晉の殷浩のやうに、ただ終日、空に向つて
咄咄怪事の四字を書するのみで居られたがよい。

登常山絶頂廣麗亭

常山の絶頂廣麗亭に登る

西望穆陵關東望琅邪臺

西のかた穆陵關を望み、東のかた琅邪臺を望み、

古今體詩 登常山絶頂廣麗亭

南望九僊山。北望空飛埃。

南のかた九僊山を望み、北望すれば空しく飛埃。

相將叫虞舜。遂欲歸蓬萊。

相將ゐて虞舜を叫び、遂に蓬萊に歸せんと欲す。

嗟我二三子。狂飲亦荒哉。

嗟我二三子、狂飲亦荒なるかな。

紅裙欲僊去。長笛有餘哀。

紅裙僊居せんと欲し、長笛餘哀あり。

清歌入雲霄。妙舞纖腰回。

清歌雲霄に入り、妙舞纖腰回る。

自從有此山。白日封蒼苔。

此山ありしより、白日蒼苔を封す。

何嘗有此樂。將去復徘徊。

何ぞ嘗て此樂あらん、將に去らんとして復徘徊。

人生如朝露。白髮日夜催。

人生は朝露の如く、白髮日夜催す。

棄置當何言。萬劫終飛灰。

棄置當に何を言ふべき、萬劫終に飛灰。

【字解】

【一】穆陵關 史記、齊世家に、管仲曰、昔、召康公命我先君太公曰、東至於海、西至於河、南至於穆陵、北至於無棣。唐、地理志に、沂州沂水縣龍山北有穆陵關。元和郡縣志に、穆陵山在沂水縣北一百九十里。名勝志に、大觀山在臨朐縣東南、上有穆陵關。【二】琅邪臺 王注に、穆陵山在沂水縣、琅邪山在沂水、胸山、諸城三縣界、始皇嘗登山樂之、作琅琊臺、地在今諸城東南。史記、始皇二十八年に、南登琅邪、留三月、徙黔首三萬戶琅邪臺下、立石刻頌秦德。太平寰宇記に、臺基三層、層高三丈、上有始皇碑、碑有六百字可識、餘多剝落、李斯書。【三】九僊山 錢塘臨安に在り。或はいふ、密州諸城縣に在りと。名勝志に、廬山在諸城縣東南四十五里、又、二十五里爲九僊山、高聳摩空、常有僊人居之、峰巒十有一、盤石十有八。本集に有九僊、今已廢。京東。自注にいふ、九僊在東武、奇秀不減雁蕩一。雁蕩は山の名。浙江、樂清縣東九十里にある。【四】飛埃 蘇頌、

春遊の詩に、飛埃結紅霧、游蓋飄青雲。【五】叫虞舜 叫は一本に呼に作る。杜子美の慈恩塔詩に、回首叫虞舜、蒼梧雲正愁。

【六】歸蓬萊 盧同謝孟諫諫寄新茶詩に、蓬萊山在何處、玉川子乘此清風欲歸去。【七】嗟我二三子 韓退之、山石篇に、嗟哉吾黨二三子。【八】狂飲 蘇舜欽の詩に、放歌狂飲不知曉。【九】紅裙欲僊去 趙飛燕外傳に、帝嘗與后坐瀛州樹、后歌歸風送遠之曲、帝以文犀筋擊玉甌、令后所愛侍郎馬無方、吹笙倚后歌、中流歌酣、風大起、后揚袖曰、仙乎仙乎、去故而不復得、悵然泣數行下、他日宮姝或羨君爲綉、號留仙裙。【一〇】餘哀 古詩に、一彈再三歎、慷慨有餘哀。【一一】清歌 謝靈運の擬鄴中詩に、清歌拂梁塵。【一二】妙舞纖腰回 白孔六帖に、飛燕舞腰宛轉、若流風之回雪。謝希逸の月賦に、收妙舞弛清縣。【一三】自從有此山 晉、羊祜傳に、登峴山、顧謂鄧湛等曰、自有三字宙、便有此山、由來、賢達勝士、登此遠望如我與卿者多矣、然埋滅無聞、使人悲傷、如百歲後有知、魂魄猶應登此山也。【一四】白日 孔融の詩に、浮雲騎白日。【一五】徘徊 漢書、高后紀に、徘徊往來。楚辭、九歌に、周徘徊兮漢渚。【一六】白髮日夜催 杜子美の早花詩に、誰憂客鬢催。【一七】棄置 文選、魏文帝の詩に、棄置勿復陳。【一八】萬劫 梁、簡文帝の文に、萬劫不朽。劫は梵語、劫變の略。極めて永い時間。三輔黃圖に、漢武帝穿昆明池、極深、悉是灰墨、有方士、言、此天地劫灰之餘。【一九】飛灰 唐、陰先行の詩に、重陽初啓節、無射正飛灰。無射は十二律の一。

【題義】 此詩は會稽常山の絶頂廣麗亭に登臨した時の感興を寫したのである。紀昀いふ、篇幅不長而氣脈極潤と。又いふ、一起從老杜熊羆咆我東、四句上化出、好在作起筆、若在中間、則凡語矣と。【詩意】 常山の絶頂に登つて、四方を眺めると、西方には穆陵關を望み、東方には琅琊臺を望み、南方には九僊山を望み、北の方を望むと、空しく飛埃の紅霧を結んで居るのを見る。首を回らすと、蒼梧の方は、雲がかかつて居るので、相將ゐて虞舜を叫ぶ。虞舜は南に巡狩して蒼梧の野に崩れた。

遂に蓬萊山を思ふ。蓬萊山は何處ぞ、此の清風に乗じて歸り去らうと思ふ。ああ我黨の二三子は、放歌し、狂飲して夜の明けるをも知らないで居る。亦、荒なるかな。昔、漢の成帝は、趙飛燕をして歸風送遠の曲を歌はしめた。歌が酣にして、風が大に起つた。飛燕は袖を揚げ、仙か仙か、故を去つて新に就かんと呼んだ。帝は侍郎をして之を持せしむ。風が霽れると、飛燕は泣いて曰く、帝は我を思ひ、我をして仙去することを得ざらしむと。歌に合せた長笛に餘哀があり、清歌は梁塵を拂つて、雲霄に入る。飛燕の舞腰は、宛轉として流風回雪のやうであつた。宇宙ありしより此山がある。此山がありしより白日が蒼い苔を封ずる。何ぞ嘗て當年の此の樂があらうぞ。將に去らうとして、また徘徊する。人生は朝露の日を待つて啼くが如く、まことに果敢無い。白髮日夜に催して、餘命幾くもなくなくなる。萬事棄置して、復、陳ぶることなかれ。萬劫極みないと云つても、終に灰を飛ばすやうなものである。

薄薄酒二首

薄薄酒 二首

膠西先生趙明叔。家貧好飲。不擇酒而醉。常云。薄薄酒勝茶湯。醜醜婦勝空房。其言雖俚而近乎達。故推而廣之。以補東州之樂府。既又以爲未也。復自和一篇。聊以發覽者之一噱云爾。

【訓讀】 膠西の先生趙明叔、家貧うして飲を好み、酒を擇ばずして酔ふ。常にいふ、薄薄の酒も茶湯に勝り、醜醜の婦も空房に勝れりと。其言は俚なりと雖も、達に近し。故に推して之を廣め、以て東州の樂府を補ふ。既にして又以て未しと爲し、復自ら一篇を和して、聊か以て覽者の一噱を發すと云ふ爾。

【字解】 一 趙明叔 名は果卿。密州の郷貢進士。行義あり。 二 一噱 説文、噱、大笑也。

薄薄酒勝茶湯

薄薄の酒も茶湯に勝り、

麤麤布勝無裳

麤麤の布も裳なきに勝り、

醜妻惡妾勝空房

醜妻惡妾も空房に勝る。

五更待漏鞞滿霜

五更に漏を待つて鞞霜を滿つるは、

不如三伏日高

如かず三伏日高けて、

睡足北窗涼

睡北窗の涼に足るには。

珠襦玉柙

珠襦玉柙

萬人相送歸北邙

萬人相送りて北邙に歸するは、

不如懸鶉百結

如かず懸鶉百結、

【字解】 一 薄薄酒 酒味淡薄で酔くない。春秋繁露に、厚厚而薄薄。

二 勝茶湯 王建の宮詞に、宮人手裏過茶湯。

三 麤麤布 管子に、穉成飯牛歌、麤布衣兮細縷。

四 醜妻惡妾 古樂府に、應璩が道上逢三嫂一詞に、道上逢三嫂、何以得此壽、中叟前致詞、室內妻妾醜。

五 勝空房 王粲の詩に、回身入空房。

六 待漏 國史補に、舊、百官早朝、必立馬於望仙建福門外、宰相即於光宅東坊、以避風雨。

元和初、始置待漏院。宋朝は丹鳳

獨坐負朝陽

獨り坐して朝陽を負はんには。

生前富貴死後文章

生前の富貴死後の文章、

章。

百年瞬息萬世忙

百年瞬息萬世忙はし。

夷齊盜跖俱亡羊

夷齊盜跖俱に羊を亡がす、

不如眼前一醉

如かず眼前一醉して、

是非憂樂兩都忘

是非憂樂兩ながら都て忘れんには。

門の右に待漏院を置く。これ宰相が漏を待つ處である。【七】滿霜白樂天の晏起詩に、早朝霜滿衣。【八】三伏 夏至の後、三庚を初伏となし、第四庚を中伏となし、立秋の後、初庚を末伏となす。初伏より末伏に至るまでの間、極熱の時を三伏といふ。【九】日高睡足 白樂天の詩に、酒醒夜深後、睡足日高時。【一〇】北窗涼 晉、陶淵明傳に、夏

月虛開高臥北窗之下、清風端至、自謂羲皇上人。

【一】珠襦玉匣 漢の哀帝、豫め、東園の祕器、珠襦、玉匣を以て董賢に賜ふ。西

京雜記に、漢帝送死、皆珠襦玉匣、匣形如鎧甲、連以金縷。襦は短衣、珠を以て飾とする。玉匣は天子の葬に、之を用ひて其の腰

か束ぬ。【二】北邙 北邙山は河南、偃師縣の東北に在り。王公多く其の地に葬る。文選、七哀詩に、北邙何壘壘。陶淵明の詩に、

一旦百歲後、相與還北邙。唐人の詩に、孟郊死葬北邙山。續漢書、五行志に、靈帝時、童謠曰、侯非侯、王非王、千乘萬騎上北邙。

【三】懸鶉 敝れた衣を綴り結んで鶉の如くなるをいふ。荀子に、子夏之衣、懸結如鶉。【四】百結 敝れ裂けたるを百處も結び

集めた衣。逸士傳に、晉董京在洛陽、隱居白社、以殘絮縷帛爲衣、號百結衣。【五】負朝陽 列子に、宋國有田夫、嘗衣

細屨、自曝於日、顧謂其妻曰、負日之暄、人莫知者、以獻晉君、將有重賞。【六】夷齊 伯夷、叔齊。【七】亡羊 莊子、

駢拇篇に、臧與穀二人相與牧羊、而俱亡其羊、問臧奚事、則挾筴讀書、問穀奚事、則博塞以遊、二人者、事業不同、其於亡

羊均也、伯夷死名於首陽之下、盜跖死利於東陵之上、二人者所死不問、其於殘生傷性均也、奚必伯夷之是、而盜跖之非乎。

【八】兩都忘 韓退之が忽忽の詩に、生死哀樂兩相棄、是非得失付閒人。

【題義】此詩は熙寧九年六月、密州の作である。(東坡四十二歳の時)趙明叔が語を把つて題となし、

其の意を推し廣めて、樂府體にもしたのである。紀昀いふ、此種究是野調、以近俗易解、故傳誦

者衆耳と。

【詩意】酒味の薄いといふ薄薄酒は、魯酒千鍾不醉人の類である。此の如き酒でも、飲めば酔を取

つて、心を樂ましめる。茶湯よりは勝つて居る。麻縷太くて粗い布は、賤者の服する所、固より鮮美で

はないが、身を蔽うて暖を取るに異はない。故に衣裳の無いよりは勝つて居る。醜い妻や悪い妾、目

を悦ばしめるには足らないが、室を偕にし、使令に奉ずるは同じである。故に空虛の房中に、獨居す

るよりは勝つて居ると思ふ。宰相たる人が、五更の時に、朝廷に朝すると、天子の門闕が猶ほ未だ

開けないから、暫く門外に在つて、禁中の漏刻の晨を報じて門の開くのを待つて居る。冬の時、味爽

に朝するから、晨の霜が靴中に滿つるのである。かやうに、宰相の高官となつて、五更、朝に進んで

漏を待ち、寒を凌いで立ち、靴中に霜を滿たさんよりは、逸居自ら放にし、三伏の暑い時、日の高い

じでないが、かの臧と穀との二人、相與に羊を牧して俱に羊を亡がしたやうに、歸する所は、皆同じく死んでしまひ、彼れ此れの別もない。因襲や羈絆に苦められんよりは、眼前酒を呼び、一醉して世上の是非憂樂、すべて忘れて樂んだ方が増してである。

薄薄酒飲兩鍾。

薄薄の酒兩鍾を飲み、

麤麤布著兩重。

麤麤の布兩重を著く。

美惡雖異醉暖同。

美惡は異りと雖も醉暖は同じ。

醜妻惡妾壽乃公。

醜妻惡妾乃公を壽にす、

隱居求志義之從。

隱居志を求めて義に之れ從ふ。

本不計較東華塵。

本計較せず東華の塵土北窗の風。

土北窗風。

百年雖長要有終。

百年長しと雖も要するに終あり、

富死未必輸生窮。

富死未だ必ずしも生窮を輸さず。

但恐珠玉留君容。

但恐る珠玉君が容を留め、

【字解】(一) 兩鍾 鍾は酒器。

孔叢子に、堯舜千鍾。(二) 醜妻惡

妾壽乃公 應璩の古樂府に、道上

逢三叟、何以得此壽、中叟前致詞、

室內妻妾醜。乃公は、前漢の高帝紀

に、幾敗乃公事。(三) 隱居求志

義之從 王注に、言醜婦可三與同隱、

如三梁鴻孟光是也。(四) 計較 商

量といふに同じ。三國志、孫堅傳に、

夜馳見袁紹、畫地計較。(五) 東

華塵土云云 東華は門の名。王注

に、東華門、百官入朝、所從出入之

門也。東坡の從、駕景靈宮詩の注

に、前輩戲語、有西湖風月、不如此

千載不朽遭樊崇。

千載朽ちざるも樊崇に遭ふを。

文章自足欺盲聾。

文章自ら盲聾を欺くに足る、

誰使一朝富貴面。

誰か一朝富貴をして面紅を發せしむ。

發紅。

達人自達酒何功。

達人は自ら達す酒何の功かある、

世間是非憂樂本

世間の是非憂樂は本來空し。

來空。

東華軟紅土。(六) 北窗風 李太白の詩に、清風北窓下、自謂羲皇人。陶淵明は夏月虛閑、北窓の下に高臥す。清風颯として至る、自ら謂ふ羲皇上の人と。(七) 珠玉留君容云云 後漢、劉盆子傳に、赤眉發掘諸陵、凡有三玉押斂者、率皆如生、故多行淫穢。(八) 遭樊崇 漢の王莽傳に、赤眉樊崇等入關、燒長安宮室爲墟、宗廟園陵、皆發掘、

唯霸陵杜陵完。文帝霸陵、宣帝杜陵。【九】文章欺盲聾 莊子、逍遙遊に、瞽者、無以與乎文章、聾者、無以與乎鐘鼓。【一〇】面發紅 古樂府に、今日牛羊上邱隴、當時近前面發紅。【一一】達人 賈誼、鵬鳥賦に、達人觀兮、物亡不可。【一二】酒何功 白樂天、嘗て酒功贊を作る。

【詩意】我は味の薄い酒、兩鍾を飲み、麤い布の衣、兩重ねを著ける。薄い酒と、麤い布、美惡は異つても、醉と暖とは同じである。又、醜い妻や、悪い妻は、我を長壽にした。古樂府にも、道上三叟に逢ふ、何を以て此壽を得たる、中叟は前んで詞を致す、室内の妻妾醜ければなりとある。昔、漢の梁鴻(字は伯鸞)は孟氏の女を娶る、孟光といふ。肥醜にして黒く、力能く石を擧げる。共に霸陵山中に入り、耕織を以て業とし、咏詩彈琴、以て自ら娛んだといふことであるが、隱居して志を求

め、義に之れ従ふのである。西湖の風月は、東華の軟紅土に如かないといふが、東華門の塵土と清風北窓の下と、必ずしも計較をしない。百年は長いやうであるが、要するに終がある。富んで死するものは、未だ必ずしも生きて窮することを輸さない。但恐れるのは、珠玉を以て君が容を留め、千載朽ちないやうにしても、赤眉の賊樊崇の如きものの發掘に遭ふことである。樊崇等は關に入り、長安の宮室を焼いて墟とし、宗廟・園陵皆發掘した。赤眉の賊が諸陵を發掘したとき、凡そ玉押斂するもの、率ね皆生けるが如くであつたといふ。替者は、以て文章に與るなく、聾者は、以て鐘鼓に與るなしといふが、文章は自ら盲者や聾者を欺くに足るのである。誰か一朝、富貴のものをして、面に紅を發し、邱隴に埋没するを免れしめる。(文章は不朽の盛事である) 達人は大觀する、必ずしも酒の力を借らない。白樂天は嘗て酒功贊を作つたが、酒、何の功かある。世間の是非憂樂、觀じ來れば、本來空しく、是もなく非もなく、憂もなければ樂もない。

同年王中甫挽詞

同年王中甫の挽詞

先帝親收十五人 先帝親しく收む十五人、

四方爭看擊鵬鵬 四方爭ひ看る鵬鵬を撃つを。

如君事業眞堪用 君が事業の如きは眞に用ゐるに堪へた

【字解】 同年 同じ年に、

進士の試験に及第したもの。國史補に、俱捷、謂之同年、捷は及第の意。前に屢注す。 王中甫

顧我衰遲不足論 顧みるに我の衰遲論するに足らず。

出處升沈十年後 出處升沈十年のち、

死生契濶幾人存 死生契濶幾人か存する。

他時京口尋遺跡 他時京口遺跡を尋ねば、

宿草猶應有淚痕 宿草は猶ほ應に涙痕あるべし。

名は介、常山の人。性強記、直氣を負ふ。制科に擧げられ、累官して祕書校理に至る。王安石と遊ぶも、未だ嘗て相下らず。熙寧の初、安石召され、復、辭せず。中甫、詩を寄せて曰く、草廬三顧動、幽壑一蕙帳、一空生三曉寒と、蓋し諷する所があつた。

安石、後、詩を賦していふ、丈夫出處非無意、猿鶴從來自不知、中甫の爲に發したのである。【三】挽詞 挽歌に同じ。晉書、樂志に、挽歌出乎漢武帝。前に出づ。【四】先帝親收十五人 東坡の自注に、仁宗朝、賢良十五人、今惟富鄭公、張宣徽、錢純老及余與舍弟二在耳とある。【五】擊鵬鵬 莊子、逍遙遊に、鯤之大、不知其幾千里、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之徙於南冥也、水擊三千里云云。【六】出處升沈 出處は出でて官に仕へると、退いて家に處ることである。易經に、君子之道、或出或處。升沈は、浮沈といふに同じ。李太白の詩に、升沈應已定、不三必問君平。【七】死生契濶 詩、邶風に、死生契濶、與子成說、執子之手、與子偕老。【八】幾人存 杜子美の詩に、他時一笑後、今日幾人存。【九】淚痕 李太白の詩に、但見淚痕濕、不覺心恨誰。

【題義】 此詩は、熙寧九年六月の作である。王安石既に政を得。神宗は羣臣に轉對すると、中甫進疏していふ、願陛下師心、勿師人。帝、之を納れ、以て安石を諭し、且つ奏疏を以て之に示した。安石は樂まないで、深く其の言を斥けたさうである。王安石が王中甫を挽く詞にいふ、同學金陵最少年、奏書曾用牘三千、盛名非復居人後、壯歲如何棄我先、種橘園林無舊業、采蘋洲渚有新篇、

蘇山東路春風綠、埋沒誰知太守阡と。紀昀は此詩を評して、其言沈著、非他挽詩有文無情之比と

言つた。

【詩意】仁宗は親しく賢良科出身の十五人を收められた。十五人は何詠・蘇紳・田況・張方平・錢彥遠・吳奎・錢藻・王介・蘇軾・蘇轍・富弼・吳育・錢明逸・夏噩・陳舜俞である。當時、四方の人は争うて諸賢が鵬鷗の活躍振を刮目して看んとしたのである。其中でも、王君の事業の如きは、真に用ひるに堪へるものとした。顧みれば我の衰遅せる、固より論ずるに足らないが、前に擧げた諸賢が、或は出でて官に仕へ、或は退いて家に處る。かくて浮沈十年の後、死ぬとも、生きるとも、會ふとも、離れることも、互に約束は違へないといふ間柄の人人も、今、幾人か存する。東坡の自注に據れば、富鄭公・張宣徽・錢純老及び東坡兄弟のみである。他日、京口に、諸賢の遺跡を尋ねる時、枯れ残りの草に、猶ほ涙を流した痕のあることに氣付かれるであらう。

【餘錄】續通鑑長編に、仁宗朝、策試賢良方正能直言極諫科、天聖（仁宗の年號）八年七月、何詠、景祐（仁宗の年號）元年六月、蘇紳、五年、即寶元（仁宗の年號）元年七月、田況・張方平、慶曆（仁宗の年號）六年七月、錢彥遠、皇祐（仁宗の年號）元年八月、吳奎、嘉祐（仁宗の年號）四年八月、錢藻、六年八月、王介・蘇軾・蘇轍共十人、又、茂才異等科、天聖八年七月、富弼、才識兼茂明於體用科、景祐元年六月、吳育、慶曆三年八月、錢明逸、嘉祐二年七月、夏噩、四年八月、陳舜俞、共五人。

奉和成伯大雨中會客解嘲

成伯大雨中客を會し、嘲を解くを奉和す

樂事難并眞實語。樂事并せ難しとは眞に實語、坐排用意多乖誤。坐排に意を用ゐるも乖誤多し。興來取次或成歡。興來れば取次或は歡を成し、瓦鉤却勝黃金注。瓦鉤は却つて黄金の注に勝る。我生禍患久不擇。我が生禍患久しく擇ばず、肯爲一時風雨阻。肯て一時風雨の爲に阻まる。天公變化豈有常。天公の變化豈常あらんや、明月行看照歸路。明月行くゆく看ん歸路を照らすを。

【字解】(一) 成伯。趙成伯は、尙書郎を以て密州に倅たり。前に出づ。(二) 解嘲。人のあざけりを辨解する。揚雄に解嘲の文あり。漢書本傳及び文選等に載す。(三) 樂事難并。謝靈運、擬魏太子鄴中集詩序に、天下良辰・美景・賞心・樂事、四者難并。(四) 取次。白樂天の詩に、醉把一枝枝取次吟。(五) 瓦鉤。鉤は鉤心。屋の中心の聚る所。杜牧之の阿房宮賦に、鉤心鬪角、盤盤焉困困焉。

【題義】趙成伯が大雨中に客を會し、嘲を解いて、詩を賦した。其の詩を和韻したのである。【詩意】良辰と美景と賞心と樂事と、四者は并せ難いと言つた謝靈運の言葉は、眞に實を穿つて居る。客を會して、坐排に意を用ひるも、兎角、乖誤することが多い。興が來ると、つぎつぎ次第に歡を成すので、歡を得れば、瓦の鉤心も、黄金の柱に勝る。我が生涯は、禍患の來る、久しく之を擇び取ら

なかつたが、肯て一時風雨の爲に阻められたのである。天公の變化は常がない。忽ち晴れて、又、忽ち曇る。今は大雨に阻められても、明月は行くゆく歸路を照らすことにならう。

七月五日二首

七月五日 二首

避_レ謗_レ詩_レ尋_レ醫_レ畏_レ病_レ酒_レ入_レ務_レ

謗を避けて詩醫を尋ね、病を畏れて酒務に入る。

蕭_レ條_レ北_レ窗_レ下_レ長_レ日_レ誰_レ與_レ度_レ

蕭條として北窗の下、長日誰と與にか度らん。

今_レ年_レ苦_レ炎_レ熱_レ草_レ木_レ困_レ薰_レ煮_レ

今年炎熱を苦しむ、草木薰煮を困しむ。

況_レ我_レ早_レ衰_レ人_レ幽_レ居_レ氣_レ如_レ縷_レ

況んや我早衰の人、幽居氣縷の如し。

秋_レ來_レ有_レ佳_レ興_レ秫_レ稻_レ已_レ含_レ露_レ

秋來佳興あり、秫稻已に露を含む、

還_レ復_レ此_レ微_レ吟_レ往_レ和_レ糟_レ牀_レ注_レ

還復此に微吟、往いて糟牀の注ぐに和す。

【字解】 一 避_レ謗_レ 唐_レ陸_レ贛_レ傳_レに、避_レ謗_レ不_レ著_レ書_レ。 二 詩_レ尋_レ醫_レ 王_レ注_レにいふ、謂_レ不_レ作_レ詩_レ也_レと。 三 酒_レ入_レ務_レ 王_レ注_レにいふ、謂_レ止_レ酒_レ不_レ飲_レ也_レと。 晉_レ顧_レ榮_レ傳_レに、恆_レ縱_レ酒_レ酣_レ暢_レ、謂_レ友_レ人_レ張_レ翰_レ曰_レ、惟_レ酒_レ可_レ以_レ忘_レ憂_レ、但_レ無_レ如_レ作_レ病_レ何_レ耳_レ。 四 蕭_レ條_レ 物_レ寂_レしい。 班_レ固_レの西_レ都_レ賦_レに、原_レ野_レ蕭_レ條_レ。 五 長_レ日_レ 通_レ鑑_レ、唐_レ宣_レ宗_レ紀_レに、令_レ狐_レ綯_レ擬_レ李_レ遠_レ杭_レ州_レ刺_レ史_レ、上_レ曰_レ、吾_レ聞_レ、遠_レ詩_レ云_レ、長_レ日_レ惟_レ消_レ一_レ局_レ。 安_レ能_レ理_レ人_レ、綯_レ曰_レ、詩_レ人_レ託_レ此_レ爲_レ高_レ興_レ一_レ耳_レ、未_レニ必_レ實_レ然_レ。 六 幽_レ居_レ 幽_レ棲_レに同じ。 張_レ籍_レの詩_レに、爐_レ峯_レ寺_レ後_レ著_レ幽_レ居_レ。 七 氣_レ如_レ縷_レ 杜_レ子_レ美_レの詩_レに、流_レ汗_レ臥_レ江_レ亭_レ、更_レ深_レ氣_レ如_レ縷_レ。 八 秫_レ稻_レ もちいれ。 晉_レ書_レ、陶_レ潛_レ傳_レに、公_レ田_レ悉_レ令_レ三_レ吏_レ種_レ秫_レ稻_レ。 九 微_レ吟_レ 魏_レ文_レ帝_レ、

燕歌行に、短歌微吟不能長。 【一〇】 糟牀注 杜子美の羌村詩に、頼知禾黍收、已覺糟牀注。糟牀は、酒の糟をしぼる臺。きびなどの收穫がすんだので、糟牀に酒の汁が滴たるかの心地するといふ意。

【題義】 此詩は熙寧九年七月五日の作。超然臺に登つて、趙郎中成伯に答へ、其の詩に和したのである。施注に、法令所載、尋_レ醫_レ、爲_レ去_レ官_レ、入_レ務_レ、乃_レ住_レ理_レ、詩中所用蓋出_レ此_レと。紀昀は此詩を評して、不_レ作_レ古_レ音_レ、而_レ自_レ有_レ古_レ意_レと言つた。

【詩意】 謗を避けて、詩を作らない。又、病を畏れて、酒も飲まない。(架閣酒無_レ債、編修詩未_レ工といふ詩もある。)物寂しく北窗の下に高臥し、夏の長い日を、誰と與にか度らうぞ。今年は殊に炎熱を苦しむ、草木も、薰煮されてしまった。まして我は早衰の人、幽居して力なく、氣も縷の如くである。併し、秋になると、さすがに佳興が多く、秫稻も、已に露を含んだ。また此に小聲にて詩を歌ひ、往いて杜子美が頼ひに知る禾黍の收めらるるを、已に覺ゆ糟牀の注ぐを、と言つた詩に和して見よう。

何處覓_レ新_レ秋_レ蕭_レ然_レ北_レ臺_レ上_レ 何れの處にか新秋を覓めん、蕭然北臺の上。

秋_レ來_レ未_レ云_レ幾_レ風_レ日_レ已_レ清_レ亮_レ 秋來つて未だ云に幾ならず、風日已に清亮。

雲_レ間_レ聳_レ孤_レ翠_レ林_レ表_レ浮_レ遠_レ漲_レ 雲間孤翠聳え、林表遠漲を浮ぶ。

新_レ棗_レ漸_レ堪_レ剥_レ晚_レ瓜_レ猶_レ可_レ餉_レ 新棗漸く剥ぐに堪へ、晚瓜猶は餉すべし。

西風送落日。萬竅含悽愴。
念當急行樂。白髮不汝放。

西風落日を送り、萬竅悽愴を含む。
念ふ當に急に行樂すべし、白髮汝を放たず。

【字解】【一】何處覓新秋。李太白の詩に、何處聽秋聲、蕭蕭北窗竹。【二】風日。晉書、陶潛傳に、環堵蕭然、不蔽三風日。【三】清亮。後漢書、朗顛傳に、清亮自然、被褐懷質。【四】雲間。韓詩外傳に、展而雲間。藝文類聚、徐摛賦に、披殘心於孤翠。【五】林表。文選、謝玄暉の休沐重還道中の詩に、林表吳岫微。【六】新葉漸堪剝。詩、幽風、七月に、八月剝。【七】晚瓜猶可餉。白樂天の遊原上詩に、新葉未全赤、晚瓜有餘馨。【八】西風送落日。西風は秋風。五行説によると、秋を西に配するからである。李太白の詩に、八月西風起。文選、謝靈運、廬陵王墓下詩に、落日次三朱方。朱方は春秋時代には吳の地。今の江蘇丹徒縣。【九】萬竅。莊子、齊物論に、萬竅怒呿、萬木の穴が風を受けて鳴り響く。前に出づ。【一〇】悽愴。禮、祭義に、秋霜露既降、君子履之、必有悽愴之心、非其寒之謂也。【一一】行樂。楊惲の詩に、人生行樂耳、須當貴何時。李太白の詩に、行樂須及春。【一二】白髮不汝放。杜子美の詩に、苦遭白髮不相放。白樂天の詩に、紅顏今日雖欺我、白髮他年不汝放。

【詩意】時、秋にして積雨霽れ、新涼は郊墟に入るとか、何れの處にか其の新秋を覓めようぞ、蕭然たる北臺の上に秋を見るのである。秋になつて、まだ幾何も過ぎないのに、風日は已に清亮で、大空も澄み渡つて、雲の間に孤翠が聳えて居る。又、森の外に遠く漲つて居るものは、連山が水波のやうに浮んで居るのであらう。新しい棗も、だんだんもぎ取るに堪へ、晩瓜も餘馨があつて、猶ほ辨當とすることが出来る。かくて秋の風が落日を送り、萬木の穴が風を受けて鳴り響くと、萬象自ら悲しみと痛みとを含むやうになる。當に速かに行樂すべきである。人生は行樂のみ。なせといふに、白樂

天も言つたやうに、紅顏今日我を欺くと雖も、白髮他年君を放たずだからである。

趙郎中見和戲復答之

趙郎中和せられ、戲れに復之に答ふ

趙子吟詩如潑水。一揮三百六十字。
奈何效我欲尋醫。奈何ぞ我に效うて醫を尋ねんと欲する、
恰似西施藏白地。恰も似たり西施の白地に藏るるに。
趙子飲酒如淋灰。趙子酒を飲む灰を淋るが如し、
一年十萬八千杯。一年十萬八千杯。
若不令君早入務。若し君をして早く務に入らしめずば、
飲竭東海生黃埃。東海を飲み竭して黃埃を生せん。
我衰臨政多繆錯。我衰へ政に臨んで繆錯多し、
羨君精采如秋鶚。羨む君が精采秋鶚の如きを。
頗哀老子今日飲。頗る老子を哀れみ日に飲ましむ、

古今體詩 趙郎中見和戲復答之

【字解】【一】如潑水。潑はそそぐ意。畫斷に、以墨潑絹。韓退之の寄崔立之詩に、文如翻水成、初不用意爲。【二】三百六十字。合注に、趙或聯和三次、七月五日二首詩、則共得三百六十字一矣。【三】尋醫。詩を作らざるをいふ。前にも注した。【四】西施藏白地。白樂天の簡簡吟に、十三行坐事三調品、不肯迷頭白地藏。行坐は、あるいたり、坐つたりする。調品は、行儀作法を學ぶ。迷頭白地藏は、捉迷藏のこと、隠坊をいふ。【五】如淋。宋、陸游の老學庵筆記に、唐人愛飲灰酒、陸龜蒙詩、酒滴灰香似去年。宋、史繩祖の學齋佔畢に、其

爲君坐嘯主畫諾

君が爲に坐嘯して畫諾を主とする。

の然らざるを嘔つて居る。史繩祖、字は長慶は眉山の人で、魏了翁の門

人である。【六】十萬八千杯 李太白、襄陽歌にいふ、百年三萬六千日、一日須傾三三百杯。日を以て之を計れば、則ち一年當に十萬八千杯を飲むべきである。【七】入務 酒を止めて飲まざるをいふ。前にも注した。【八】黃埃 紅塵に同じ。鮑照の蕪城賦に、直視千里外、惟見起黃埃。又、神仙傳に、麻姑曰、海中行復揚塵。【九】臨政多繆錯 漢、董仲舒傳に、臨政而願治。繆錯は、漢書、董仲舒傳に、陰陽錯繆、氣氣充塞。【一〇】精采如秋鶚 精采は、生き生きとした氣象、揚雄の書、觀勳精采。晉書、慕容超載記に、精采秀發。秋鶚は、杜子美の詩に、魏侯骨鯀精神緊、華岳峰尖見秋隼。宋、孫光憲の北夢瑣言に、唐、符載(字は厚之、蜀の人)爲劉闢眞贊云、靈鷲出水、秋鶚乘風。【一一】老子令日飲 後漢、馬援傳に、援爲隴西太守、任吏以職、但總大體而已、賓客故人、日滿其門、諸曹吏、時白外事、輒曰、此丞掾之任、何足相煩、頗哀老子、使不得遊。若大姓侵小民、黠羌欲拒旅、此太守事耳。日飲は、漢、袁盎傳に、盎徙吳相、辭行、兄子種謂盎曰、吳王驕日久、國多姦、南方卑濕、絲(種稱叔父字)曰、能日飲亡何(更無餘事)說王母反而已、如以此幸得脫。【一二】坐嘯主畫諾 後漢、黨錮傳に、汝南太守宗資任功曹范滂、南陽太守成瑨亦委功曹岑暉、二郡爲謠曰、汝南太守范孟博、南陽宗資主畫諾、南陽太守岑公孝、弘農成瑨但坐嘯。畫諾は猶は簽字(署名)と言ふが如し。凡そ文書契約、此を以て承認の據となす。

【題義】此詩は熙寧九年七月の作で、趙郎中成伯が和せられた詩に復答へたのである。紀昀いふ、亦是滑調と。

【詩意】趙郎中が詩を吟ずるは、水を潑するがやうで、一たび筆を揮ふと、三百六十字が成つた。かかる奇才の君が、いかんぞ我に效つて詩を作らずに居ようとする。それは恰も、西施のやうな美人が人目を避けて、捉迷藏をするやうなものである。又、趙郎中はよく酒を飲む。飲むこと灰を滴るがやうである。一年三百六十日、百年三萬六千日、一日に三百杯を傾け、日を以て之を計ると、一年に十

萬八千杯を飲む計算となる。若し趙君をして早く酒を止めて飲まないやうにしなれば、東海の水を飲み竭して、紅塵を生ずることにでもなるであらう。我は衰へ、政に臨んで繆錯のことが多い。君が生き生きとした氣象の秋鶚(鶚は鷹鷂の屬)の如きを羨ましく思ふ。昔、馬援は隴西の太守となつて、吏に任ずるに職を以てし、ただ大體を總べるのみであつた。賓客や故人が日に其門に満ちた。諸曹吏が時に外事を白すると、これ丞掾の任である。何ぞ相煩はすに足らん。頗る老子を哀れみ、遨遊を得しめよ。若しも大姓が小民を侵し、黠羌が旅を拒がうとするときは、此れ太守の事であると言つたさうである。今、頗る老子を哀れみて日に酒を飲みましむ。ここに君が爲に坐嘯して、文書の署名を主とらうと思ふのである。

次韻周邠寄雁蕩山圖二首

周邠が雁蕩山圖に寄するに次韻す 二首

指點先憑採藥翁 指點先づ藥を採る翁に憑つて、

丹青化出大槐宮 丹青化し出す大槐宮。

眼明小閣浮烟翠 眼は明かなり小閣の烟翠に浮ぶに、

齒冷新詩嚼雪風 齒は冷かなり新詩の雪風を嚼むに。

二華行看雄陝右 二華行くゆく看る陝右に雄なるを、

【字解】(一)周邠 字は開祖、

錢塘の人。東坡は杭に倅たること三年、開祖と數々湖山の遊に従つた。とは酬唱に見えて居る。故にいふ、西湖三載與君同。(二)雁蕩山 温州樂清縣に在る。開祖は樂清縣の令たり。(三)指點 杜子美の少年

九仙今已壓京東。九仙今已壓京東。

此生的有尋山分。此生的に山を尋ぬる分あり、

已覺溫台落手中。已に覺ゆ溫台の手中に落つるを。

行に、指三點銀瓶一索酒管。【四】探藥翁。後漢、龐公傳に、携其妻子一登鹿門山、因採藥不返。【五】丹青。漢書、蘇武傳に、雖三竹帛所載、丹青所畫、何以過子卿。晉書、顧

愷之傳に、善丹青、圖寫特妙。

【六】大槐宮。異聞集に、淳于棼家居廣陵、宅南有古槐樹、棼醉臥其下、夢二紫衣吏召棼曰、

大槐安國王致命以爲南柯太守、及覺、尋其所經由、乃宅南大槐下蟻穴耳。【七】齒冷。李洞送遠上人詩に、齒因吟後冷。

二華。文選、張平子の西京賦に、綴以二華、注にいふ、大華、少華也。王注に、太華在華州華陰縣南、少華居其西、佐命之山也

と見ゆ。山海經に、太華之山削成、而四方其高五千仞、其廣十里、又西八十里曰小華之山、注即小華山。【九】九仙今已壓京東。東

坡の自注に、將赴河中、密通太華、九仙在東武、奇秀不減雁蕩也。【一〇】此生。杜子美の詩に、自斷此生休問天。【一一】

溫台落手中。王注に、雁蕩山在溫州、台州有天台山。太平寰宇記に、上元二年、分括州置溫州、以溫嶠嶺爲名、北至台州

州五百里、台州、即回浦縣地、三國、吳少帝置臨海郡、唐、武德五年、改台州、北至越州五百里。落手中は、杜子美の將適

吳楚詩に、不意青草湖、扁舟落吾手。白樂天之泛春池詩に、天與愛水人、終焉落吾手。

【題義】此詩は熙寧九年十月の作である。東坡が密州に在るとき、周開祖に尺牘を與へていふ、脱

湖北之行、而得樂清、正如舍魚而取熊掌也。又いふ、寄示山圖、欲求善本而不可得者、

新詩清絕、輒和二首。紀昀は此詩を評して、此首却排宕、然二首相連、不能割取此首、凡詩有

可刪取者、有必不可刪取者、竟陵笑選詩之惜羣、非知詩者之言也。

【詩意】雁蕩山は、龐公といふ藥を採る翁に憑つて、一一指し示された。そして美しく彩色をして大

槐安國の宮殿をば寫し出したのである。殊に目も明かであるのは、烟翠に浮んだ小閣である。齒の冷さを感じるのは、雪風を囁む如き新詩である。太華、少華の二山は、陝西の右に聳えて居る。即ち太華の山は華州華陰縣の南に在る。其の高さは五千仞、其の廣さは一十里、少華の山は、其の西八十里に在る。佐命の山とも見える。東坡は河中に赴かんとして、太華の山に密邇したが、九仙は東武に在つて、奇秀であることは、雁蕩山に劣らなく、山勢は京東を壓して居る。此の生涯は、常に山を尋ねる分があるので、已に溫州に在る雁蕩山や台州に在る天台山が、手の中に落ちたことを覺える。

西湖三載與君同。西湖に三載君と同じうせしも、

馬入塵埃鶴入籠。馬は塵埃に入り鶴は籠に入る。

東海獨來看出日。東海に獨り來つて出日を見、

石橋先去踏長虹。石橋に先づ去つて長虹を踏む。

遙知別後添華髮。遙かに知る別後華髮を添ふることを、

時向尊前說病翁。時に尊前に向つて病翁を説かん。

所恨蜀山君未見。恨むる所は蜀山に君未だ見ざるを、

【字解】西湖三載云云。東

坡が杭州に通判であつた時、周開祖

と屢々湖山の遊をなした。王注にい

ふ、公通守杭州時、開祖知錢塘縣

と。【二】鶴入籠。顧況の酬柳相

公一詩に、箇身恰似籠中鶴。【三】

看日出。尙書に、寅賓出日、平

秩東作。漢官儀にいふ、泰山東南名

曰日觀、雞一鳴時、見日始出。齊

地記に、秦始皇作三石橋欲過海、

他年攜手醉郵筒

看日出處、有神能驅石下海、石去不速、神輒鞭之、石皆流血。【四】

石橋 山志に、天台山石橋、廣不盈尺、長數十丈、下臨絶澗、渡得平路、上有瓊樓・玉闕・碧林・醴泉・瑤草、神奇莫可名狀、舊稱金庭洞天。天台記に、石橋、長七丈、北闊二尺、南闊七尺、龍形龜背、莓苔甚滑、孫綽天台賦に、踐莓苔之滑石、是也。【五】華髮 晉、羊祜の讓開府表に、服事華髮。晉、傅玄傳に、十五入君門、一別終華髮。李太白の詩に、華髮不耐秋、飄然成衰蓬。【六】郵筒 華陽風俗錄に、郵人制竹爲筒、釀酒、筒中閉以藕絲、包以蕉葉、信宿、香達於外、然後斷之、俗號郵筒酒。成都記に、郵縣因水得名。杜子美の詩に、酒憶郵筒不用沽。

【詩意】我は杭州に倅となり、西湖に在ることが三年、其の間、君と同じく湖山に遊んで、酬唱をなしたことは、今に忘れない。當時を憶ふと、出遊しても、馬は塵埃の中に入つた。そして此の身は恰も籠の中の鶴のやうであつた。然るに圖らずも、獨り、東海に來つて、出づる日を看、海中の石橋を先づ渡るときは、恰も長虹を踏むの思がある。遙に知る一別の後は定めし華髮を添へられたことを。そして、折折は酒樽の前で、此の病翁のことも話されることと存する。ただ残念なのは、蜀山で、君にお目に懸ることが出来なかつたことである。他年、共に手を攜へて、この郵縣の酒に酔はうではないか。(昔、山濤、蜀の郫城を治めたとき、筠管を用ひ、醪醕(重釀の酒)を釀して、酒を作り、淡旬(十日間)にして方に開いた所、香が百歩に聞えたさうである。故に蜀の人は、其の法を傳へ、之を郵筒と號けたのである。)

【餘録】雁蕩山は温州の樂清縣に在り、天下の奇秀である。然れども古より圖牒に記したものがない。祥符中、玉清宮を造るに因つて、山を伐りて材を取る。方に人あり之を見る。此時、尙ほ未だ名がなかつた。按ずるに西域書に、阿羅漢諾矩羅居震旦東南大海際雁蕩山芙蓉峰龍湫とある。唐の貫休、諾矩羅の贊を爲る。雁蕩經行雲漠漠、龍湫宴坐雨濛濛の句あり。此山の南に芙蓉峰あり、下に芙蓉驛ありて、前は大海に臨む。然れども未だ雁蕩龍湫の所在を知らない。後、木を伐るに因つて始めて此山を見る。山頂に大池あり、相傳へて以て雁蕩となす。下に二潭水あり、龍湫となす。經行峽。宴坐峰あり、皆、後人、貫休の詩に因つて之を名けたものであらう。唐宋詩醇に、雁蕩爲自古圖牒所不記、祥符中、因採官木、始見之、此雖覽圖、未歷其地、故但以下小閣浮煙翠一語、形容其妙、以三所得見之二華九仙作陪、按、周邵生於西湖、而官於雁蕩、軾生於蜀山、而官於西湖、次作稱西湖同遊、蓋因其所見、以致未見之思、結更以蜀山君未見爲恨、匪自矜以傲人、蓋其交誼反覆纏綿、益然言表一と言つて居る。

和魯人孔周翰題詩二首 并序
魯人孔周翰が題詩に和す 二首并に序
孔周翰嘗爲仙源令。中秋夜以事留於東武官舍中。時陳君宗古任君建中。皆在郡。其後十七年中秋。周翰持節過郡。而二君已亡。感時懷舊。留詩於壁。又其後五年中秋。軾與客飲於超然臺上。聞周翰乞此郡。客

有誦其詩者。乃次其韻二篇。以爲他日一笑。

【訓讀】孔周翰嘗て仙源の令となる、中秋の夜、事を以て東武の官舎の中に留まる。時に陳君宗古・任君建中、皆、郡に在り。其後、十七年中秋、周翰は節を持して郡を過ぐ。而して二君已に亡し。時に感じ舊を懐ひ、詩を壁に留む。又、其後五年中秋、軾は客と超然臺上に飲む。周翰此郡を乞ふと聞く。客に其詩を誦するものあり。乃ち其韻に次す二篇、以て他日の一笑となす。

【字解】【一】仙源令 宋史、地理志に、仙源、魏、曲阜縣。大中祥符五年、改、禮志に、孔氏子孫、知仙源縣事。【二】中秋 白樂天の詩に、中秋三五夜、明月在前軒。宋、吳自牧の夢梁錄に、八月十五日、中秋節、此日三秋恰半、故謂之中秋。此夜月色倍明于常時、又謂之月夕。【三】持節 天子より符節を賜はる。又、天子の勅命を符命といふ。文心雕龍に、符命炳耀。【四】留詩於壁 七集、孔周翰の詩にいふ、屈指從來十七年、交親零落一潸然、嬋娟再見中秋月、依舊清輝照客眠。

壞壁題詩已五年。

故人風物兩依然。

定知來歲中秋月。

又照先生枕麴眠。

【字解】【一】壞壁 一本に壞筆に作る。【二】故人 史記、范雎傳に、綈袍戀戀、有故人之意。唐、常建の詩に、故人家在桃花岸。【三】風物 風景に同じ。陶淵明の文に、天氣澄和、風物閒美。【四】依然 南史、沈文季傳に、依然猶有故情。

【題義】此の詩は熙寧九年八月の作。東坡は十五日に客と超然臺上に飲み、孔周翰が方に密州を乞ふと聞いて、周翰が前に、東武を過ぎて壁に題した詩を和したのである。紀昀いふ、二詩、皆淺而有致と。

【詩意】月日は流れて速く、超然臺上、くづれた壁に詩を題してから已に五年となつた。(王文誥いふ、壞壁題詩、截清感舊二層、下句出落周翰、細密之甚と。)故人の孔君も無事、風物も昔のままである。定めて知る、來歲中秋の月は、又、先生の酒を枕にして眠る處を照らすことであらう。

更邀明月說明年。

記取孤吟孟浩然。

此去宦遊如傳舍。

揀枝驚鵲幾時眠。

【字解】【一】邀 要と音義通ず。待ち受けて迎へる意。【二】記取 記得といふに同じ。取は助字。【三】孤吟孟浩然 孟襄陽の、秋宵月下有懷の詩に、秋空明月懸、驚鵲棲未定の句あり。孟襄陽集の序に、開游祕省、秋月新霽、諸英華賦詩作會、浩然句曰、微雲淡河漢、疏雨滴梧桐、舉坐嗟其清絕、閣筆不復爲繼。【四】宦遊 仕官して他郷に暮す。史記、司馬相如の傳に、王吉曰、長卿久宦遊、不遂而來過我。白樂天の詩に、自我從宦遊、七年在長安。【五】傳舍 史記、酈食其傳に、沛公至高陽傳舍。【六】揀枝 劉禹錫の詩に玉樹容樓莫揀枝。

【詩意】今夜、超然臺上の月、明年も亦、同じく此の明月を迎へることであらう。明月を望んで、明年を説く。憶ひ起すのは孟浩然的秋空うして明月懸り、驚鵲棲むこと未だ定まらずの句である。此

處を去つて、宦遊する。宦遊の身は傳舎に在るが如く、轉轉して定めがない。譬へば棲む枝を擇ぶ鶯鵲の如く、幾時か眠るであらうか。

送碧香酒與趙明叔教授

碧香酒を送つて趙明叔教授に與ふ

聞君有婦賢且廉。聞く君が婦あり賢にして且つ廉、

勸君慎勿爲楚相。君に勸む慎んで楚の相と爲ること勿れと。

不羨紫駝分御食。紫駝の御食を分つを羨まず、

自遣赤脚沽村釀。自ら赤脚をして村釀を沽はしむ。

嗟君老狂不知愧。嗟す君が老狂にして愧づることを知らず、

更吟醜婦惡嘲謗。更に吟す醜婦嘲謗を惡むを。[ざるを、

諸生聞語定失笑。諸生語を聞かば定ず失笑せん。

冬暖號寒臥無帳。冬暖なるに寒を號ぶは臥すに帳なけ[

碧香近出帝子家。碧香近帝子の家に出づ、[ればなり。

鵝兒破殼酥流盡。

鵝兒殼を破つて酥盡に流る。

【字解】【一】碧香酒 東坡の詩に、碧香近出帝子家の句がある。

王駙馬(都尉王詵)の家で、碧香酒を造つたことをいふ。黄山谷集に、送碧香酒、用三子瞻韻、戲贈鄭彦能詩がある。

【二】趙明叔教授 膠西の人。東坡が密州に守たりしとき、先づ薄薄酒詩を賦して之に贈り、元豐八年、冬、文登(縣の名、山東、膠東道に屬す)に赴き、密州を過ぎ、趙明叔(喬禹功)に次韻す。先生依舊廣文貧の句がある。

【三】勿爲楚相 史記、滑稽傳に、優孟爲孫叔敖衣冠、抵掌談語、歲餘、像孫叔敖、莊王

不學劉伶獨自飲。

劉伶が獨り自ら飲むを學ばず、

一壺往助齊眉餉。一壺往いて助く眉に齊しうする餉。

相不足爲也、如孫叔敖、盡忠爲廉、以治楚、今死、其子無立錫之地、必如叔敖、不如自殺、於是、莊王謝優孟、召叔敖子、封之寢丘。

【四】紫駝 杜子美の麗人行に、紫駝之峰出翠釜、水精之盤行素鱗。厨膳の驕奢をいふ。

【五】分御食 麗人行に、御厨絡繹送八珍。

【六】赤脚 素足をいふ。韓退之の寄盧全詩に、一奴長鬚不裹頭、一婢赤脚老無齒。杜子美の苦熱詩に、安得赤脚踏層冰。

【七】村釀 村酒といふに同じ。韓退之の縣齋の詩に、村酒時邀迓。陸游の詩に、細傾村釀聽新蛙。

【八】失笑 噴飯といふに同じ。吳志、步騭傳の注に、每讀騭表、輒失笑。

【九】冬暖號寒云云 韓退之の進學解に、冬暖而兒號寒、年豐而妻啼飢、頭童齒豁、竟死何裨。

【一〇】碧香 都尉王詵の家釀である。前に注す。

【一一】帝子 楚辭、屈原九歌に、帝子降兮北渚。注にいふ、帝子謂堯女娥皇女英也。

【一二】鵝兒 杜子美の詩に、鵝兒黃似酒、對酒愛新鵝。鵝黃酒は、黄色を帯びた酒。東坡の詩に、應傾半熟鵝黃酒、照見新晴卵碧天。

【一三】劉伶獨自飲云云 晉、劉伶傳に、伶求酒於妻、妻涕泣諫曰、君酒太過、必宜斷之、伶曰、善、吾不能自禁、惟當祝鬼神、自誓、便可具酒肉、妻從之、伶跪祝曰、天生劉伶、以酒爲名、一飲一斛、五斗解醒、婦兒之言、慎勿可聽、仍引酒御肉、塊然復醉。前にも出づ。

【一四】齊眉餉 後漢、梁鴻傳に、其妻孟光爲具食、不下敢於鴻前、仰視、舉案齊眉。

【題義】此詩は熙寧九年八月の作。碧香酒を趙明叔に送つたとき添へた詩である。紀昀いふ、亦滑調と。

【詩意】承はれば君には賢明にして廉潔な奥方が居られ、平生君に決して國の相とはならないやうにと勸めて居られるといふことである。(昔、優孟は孫叔敖の衣冠を爲り、掌を抵つて談じ、孫叔敖と

見間違ふばかりになつた。そこで莊王の前に進んで壽を爲すと、王は大に驚いて、之を相となさうとした。優孟は歸つて妻と相談致したいと請ふ。三日の後、復、來つていふやう、妻は慎んで楚の相となるなかれといふから、折角なれど御承けは申し兼ねると。此の故事に據つたのである。富貴の身分となつて、紫駝(橐駝)の脊肉(極めて美味)を御前から賜はることは、羨ましくはない。自ら一婢赤脚をして村酒を沽はしめる。これが君の態度である。君の老狂にして外觀を愧ぢないのを嗟ぐが、更に吟ず、醜い女でありながら、他の嘲謗を悪んで居ることを。かの粉黛を極め、盛服を窮めても、未だ必ずしも醜婦なくんばあらず。華采を廢し、文繡を去つても、未だ必ずしも美人なくんばあらずといふ古語もある。諸生は此を聞かば、必ず吹き出すことであらう。冬、暖かであつても、寒いと號ぶのは、臥するに帳がないからであらう。何事も無理があつてはならない。さて碧香の酒は、近頃、王詵駙馬都尉(天子の女婿)の家で醸される。又、鵝兒黃は酒に似、殼を破つて、其の酥(牛酪の類)は盞に流れる。酒に對して、新鵝を愛する。昔、劉伶は酒を妻に求めると、妻は泣いて之を諫めた。伶いふ、當に鬼神に祝して、自ら誓ふべし。酒肉を具ふべしと。妻、之に従ふ。伶、酒を引き肉を御し、塊然として復、酔うたといふ話がある。劉伶が獨り、自ら酒を飲む態度を學んではならない。案を擧げること、眉に齊うして食を其夫(梁鴻)の前に致したのは孟光である。其孟光のやうな妻が捧げる一壺の酒は、固より飲むことを勧めるのである。

趙既見和復次韻答之

趙既に和せられ、復次韻して之に答ふ

長安小吏天所放

長安の小吏は天の放つ所

日夜歌呼和丞相

日夜歌呼丞相に和す

豈知後世有阿瞞

豈知らんや後世阿瞞あるを

北海樽前捉私釀

北海樽前私釀を捉ふ

先生未出禁酒國

先生は未だ出でず禁酒國

詩語孤高常近謗

詩語孤高常に謗に近し

幾回無酒欲沽君

幾回か酒なく君に沽はんと欲す

却畏有司書簿帳

却つて畏る有司の簿帳に書するを

酸寒可笑分一斗

酸寒笑ふべし一斗を分つを

日飲無何足袁盎

日に飲む何もなく袁盎を足らしむ

更將險語壓衰翁

更に險語を將つて衰翁を壓す

只恐自是臺無餉

只恐る是より臺に餉なきを

【字解】

【一】天所放 莊子、馬蹄篇に、一而不黨、命曰天放。天放は天の放つ所の意で、拘縛されないことである。
 【二】日夜歌呼 漢曹參傳に、相令後園、近吏舍、吏舍日飲歌呼、參聞廼反、取酒張坐飲、大歌呼、與相和。
 【三】阿瞞 魏の曹操、字は孟德。小字は阿瞞。漢の相國曹參の後。
 【四】北海樽前云云 後漢孔融傳に、曹操以三年饑兵興、表制酒禁、融頗書爭之、多侮慢之辭、融嘗爲北海相。融常に曰く、座上客常滿、樽中酒不空、吾憂なしと。
 【五】禁酒國 盧仝の歎昨日の詩に、何時得得出禁酒國、滿壺釀酒曝背眠。
 【六】無酒欲沽君 毛詩に、酸寒可笑云云 唐、王績傳に、待詔

有酒醉我、無酒酷我。【七】書簿帳 東坡の自注に、近制公使酒過數、法甚重と。

古今體詩 趙既見和復次韻答之

門下省、故事、官給酒日三升、或問、待詔何樂、答曰、良醖可戀耳、侍中陳叔達聞之、日給一斗、時稱斗酒學士。東坡の詩に、故人留飲慰酸寒。【九】日飲無何云云。漢、袁盎傳に、南方卑澁、絲能日飲云云、前に出づ。【一〇】險語、韓退之の醉贈張籍詩に、險語破鬼膽。【一一】臺無餉、孟子萬章篇に、自是臺無餉也。臺は賤吏の使命を主るもの。

【題義】前詩の趙明叔教授が既に東坡の詩に和せられたのを、東坡はまた次韻して之に答へたのである。紀昀いふ此首差可、然亦不佳と。

【詩意】長安の小吏は、吏にして吏でない。自然の中に放肆して、毫も拘縛されないから、之を天放と名ける。彼等は日夜、吏舎に在つて、酒を飲んで歌呼を事とする。吏舎は相舎の後園に近いので、丞相曹參も酒を呼んで、與に相和したのである。豈に知らんや、自分の後世に曹操（小字を阿瞞といふ）といふ英雄が出でて、凶年に際し特に禁酒をなし、北海の相、孔融の樽前で、其の私釀を捉へることがあらうとは。さて趙先生には未だ禁酒國を出でないから、所謂、滿甕釀酒曝背眠といふ醉郷に遊ぶことが出来ないであらう。而も先生の詩語は孤高にして、常に誹謗に近い。又、幾度も酒がなくて、一宿酒を釀さうとした。却つて畏れるのは、酒法が嚴重であるために、役人に私釀の數を過したことを咎められ、簿帳に記されることである。唐の王績は門下省に待詔であつた頃、省中の故事によつて、酒を給はること、日に三升であつたのを、特別に一斗を給せられたので、時に斗酒學士と稱された。赤貧の我身にも亦、一斗を分けてもらひたい。かくて日に飲む、飲むことの外には餘事がないのは、例の袁盎を満足させた所以である。更に險語を以て衰へた此の翁を壓することは、自今臺吏（賤吏の使命を主る吏）の食を餽ることがなくなる事である。（酒を釀すことが多いと、食べる穀物が少くなる譯である。）

趙郎中往莒縣逾月而歸復以一壺遺之仍用前韻

趙郎中莒縣に往き、月を逾えて歸り、復一壺を以て之に遺り、仍つて前韻を用ふ

東隣主人游不歸。東隣の主人游んで歸らず、
悲歌夜夜聞春相。悲歌夜夜春相を聞く。
門前人鬧馬嘶急。門前人鬧がしく馬嘶急に、
一家喜氣如春釀。一家の喜氣は春釀の如し。
王事何曾怨獨賢。王事何ぞ曾て獨り賢なるを怨みん、
室人豈忍交謫謗。室人豈交謫謗するに忍びんや。
大兒踉蹌越門限。大兒踉蹌門限を越え、
小兒啾啞語繡帳。小兒啾啞繡帳に語る。
定教舞袖掣伊涼。定す舞袖をして伊涼を掣せしめ、

古今體詩 趙郎中往莒縣逾月而歸復以一壺遺之仍用前韻

【字解】一 莒縣 春秋隱公二年、莒人入向。莒も向も小國の名。

漢書、地理志に、莒縣屬城陽國。隋は莒縣を廢して莒州に屬す。貞觀八年、莒州を廢し、莒縣を以て密州に屬す。名勝志に、今爲莒州、屬青州府。二 東隣 周易、既濟に、東隣殺牛、不如此西隣之禴祭、實受其福。禴祭は薄祭、東隣の牛を殺して盛祭を行ふは、西隣の薄祭を以てするも、其の時を得るに如かざるなりといふ意。東隣は、東家といふに同じ。孟子、告子篇に、踰東家牆

更想夜庖鳴甕盎 更に想ふ夜庖の甕盎に鳴くを。

題詩送酒君勿誚 詩を題して酒を送る君誚るなかれ、

免使退之嘲一餉 退之をして一餉を嘲らしむるを免る。

羽紀に、項王乃悲歌慨、自爲詩。陶淵明の楚調示龐鄧一詩に、慷慨時悲歌、鍾期信爲賢。

【五】春相 春く者の歌ふ杵うたを

【六】春醞 春造る酒。

王績の詩に、春醞煎松葉。孟貫の詩に、石泉春醞酒、松火夜煎茶。

【七】王事 詩、唐風に、王事靡盬、憂我父母。又、小雅、

四牡篇に、王事靡盬、我心傷悲。

【八】獨賢 詩、小雅に、大夫不均、我從事獨賢。

【九】室人豈忍交謫 詩、國風に、王事

適我、政事一埤益我、我入自外、室人交徧謫我。

【一〇】大兒 世説に、爾衡與孔融、楊修、友善、常曰、大兒孔文學、小兒楊德

祖、餘子碌碌莫足數云云。

【一一】踉蹌越門限 踉蹌は行くことの正しくないこと。韓退之の詩に有兒雖甚憐、教示不

祖、餘子碌碌莫足數云云。

【一二】伊涼 曲調の名。商調の太曲。開元中、西涼節度使蓋嘉運進む。白樂天の詩に、新教小玉唱伊州。

【一三】勿誚 史記、樊噲傳に、誚讓項羽。

【一四】退之嘲一餉 韓退之の醉贈張祕書一詩に、長安衆富兒、盤饌羅瓊華、不

字飲、惟能醉紅裙、雖得三餉樂、有如聚飛蚊。

【題義】此詩は熙寧九年八月の作。趙成伯が莒縣に往いて蝗を捕へ、月を逾えて歸る。復一壺を遺

り、前韻を用ひた詩を添へたのである。

【詩意】東隣の主人は、四方に遊んで歸らない。悲歌夜夜春くものの杵歌を聞くのみである。門前は

人で鬧がしく、馬の嘶く聲も急である。一家の喜びの氣に満ちて居るは、春醞す酒のやうであつて、王

事は堅固でなくてはならないから、我は王事の爲に、心を傷めしめる。我は王事に従つて、獨り賢とし

て勞するを怨みない。かく我は外に苦勞し、時に外より家に入れば、室人が交徧く我を誚めたる。

まことに堪へ難いのである。我家の大兒は踉蹌として歩行も正しくない。又、小兒は言葉もまた十分

でなく、繡帳の中に語つて居る。君の方は定めし舞袖をして伊涼の曲でも奏せしめて居られることと

あらう。又夜會の料理など、甕や盎に盛られて居るであらう。ここに詩を題して酒一壺を送る程に、

君よ、誚つてはならない。昔、韓退之は酔うて張祕書に詩を贈つて、文字の飲を解せずして、惟よく

紅裙に酔ふ。一餉の樂みを得ても、聚飛の蚊の如きであると言つたが、今我は、退之が一餉の嘲りを

免れた譯である。

蘇潛聖挽詞 蘇潛聖の挽詞

妙齡馳譽百夫雄 妙齡譽を馳す百夫の雄、

晚節忘懷大隱中 晚節懷を忘る大隱の中、

悃悞無華眞漢吏 悃悞無華は眞に漢吏、

文章爾雅稱吾宗 文章爾雅吾宗と稱す。

趨時肯負平生志 趨時肯て平生の志に負かんや、

【字解】蘇潛聖 名は泳、

成都、新繁の人。進士に擧げられ、

乾州に知となり、又、邛州に知と

なつた。官は職方郎中に至つて致仕

す。年六十餘で卒す。三子あり。中

子名は槃、年十八、嘉祐四年登第し

著作郎に終はる。挽詞 挽歌

古今體詩 蘇潛聖挽詞

五〇九

有子還應不死同。子あれば還應に死せざると同かるべし。

惟我閒思十年事。惟我閒に十年の事を思へば、

數行老淚寄西風。數行の老淚西風に寄す。

【一】 妙齡に同じ。前に屢々出づ。【二】 妙齡年わかし。晉、郭璞の詩に、悲三此妙齡逝。宋史、葉崇禮傳に、妙齡秀發、聰敏絶人。【三】 馳譽、孔稚

珪の北山移文に、馳妙譽於浙右。【四】 百夫雄。詩、秦風、黃鳥に、百夫之特。文選、王仲宣の詩に、生爲百夫雄、死爲壯士規。

【五】 晚節。老年をいふ。節は時の意。唐書に、晚節僂蹇、爲姦臣所擠。【六】 大隱。王康琚の詩に、小隱隱三陵藪、大隱隱朝市。

【七】 白樂天の詩に、大隱住朝市、小隱住丘樊。【八】 悃悃無華。悃悃は至誠の意。漢書、劉禹傳に、發憤悃悃、信有三憂國之心。後漢、

章帝紀に、元和二年、詔曰、安靜之吏、悃悃無華。【九】 漢吏。後漢、公孫述傳に、雖爲漢吏、無所憑資。【一〇】 文章爾雅。爾

雅は正しく美はしい。漢、儒林傳に、公孫宏言、臣謹案、詔書律令下者、文章爾雅、訓詞深厚。【一一】 吾宗。左傳、昭公四年に、魯

以先子之故、將存吾宗。【一二】 趨時。時世をおふ意。周易に、變通者趨時者也。【一三】 有子。左傳、昭公十六年に、季平子

曰、子服氏有子哉。【一四】 不死同。三國、吳、張溫傳に、孫權問公卿曰、溫當今與誰爲比、顧雍曰、當今無輩、權曰、如之是、

張允不死也。【一五】 數行老淚。韓退之の詩に、幾行哀淚落煙霞。【一六】 西風。李太白の詩に、八月西風起。前にも注す。

【題義】 此詩は熙寧九年九月の作。蘇潛聖の訃を聞いて、挽詞を作つたのである。潛聖は、慶歷二年に登第した人である。

【詩意】 蘇潛聖は、年の若い時分から、聰敏秀發で、夙に文苑に譽を馳せ、所謂百夫中の雄俊であつた。(詩經に百夫之特といふ字面がある。)晩年には世に懷を忘れて、眞の隱者となつた。朝市に隠れたのである。又、至誠にして少しも修飾をしないことは、眞に漢の吏たるに愧ぢない。そして文章の正しく美はしいことも、吾宗と稱されて居る。其の時勢を觀て、よく之に應ずることは、肯て平生の志

に負かなかつた。今は此世の人でないが、立派な子があつて進士に擧げられ著作侍郎とまでなつたから、また應に死なないと同じである。ただ我は閉に過ぎし十年の事を思へば、萬感が胸に攢まつて、數行の老淚を西風に寄するのである。(西風は秋風である。五行説に據ると秋を西に配するからである。)

和晁同年九日見寄

晁同年九日に寄せらるるに和す

仰看鸞鵠刺天飛。仰ぎ見る鸞鵠の天を刺して飛ぶを、

富貴功名老不思。富貴功名老いて思はず。

病馬已無千里志。病馬已に千里の志なく、

騷人長負一秋悲。騷人長へに一秋の悲みを負ふ。

古來重九皆如此。古來重九皆此の如し、

別後西湖付與誰。別後西湖誰に付與せん。

遣子窮愁天有意。子をして窮愁せしむるは天に意あり。

吳中山水要清詩。吳中の山水は清詩を要す。

【字解】 一、晁同年。晁端彦、字は美叔。時に提點兩浙刑獄置司杭州であつた。同年は、國史補に、俱捷謂之同年。二、鸞鵠刺天飛。鸞は神鳥、鵠は白鳥。韓退之の祭柳

子厚文に、一斥不復、羣飛刺天。三、千里志。晉、王敦傳に、每酒

後、軌詠魏武樂府歌曰、老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已。

四、騷人。正字通に、屈原作離騷、言遭憂也、今謂詩人為騷人。

五、一秋悲。楚辭、宋玉九辨に、悲哉秋之爲氣也。又、皇天平分四時兮、竊獨悲此凜秋。

重九。重陽といふに同じ、陰曆九月九日の節句。王筠の詩に、重九

古今體詩 和晁同年九日見寄

惟嘉節。【七】皆如レ此。古往今來只如レ此、牛山何必獨沾レ衣。【八】付與。杜子美の詩に、付與後世二傳。張祐の詩に、孔雀羅衫付阿誰。【九】窮愁。史記、虞卿傳に、太史公曰、虞卿非窮愁、亦不能著レ書以自見於後世。【一〇】要三清詩。白樂天の讀三李杜集二詩に、天意君須レ會、人間要三好詩。

【題義】此詩も熙寧九年九月の作である。晁端彦が九月九日に寄せられた詩に和したのである。端彦は東坡と同じ年に進士の試験に及第したから、晁同年といつたのである。紀昀は此詩を評して沈著排宕と。查慎行はいふ、淡而彌旨、知レ此者鮮矣と。王文誥いふ、永叔謂、公必名レ世、使三美叔訂三交兩公、亦頗自負、此在嘉祐極盛時也、詩前半、皆寓三此慨、後之本事、乃順レ流而下、合三成一局一者也。

【詩意】仰いで見ると、鸞や鶴などが天を刺して、羣り飛んで居る。青空の念が起るであらう。併し此身は已に老いて功名富貴を思はない。老驥伏レ櫪志在千里は、心持のよい名句であるが、病馬の如きが身には已に千里の志もない。詩人は長へに此の秋の哀れを悲しむのである。古來重陽の節の感じは、皆、此の如きである。一別後、西湖の風光は誰に付與するか。(王文誥いふ、此句乃待レ鞠之證、時已不在レ杭也。)詩人は窮してますます見はる。子をして窮愁の境遇に在らしめるは、天に意がある。白樂天も、天意君須らく會すべし、人間好詩を要すと云つた。然り吳中の好山水は、君の清詩を要するのである。

【餘録】晁端彦、字は美叔、章惇(子厚)と同じく乙亥に生れ、同榜に及第し、又、同じく館職となつたから、常に三同を以て相呼ぶ。宋、哲宗の紹聖の初、子厚は入りて相となつた。叔美は其の施設の大に金山に在つた時に言つた所と背くを見、力を竭くして之を諫めた。子厚は怒り、黜けて陝守とした。叔美は所親に謂つて曰く、三同今は百不同なりと。續通鑑長編に據ると、熙寧九年五月、晁端彦待レ鞠於潤州、因レ違法赴三杭州云云と。東坡の此の和詩は、端彦が尙ほ潤州に在つた時であらう。

送喬施州

喬施州を送る

恨無負郭田二頃。恨むらくは負郭の田二頃なきを、
空有載行書五車。空しく載行の書五車あり。
江上青山橫絕壁。江上の青山絶壁に横はり、
雲間細路躡飛蛇。雲間の細路飛蛇を躡む。
鷄號黑暗通蠻貨。鷄は黑暗に號いて蠻貨に通じ、
蜂鬧黃連採蜜花。蜂は黃連を鬧して蜜花を採る。
共怪河南門下士。共に怪む河南門下の士、
不應萬里向長沙。應に萬里長沙に向ふべからず。

古今體詩 送喬施州

【字解】【一】喬施州。喬、字は禹功。嘗て太傅となり、左藏となる。(唐の時、左右藏に、皆、令丞を置く。)又、欽州に知となり、施州に知となる。元和郡縣志に、春秋巴國之界、漢爲三巫縣之境、後周置三施州。輿地廣記に、施州屬三夔州路。【二】負郭田二頃。史記、蘇秦傳に、使三晉有洛陽負郭田二頃、吾豈能佩三六國相印二乎。【三】書五車。藏書の多きをいふ。莊子、天下篇に、惠施多

方、其書五車。唐、李襲譽傳に、罷揚州、書數車載、嘗謂子孫曰、負京有賜田十頃、耕之、足以食、江都書、力讀、可進求一
宿。杜子美の詩に、男兒須讀五車書【四】絕壁。世説に、桓温入峽、絕壁天懸。【五】號黑暗。東坡の自注に、胡人謂犀爲
黑暗。酉陽雜俎に、犀角通者、其理有倒插、正插、腰鼓插、倒者、一半已下通、正者、一半已上通、腰鼓者、中斷不通、故波斯人謂犀
爲黑暗、犀爲黑暗。抱朴子に、通天犀角有白理如綆、(冕の上を覆ふ板)自本徹末、以置米中、羣雞欲往啄米、至輒驚卻、
故南人名曰駭鷄犀也。【六】黃連。本草に、南中有蜜、色黃、味苦、蜂銜黃連花一作之。【七】不應向長沙。東坡の自注に、
喬受知於吳丞相、而施州風土大類長沙。漢、賈誼傳に、河南守吳公聞其秀才、召置門下、文帝初立、聞吳公治平爲天下第一、
徵爲廷尉、廷尉乃言、誼年少頗通諸家之書、上召以爲博士、議以任公卿之位、終灌之屬、盡害之、以誼爲長沙王太傅。

【題義】此詩も熙寧九年九月の作。喬紱が移つて施州に知たるを送つた詩である。

【詩意】昔、蘇秦は、吾に洛陽負郭の田二頃もあらば、豈よく六國の相印を佩びんやと言つたが、君にも亦都近くに肥えた田地二百畝の無いのが残念である。田地がなくて、空しく載せて行く書五車がある。それで宦遊するのである。喬禹功は欽州に知となつて居たのを、移つて施州に知となつた。赴任の途中、江上の青山は、絶壁に横はつて居り、雲間の細路は、飛蛇を躡むがやうである。胡人は犀を黑暗といふ。犀角を米中に置くと、羣雞は知らずに、往いて米を啄まうとする、忽ち黑暗中に驚いて號ぶのである。雞が黑暗中に號んで、蠻貨交易の事が始まる。又、南方の宜州には、黃連花が多い。蜂は黃連花を鬧して蜜花を採る。南中に苦蜜の多いのは、蜂が黃連花を採つて之を爲るからである。共に怪しむことであるが、河南門下の士(喬禹功を指す)は、萬里の長沙に向つてはならない。(施州の風土は、大に長沙に似て居るからである。一體、喬君は吳丞相に知遇を受けて居る。其の吳丞相は、

東都事略に、吳育、字春卿、仁宗朝拜相、後以資政殿學士知河南、卒諡正肅とある。查初白いふ、公詩用事親切如此と。

雪夜獨宿柏仙菴

雪夜獨り柏仙菴に宿す

晚雨纖纖變玉霏

晚雨纖纖として玉霏に變じ、

小菴高臥有餘清

小菴高臥餘清あり。

夢驚忽有穿窗片

夢驚いて忽ち窗を穿つの片あり、

夜靜惟聞瀉竹聲

夜靜にして惟聞く竹に瀉ぐの聲。

稍壓冬溫聊得健

稍く冬溫を壓して聊か健を得、

未濡秋旱若爲耕

未だ秋旱を濡さず若爲ぞ耕さん。

天公用意眞難會

天公の意を用ふるは眞に會し難し、

又作春風爛漫晴

又春風爛漫の晴るるを作す。

【字解】【一】晚雨。韓退之の詩に、廉纖晚雨不能晴。【二】纖纖。尖銳の貌。古詩に、兩頭纖纖月初生。

【三】玉霏。韓詩外傳に、雪花曰霏。

【四】高臥。宋書、袁粲門無雜客、閑居高臥。【五】穿窗。謝惠連の雪賦に、始緣雲而冒棟、終開廉而入隙。

【六】瀉竹聲。杜荀鶴の雪詩に、江湖不見飛禽影、崑谷惟聞折竹聲。

【七】春風爛漫晴。李太白の答丁十一詩に、待得明朝酒醒罷、與君爛漫尋春暉。

【題義】此詩は熙寧九年十一月の作である。紀昀いふ、絶勝尖又韻詩、而人多稱其彼故險韻爲欺人之

巧策と。

【詩意】雪の夜、一人で柏仙菴に宿すると、晩雨は織織として雪花と變じた。雪花は霰で、雨が少し凍つて、雪となりかけたものである。埤雅に雪寒甚則爲粒(霰)、淺則成華、華謂之霰とある。其の霰と降り、霰と散るのを、小菴に高臥して見るのも、まことに餘情がある。清夢は忽ち窓を打つ雪片に驚かされる。雪の夜は、靜である。ただ時時竹に瀉ぐの聲あるのみ。だんだん冬温を壓しつけて、健かになつたが、まだ秋早を濡さないから、どうして耕されようぞ。造化の意は眞に測り難い。さまざまに心を惱まして、又、春風爛漫の晴るるをなして居る。

和孔郎中荆林馬上見寄

孔郎中が荆林馬上寄せらるるに和す

秋禾不滿眼。宿麥種亦稀。秋禾は眼に満たず、宿麥の種も亦稀なり。
永愧此邦人。芒刺在膚肌。永く愧づ此邦の人、芒刺膚肌に在り。
平生五千卷。一字不救饑。平生五千卷、一字饑を救はず。
方將怨無襦。忽復歌緇衣。方將襦なきを怨み、忽ち復緇衣を歌ふ。
堂堂孔北海。直氣凜羣兒。堂堂孔北海、直氣羣兒に凜たり。
朱輪未及郊。清風已先馳。朱輪未だ郊に及ばず、清風已に先づ馳す。

何以累君子。十萬貧與羸。何を以て君子を累はさん、十萬貧と羸と。
滔滔滿四方。我行竟安之。滔滔四方に滿ち、我が行は竟に安くに之く。
何時劍關路。春山聞子規。何れの時か劍關の路、春山子規を聞かん。

【字解】一 孔郎中 東都事略に、孔宗翰、字周翰、孔子四十五代孫道輔之子、以父任爲將作監主簿、復舉進士、王珪司馬光、奉敕薦士、皆以宗翰應詔。知蘄密陝揚洪兗六州、元祐初、除司農少卿刑部侍郎卒。二 不滿眼 杜子美の入奏行に、爲君酷酒滿眼酷、與奴白飯馬青糞。竹の筒を以て酒を酷ふ。筒の上に、提げ繩を穿ち通す穴がある。其の筒に滿て繩際まで酒の及ぶを滿眼酷といふ。三 宿麥 後漢書に、詔有云、宿麥不下。麥は隔年秋に種る、明年の夏に至つて收む。宿麥といふ所以である。漢書、食貨志に、董仲舒曰、願詔大司農、使關中民益種宿麥。四 芒刺在膚肌 漢書、霍光傳に、宣帝始立、詔見高廟光從驂乘、上內殿憚之、若有芒刺在背。五 五千卷 北史、崔儼傳に、大署其戶曰、不讀五千卷書者、無得入此室。三國遺錄に、魏文帝云、文爲當代所宗、讀書五千卷、許登閣觀書、登者才六人。六 一字不救饑 李太白の詩に、萬言不直一杯水、又豈可救飢乎。七 方將怨無襦 東坡の詩に、君家驪駒三將相、富貴未已今方將。後漢、廉范傳に、遷蜀郡太守、百姓歌之曰、廉叔度來何暮、平生無襦今五袴。八 緇衣 禮記に、孔子曰、好賢如緇衣。毛詩、緇衣小序融傳に、字文學、魯國人、孔子二十世孫、爲北海相、爲賊管亥所圍、遺東萊太史慈求救於平原相劉備、備遣曰、孔北海、乃復知天下有劉備耶。九 羣兒 韓退之の詩に、不知羣兒愚、那用故誇傷。後漢、爾衡傳に、嘗稱曰、大兒孔文學、小兒楊德祖、餘子碌碌不足數也。前にも出づ。一〇 朱輪 漢、景帝紀に、令長史二千石朱兩轡。後漢、輿服志に、中二千石二千石、皆卓蓋朱兩轡、其千石六百石朱左轡。轡は車のおほひ。塵泥を防ぐもの。漢の制、高貴の人は、馬車の輪を赤くし、轂を華に飾る。漢書、劉向傳に、王氏一姓、乘朱輪華轂者三十三人。一一 十萬貧與羸 唐書、陳子昂傳に、一州得三才刺史、十萬戶受其福、得古今體詩 和孔郎中荆林馬上見寄 五一七

不才刺史、十萬戶受其困。【三】劍關路、九域志に、劍門關、隸三利州路。

【題義】此詩も熙寧九年十一月の作である。孔周翰が東坡と密州の交代をなし、未だ至らない前に、詩を寄せて之に先んじたのである。之を和したのが此詩である。

【詩意】密州の地方では、秋の禾がまだ眼に滿つるほどには秀でて居ない。杜子美の詩に、爲君酤酒滿眼酤といふ句がある。蜀の人は酒を酤うに竹筒を以てする。筒の上に、繩を穿つ爲めの眼がある。其の眼の際まで酒の及ぶのを滿眼酤といふ。この滿眼の字面は、ここから出たのである。又、去年播いた麥の種もまた生長が稀である。さて永く愧かしく思ふのは、此邦の人が、日常の生活を安んずることが出来なくて、草木のとげが、膚肌に在るやうなことである。昔、崔儵は、大に其の戸に署して、五千卷の書を讀まざるものは、此室に入るを得ないと言つたが、平生五千卷を讀破しても、一字の饑を救ふことも出来ないとなつては情ない。後漢の廉范は蜀郡の太守に遷つた時、百姓は歌つていふ、廉叔度來る何ぞ暮暮、平生襦なく今は五袴（袴と同じ、脛衣）と言つた。方將に襦なきを怨むも、忽ち復、緇衣の宜しきを歌ふのである。堂堂たる北海の相、孔宗翰、其の直氣は羣兒に凜たるものがある。君の朱輪華轂は、未だ郊に及ばないが、其の清風は已に先づ馳せて居る。ここに何を以て君子を累はさん、即ち十萬戶の貧と贏とを救ふことである。一州才刺史を得れば、十萬戶が其の福を受けらる。不才刺史を得れば、十萬戶が其の困を受けるといふことを聞いて居る。（王文誥いふ、君子二字下得得二扼要、不三但能添三宗翰聲價、且、通首神韻、皆此句領起也と。又いふ、自三起句一至三此一節、所

謂舊令尹之政、必以告新令尹者云云と。）さて滔滔として四方に滿ちて、我が行は竟に安くに之のである。（王文誥いふ、二句、別有寄託、自此入レ結、灑落之甚と）何れの時か、劍關の路に出でて、春山、子規の啼くを聞くべきことぞ。

【餘録】王文誥いふ、宗翰之父道輔、乃與范仲淹、諫廢后事、爲呂夷簡驅逐者也。但東都事略云、孔道輔、孔子四十五世孫。宋史、道輔爲孔子四十五代孫、溫公集、宗翰爲孔子四十七代孫、邵注謂、宗翰孔子五十世侯、轆轤難辨云云と。

別東武流杯 東武流杯に別る

莫笑官居如傳舍。笑ふこと莫れ官居は傳舍の如しと、
故應人世等浮雲。故に應に人世をして浮雲に等しからし
百年父老知誰在。百年の父老知る誰か知る、
惟有雙松識使君。惟雙松の使君を識るあるのみ。

壁記に、對三樹二松、日吟哦其間。使君は、漢の世、太守を府君といひ、刺史を使君といふ。前に屢々出づ。

【題義】此詩は熙寧九年十二月の作である。十二月上旬に、孔宗翰が來つて代つたので、東坡は密

古今體詩 別東武流杯

【字解】一、東武流杯 名勝志

に、諸城縣有柳林河、出三石門山、流

徑三縣西北入於扶洪、密人爲三上巳

祓除之所。二、傳舍 史記、酈食

其傳に、沛公至高陽傳舍。三、

雙松識使君 韓退之の藍田縣丞廳

州の任を罷め、東武流杯に留別を作したのである。

【詩意】官居は傳舎の如く、去るもの、來るもの、轉轉相傳へて常の主がない。此の浮草の如き生活を笑つてはならない。もと人世は浮雲に等しかるべし。試みに見よ、百年の後、今日の父老、誰か存る。ただ雙松の使君を識るのみである。

留別零泉

零泉に留別す

舉酒屬零泉。白髮日夜新。酒を舉げて零泉に屬す、白髮日夜に新なり。

何時泉中天。復照泉上人。何れの時か泉中の天、復照らす泉上の人。

二年飲泉水。魚鳥亦相親。二年泉水を飲み、魚鳥亦相親しむ。

還將弄泉水。遮日向西秦。還泉を弄するの手を將て、日を遮りて西秦に向ふ。

【字解】【一】零泉 東坡、零泉記に、常山西南有泉、乃琢石爲井、作亭其上、而名之曰零泉、古者謂呼嗟而求雨曰零。

零は請雨祭。春秋繁露に、大旱、零祭而請雨。【二】舉酒屬 韓退之の詩に、一杯相屬君當歌。【三】白髮新 王維の送三郎

爲一詩に、爲客黃金盡、還家白髮新。【四】魚鳥相親 世説に、晉、簡文入華林園、顧謂左右曰、會心處、不必在遠、翳然林

水、便自有濠濮間想也、覺鳥獸禽魚、自來親人。【五】遮日向西秦 杜牧之の途中絶句に、惆悵江湖釣竿手、卻遮西日向長安。

【題義】此詩も前詩と同じく、十二月月上旬、密州の任を罷めた際、零泉に留別したのである。東坡の零泉詩敘に、廟門之西南十五步有泉、汪洋折旋如車輪、乃琢石爲井、作亭於其上、名之曰零泉とある。

【詩意】別に臨んで、酒を舉げて零泉に屬する。客と爲つて黄金盡き、家に還つて白髮新なりといふ王維の句は、此際、よくよく身にしみる。何れの時か、此の零泉中の天は、復、此の零泉上の人を照らすことぞ。我は二年間も、此の泉水を飲んだので、ここの魚や鳥とも、日に相親しくなつた。此處に閒居すると、鳥獸禽魚が自ら來つて人に親しむのである。杜牧之の詩に、惆悵江湖釣竿の手、卻つて西日を遮つて長安に向ふとあるが、我も亦、泉を弄するの手を將て、日を遮つて、西秦に向はう。(王文誥いふ、謂欲赴河中一也と。)

留別釋迦院牡丹呈趙倅

釋迦院の牡丹に留別し、趙倅に呈す

春風小院初來時。春風小院初めて來る時、

壁間惟見使君詩。壁間惟見る使君の詩。

應問使君何處去。應に問ふべし使君何れの處にか去りしと、

憑花說與春風知。花に憑つて說與すれば春風知る。

【字解】【一】趙倅 趙成伯、杭州に倅たり。【二】初來時 初の字

一に卻に作る。【三】使君 漢の時、

太守の府君、刺史の使君といへるは、

前に注した通りである。【四】說與

増韻に、與、從也、爲相從之辭。劉

冬月負薪雖得免。冬月薪を^お負ふは^{まぬか}免るを得と雖も、

鄰人吹笛不堪聞。鄰人の^{ふえ}笛を吹くは^き聞くに堪へず。

死生契濶君休問。死生^{せいせい}契濶^{くわく}君問ふを^や休めよ、

灑淚西南向白雲。涙を^{なみだ}灑いで^{せいなん}西南^{くわん}向^{むか}白雲。

直隸州となし、四川に屬す。民國、改めて眉山縣となす。【一】安邱太平寰宇記に、安邱縣在密州西北一百二十里、漢舊縣、屬北海郡、大業二年、改三牟山縣爲安邱、復舊名。【二】白髮郎 漢武故事に、顏驕不知何許人、帝至郎署、見驕龐眉皓髮、問、何時爲郎、何其老也、對曰、臣文帝時、爲郎、文帝好文而臣好武、景帝好美而臣貌醜、陛下好少而臣已老、是以三世不遇、上感其言、擢爲會稽都尉、張衡の賦に、尉龐眉而郎潛令、逮三葉而遊武。【三】能文合注に、蓋田縣有石刻、前進士董儲、重修元聖文宣王廟記、亦可爲能文之證、惜其他不傳。【四】雙雞敢忘云云 後漢、橋玄傳に、曹操感其知己、及後經過玄墓、輒懷愴致祭、自爲祭文曰、士死知己、懷此無忘、又承從容、誓約之言、徂沒之後、路有經由、不以斗酒隻雞過相沃醑、車過三步、腹痛勿怨、雖臨時戲笑之言、非至親之篤好、胡肯爲此辭哉。【五】下馬來尋云云 國史補に、董仲舒墳在長安門、入過、皆下馬、故謂之下馬陵、而語訛謂蝦蟇陵。宋の程大昌の雍錄に、下馬陵、在二萬年縣南六里、章述西征記曰、本、董仲舒墓。【六】冬月負薪 史記、滑稽傳に、楚相孫叔敖死、其子窮困負薪。文選、謝靈運の詩に、已免負薪苦、乃遊椒闈室。【七】鄰人吹笛云云 向秀は思舊賦の序を作つていふ、余少與魯康・呂安、居止接近、其人並有不羈之才、其後、各以事見法、逝將西邁、經其舊廬、于時日薄虞淵、日の入る處寒冰淒然、鄰人有吹笛者、發聲寥亮、追思曩昔遊宴之好、感音而歎、故作賦云。【八】死生契濶 詩、邶風、擊鼓に、死生契濶、與子成說。【九】向白雲 唐書に、狄仁傑赴并州、其親在河陽、過太行山、反顧見白雲孤飛、謂左右曰、吾親舍其下。杜子美が懷舊の詩に、老罷知明鏡、悲來望白雲。

【題義】此詩も前詩と同じく十二月上旬の作である。安邱縣を過ぎて、董儲の故居を訪ね、其の子

希甫を見て、屋壁に留題したのである。紀昀いふ、殊有二情思、語亦清穩と。又いふ。補出與先人遊意上好と。

【詩意】漢の顏驕は、三代も不遇であつた。文帝は文を好んで、驕は武を好む。景帝は美を好んで、驕は容貌が醜かつた。武帝は若い人を好み、驕は既に老人となつた。龐眉皓髮、郎署に在つたので、武帝は之を憐み、拔擢して會稽都尉となした。董儲郎中にも、この白髮の郎は潜む舊使君の言葉が適用される。併し、今に至るまで人は道ふ、最も文を能くすと、顏驕は武の人で、文を好まなかつた。魏の曹操は、橋玄の知己に感じ、玄の墓を過ぎた時、斗酒隻雞を以て弔祭を致した。又、董仲舒の墓は、長安に在る。武帝が宜春苑に幸し、此に至る毎に、馬を下つたので、時に之を下馬陵といふ。歳久しく諱つて蝦蟇陵となつたといふことである。楚の相孫叔敖の子や、任昉の子が薪を負ふの窮困は、免れることが出来たが、鄰人の吹笛を聞くと、曩昔遊宴の好を追思して感傷に堪へない。死生は契濶、君之を問ふことを休めよ、我は涙を灑いで西南に白雲の孤飛するを望むのである。

蘇東坡詩集 卷十五

古今體詩 六十四首

除夜大雪留濰州。元日早晴。遂行。中途雪復作

除夜大雪、濰州に留る、元日早晴、遂に行く、中途にして雪復作る

除夜雪相留。元日晴相送。

除夜雪ふりて相留り、元日晴れて相送る。

東風吹宿酒。瘦馬兀殘夢。

東風宿酒を吹き、瘦馬殘夢兀たり。

葱曠曉光開。旋轉餘花弄。

葱曠曉光開き、旋轉餘花弄す。

下馬成野酌。佳哉誰與共。

馬を下りて野酌を成す、佳なるかな誰と與にか共にせん。

須臾晚雲合。亂灑無缺空。

須臾に晚雲合し、亂灑缺空なし。

鵝毛垂馬駿。自怪騎白鳳。

鵝毛馬駿に垂れ、自ら怪む白鳳に騎るを。

三年東方旱。逃戶連敲棟。

三年東方旱して、逃戶敲棟を連ぬ。

老農釋耒歎。淚入饑腸痛。

老農耒を釋てて歎じ、淚は饑腸に入つて痛む。

古今體詩 除夜大雪留濰州元日早晴遂行中途雪復作

春雪雖云晚。春麥猶可種。春雪は云に晩ると雖も、春麥猶ほ種うべし。
敢怨行役勞。助爾歌飯糲。敢て怨む行役の勞、爾を助けて飯糲を歌ふ。

【字解】

【一】 濰州 濰水は琅邪箕屋山に出づ。太平寰宇記に、青州北海縣、隋置濰州、宋建隆五年建爲北海軍、西至東京一千三百二十里、東南至密州界七十五里。曾鞏の隆平集にいふ、乾德三年、以北海軍爲濰州。【二】 宿酒 趙合時の詞に、宿酒醒遲、懶破春情緒。宿醉・宿醒といふに同じ。【三】 瘦馬兀殘夢 杜子美の瘦馬行に、東郊瘦馬使我傷。劉駕の早行詩に、馬上兀殘夢、馬嘶時復驚。【四】 葱曠 曠は日出の貌。東坡の歸田園詩序に、晚日葱曠、竹陰蕭然。又、東坡の詩に、江郊葱曠、雲水蘄絢。【五】 旋轉 旋回といふに同じ。北史に、雲表見一大鳥射之、正中其額、狀如車輪、旋轉而下、乃鳴也。【六】 餘花弄 文選、謝朓の詩に、鳥散餘花落。【七】 須臾 少頃、中庸に、道也者、不可須臾離也。【八】 鵝毛 白樂天が春雪の詩に、大似落鵝毛、密如飄玉屑。又、房家夜宴詩に、門前雪片似鵝毛。【九】 騎白鳳 曹唐、遊仙の詩に、玉詔新除沈侍郎、便分茅土領東方、不知今夜遊三何處、待從皆騎白鳳皇。晏元獻が雪詩に、閒思北海銀宮畔、誰駕丹山白鳳遊。【一〇】 三年東方早 漢、于定國傳に、東海殺孝婦、郡中枯旱三年。【一一】 逃戶 唐書、食貨志に、括籍外、羨田、逃戶自占者云云。【一二】 敲棟 盧綸の詩に、敲棟止羣雞。【一三】 歌飯糲 隋書、五行志に、童謠曰、七月刈禾傷早、九月喫糕正好、十月洗蕩飯糲云云。農諺、窮漢備飯糲。

【題義】 此詩は熙寧十年正月元日（東坡の四十二歳の時）の作である。除夜、大雪の爲に濰州に止まつたが、元日早晴、濰州を出發し、途中で、雪が復、降つたので、此詩を作つたのである。紀昀いふ、驚毛字、本俚語、得下五字、便成奇采、於此悟點化之妙と。又いふ、收處波瀾壯闊、立言亦極得體と。

【詩意】 除夜に雪が降つたので、已むなく濰州に逗留したが、一夜明け、元日は早く晴れたから、出發した。春風は二日酔の此身を吹き、瘦せた馬の上に殘夢兀兀（酒徳頤に、兀然而醉とある）として騎つて居る。馬は嘶いて、時に復、驚く。東天が微白となつて、曙光が開けたので、旋り回つて餘花を弄する。途上の風光は、我を勒住せしめるものがある。そこで馬を下つて野酌をする。陶然として佳いかな、誰と與にか、此の行樂を共にしよう。暫くして晚雲が相合し、忽ちにして亂れ灑いで、大空一面に擴がつた。雪が復、降り來つたのである。白樂天の所謂大さは鵝毛を落すに似、密なること玉屑を飄すがやうである。かくて鵝毛は馬の駿に垂れ、自ら怪しむ、我は是れ白鳳凰に騎つて居るのではないかと。首を回せば、三年、東の地方が早して、逃亡の家が多く、街上には敲いた棟を連ねて居る。老農は耒を釋つて歎息し、涙は飢腸に入つて痛む。春の雪はここに晩れても、春の麥を種ゑねばならないから、少しも暇がない。敢てお上から命せられる行役の勞を怨むのである。爾を助けて飯糲の童謠でも歌はうか。

大雪青州道上。有懷東武園亭。寄交代孔周翰

大雪青州道上、東武園亭を懷ふあり、交代の孔周翰に寄す

超然臺上雪。

超然臺上の雪、

城郭山川兩奇絕。

城郭山川兩ながら奇絶。

【字解】 一 青州 元和郡縣志

に、青州北海郡、齊營邱、漢爲臨淄、唐、武德二年、改青州、置總管府、東

古今體詩 大雪青州道上。有懷東武園亭。寄交代孔周翰

海風吹碎碧琉璃。

海風吹き碎く碧琉璃、

時見三山白銀闕。

時に見る三山の白銀闕。

蓋公堂前雪。

蓋公堂前の雪、

綠窗朱戶相明滅。

綠窓朱戶相明滅す。

堂中美人雪爭妍。

堂中の美人雪と妍を争ひ、

粲然一笑玉齒頰。

粲然として一笑す玉齒頰。

就中山堂雪更奇。

中就いて山堂雪更に奇なり、

青松怪石亂瓊絲。

青松怪石瓊絲を亂る。

惟有使君游不歸。

惟使君の游んで歸らざるあり、

五更馬上愁斂眉。

五更馬上愁へて眉を斂む。

君不見淮西李侍

君見ずや淮西の李侍中、

中。

夜入蔡州縛取吳

夜蔡州に入つて吳元濟を縛取せしを。

元濟。

至密州三百三十里。【三】交代

後漢書に、傅燮爲漢陽太守、初范津

舉燮孝廉、及津爲漢陽、合符而

去。困學紀聞にいふ、交代字、出

漢書蓋寬饒傳一。【三】超然臺

使園の北に在る。東坡の記に、園之

北、因城以爲臺者舊矣、稍葺而新

之云云。【四】碧琉璃 杜子美の詩

に、天地黜慘忽異色、波濤萬頃堆琉

璃。【五】三山白銀闕 史記、封禪

書に、三神山、其物禽獸盡白、金銀

爲宮闕。【六】蓋公堂 本集、蓋公

堂の記に、曹參爲齊相、避正堂、

以舍蓋公、吾爲膠西守、知三公之爲

邦人也、治新寢於黃堂之北、名之

曰蓋公堂。【七】粲然 笑ふ貌。穀

梁傳、昭公四年に、軍人粲然皆笑。

【八】玉齒頰 戴叔倫の詩に、玉頰曉

紅夢初醒。【九】山堂 本集、山堂

銘敘に、熙寧九年六月大雨、野人來

又不見襄陽孟浩

又見ずや襄陽の孟浩然、

然。

長安道上騎驢吟

長安道上驢に騎つて雪の詩を吟せしを。

雪詩。

何當閉門飲美酒。

何か當に戸を閉ちて美酒を飲み、

無人毀譽河東守。

人の河東の守を毀譽する無かるべき。

生分羨美。【三】五更 五夜に同じ。一夜を五分し、甲夜(午後八時)、乙夜(午後十時)、丙夜(夜半十二時)、丁夜(午前二時)、戊夜(午前四時)とする。夜番のものが、甲乙順番に更代するより五更といふ。杜子美の詩に、五更漏聲催曉箭。【四】斂眉 庾信の詩に、看花定斂眉。【五】李侍中、入蔡州云云 李愬、吳元濟を討ち、雪夜、蔡州に入り、黎明、元濟を禽にす。舊唐書に、李愬以散騎常侍充唐節度使、襲蔡州、至懸瓠城、夜半、雪愈甚、賊寔然、無一人知者、遂入蔡州、禽元濟、檻送京師。【六】騎驢吟 孟浩然が途中雪詩に、迢遞秦京道、蒼茫歲暮天、窮陰連晦朔、積雪滿山川、落雁迷沙渚、飢鳥噪野田、客愁空佇立、不見有人煙。又、長安道中の雪詩に、積雪及平皋、飢鷹捉寒兔。王注に、或問鄭祭詩思、對曰、詩思在灞橋雪中驢背上。【七】毀譽河東守 史記に、季布爲河東守、孝文時、人有言其賢、召欲以爲御史大夫、復有言其勇使酒難近、至、留邸一月見罷、布進曰、陛下以一人譽召臣、以一人毀去臣、臣恐天下有識者、聞之、有以窺陛下也。

【題義】此詩も熙寧十年正月の作である。青州の道上で大雪に遭ひ、東武の園亭を懐うて、交代の孔宗翰に寄せた詩である。王文誥いふ、君不見以下六句、皆公自謂也と。

古今體詩 大雪青州道上有懷東武園亭寄交代孔周翰

【詩意】 超然臺上から見た雪の景色をいふと、城郭も、山川も、雨ながら奇絶の二字に盡きて居る。海風が吹き来ると、忽ち波濤萬里の碧琉璃を碎いて、時に蓬萊・方丈・瀛洲の三神山を見る。三神山は黄金・白銀を宮闕とし、之を望むに雲の如く、三山に到るに及び、之に臨めば、風輒ち引き去るといふことである。さて、蓋公堂の由来をいふと、昔、曹參が齊の相となり、正堂を避けて、蓋公を舍した。東坡が膠西の太守となつた時、蓋公の此の邦の人であることを知つて、此堂を造つたのである。蓋公堂前の雪は白く、堂の綠窓朱戸と相明滅する。又、堂中の美人は、雪と其の美しさを相争ひ、然として一笑し、紅頬は玉齒を見はす。又、東武城中山堂の雪は、更に奇である。かの青州から貢する鉛・松怪石の形をなして居る。又、雪の絮、瓊の絲を亂したやうである。ただ使君は遊んで歸らないので、五夜、馬上に愁へて、眉を斂める。君見ずや、淮西の李侍中(李愬)を。吳元濟を討ち、雪夜に蔡州の城に入り、黎明に元濟を禽にした。又、見ずや、襄陽の孟浩然を。長安の道上、驢馬に騎つて雪の詩を吟じつつ行く。何れの時か、雪中戸を閉ぢて美酒を飲み、人が河東の守を毀つたり、譽めたりすることのないやうにしたい。(昔、季布が河東の守となつたとき、其の賢を言ふものがあつた。文帝は召して御史大夫となさんとした。復、其の勇にして酒を使ひ、近づけ難きを言ふものがあつたので、至れば邸に留めた。布は進んでいふやう、陛下は一人の譽めるを以て臣を召し、一人の毀るを以て臣を去ると言つたさうである。此故事に據つたものである。合注に、河東守、當指自、言將赴河中とある。)

至濟南李公擇以詩相迎次其韻二首

濟南に至る、李公擇詩を以て相迎ふ、其の韻に次す 二首

傲裘羸馬古河濱、
野闊天低糝玉塵。
自笑餐氈典屬國、
來看換酒謫仙人。
宦遊到處身如寄、
農事何時手自親。
剩作新詩與君和、
莫因風雨廢鳴晨。

【字解】 一 濟南 漢の濟南國は、元魏の時、齊州と改め、天寶中、濟南郡と改む。 二 李公擇 行狀に、神宗初、爲右正言、力詆新法、落職、通判滑州、歲餘復職、知鄂州、徙知齊州。東坡の密州を離れしは、正に公擇の齊州に知たりし時であつた。 三 傲裘羸馬 岑參の詩に、白髮悲明鏡、青春換傲裘。羸は瘦せる意。韓退之の詩に、日西入軍門、

塵。秦韜玉、春雪の詩に、雲重寒空思寂寥、玉塵如糝滿春潮。 四 餐氈典屬國 漢の蘇武、字は子卿、杜陵の人。天漢の初、匈奴に使して、拘留せらる。雪を嚼み、氈を餐ひ、節に依りて、羝を牧す。居ること十九年、還るを得て、典屬國に拜せらる。 五 換酒謫仙人 紀昀いふ、金龜換酒、是賀監(賀知章は祕書監である)非李白と。五代、王定保の摭言に、賀知章、一見李白、呼爲謫仙人、因解金龜換酒爲樂。金龜は、唐の初、品官は皆、魚を佩ひ、以て召命の詐を防ぐ。天授二年、佩魚を改めて皆、龜となす。 六 鳴晨 詩、國風、風雨如晦、雞鳴不已。杜子美の崔樹雞樹詩に、不味風雨晨、亂離減憂感。

古今體詩 至濟南李公擇以詩相迎次其韻二首

【題義】此詩も熙寧十年正月の作。東坡が濟南に赴かんとする時、李常(公擇)は詩を以て相迎へたので、其の韻に次したのが此の二首である。施注に、公擇知湖州、東坡以三杭倅一來會、今自高密、

官滿過濟南、而公擇復爲守在焉と見ゆ。紀昀いふ、五句、語太率易、結亦清薄と。

【詩意】敝れた裘を著け、瘦せた馬に騎つて古河の濱を行く。天、雪意を催はして、野が闊くなる。

野が闊くなると、天は低いやうに感ずる。(孟浩然も、野曠うして天、樹に低ると言つた。)野闊く天低

れ、玉の塵は、米粒のやうに撒かれる。雪の飛び散るのである。さて、降る雪につけて憶ひ起すのは

蘇武の事である。蘇武は匈奴に使用して拘留され、人なき北海の地に移さる。彼は雪に和して、氈毛を

食ひ、漢節を持して失はなかつた。匈奴に在る十九年、本國に還ることを得て、典屬國に拜せられた。

敝裘瘦馬の我は、北海、人無き地に羝を牧する蘇武を思うて、自ら笑ふのである。又、賀知章は、一

たび李白を見て、謫仙人と呼び、因つて品官として身に佩びて居る金龜を解いて、酒に換へ、樂をな

したといふことである。今、來つて賀知章や、李太白に比すべき詩人の李公擇を見るのである。宦遊

は浮草の如く、到る處、寄寓の思をする。何れの時か、故山に歸つて、自ら農事をなしたいものであ

る。そして、又、新詩を作つて、君と和したいものである。詩經に、風雨如晦、雞鳴不已とあるが、

風雨の爲に、晨を告げることを廢めてはならない。

夜擁笙歌雪水濱

夜笙歌を擁す雪水の濱

【字解】

笙歌、笙は竹製の

回頭樂事總成塵

頭を回せば樂事總て塵と成る。

今年送汝作太守

今年汝が太守と作るを送り、

到處逢君是主人

到處君に逢ふ是れ主人。

聚散細思都是夢

聚散細思すれば都是れ夢、

身名漸覺兩非親

身名漸く覺ゆ兩ながら親にあらざるを。

相從繼燭何須問

相從つて燭を繼ぐ何ぞ問ふを須むん、

蝙蝠飛時日正晨

蝙蝠飛ぶ時日は正に晨なり。

椰瑜、云只見汝送三人作郡、不見人送汝作郡、温笑以爲襄陽太守。【五】聚散、杜子美、別蔡著作詩に、憶念鳳翔都、聚散俄十春。【六】身名漸覺兩非親、老子に、名與身孰親。【七】繼燭、云云、左傳、莊公二十二年に、陳公子完奔齊、齊侯使爲工正、工正は百工を掌る官、飲酒、樂、公曰、以火繼之、辭曰、臣卜其晝、未卜其夜。【八】蝙蝠飛時、韓退之の詩に、黃昏到寺蝙蝠飛。

【詩意】一夜、我は笙歌を擁して吳興雪水の濱に在る。我は昔、張子野・劉孝叔・李公擇・陳令舉・楊元素等と吳興に會合したことがある。其時、張子野は、六客の詞を作つたが、頭を回せば、風流樂事すべて塵となる。今年、汝が太守となつて行くのを送る。昔、羅友は家が貧しかつた爲に、祿を桓温に乞うていへるやう、私は昨日、一鬼に逢うた。鬼はいふ、只、汝の人が郡の太守となつて行くを送るを見、人の汝が郡の太守となつて行くを送るを見ないと。桓温は笑つて羅友をば襄陽の太守としたと

古今體詩 至濟南李公擇以詩相迎次其韻二首

いふ話がある。此の故事に據つたのである。汝が太守となるを送つて、到る處、相逢へば、是れ主人と同じである。暫時相逢ひ、又、相別る。人間の聚散も、細思すれば、すべて是れ夢である。老子はいふ、名と身と孰れか親しきと、我は身と名と兩ながら親しきものでないと思ふ。陳の公子完、齊に奔る。齊侯は工正といふ百工を掌る官となした。公子完は、公に酒を飲ましむ。公は樂んで、火を以て之を繼がんと。公子完は辭していふ、臣は其の晝を卜して、未だ其の夜を卜しないと。相會して相話するのに、燭を繼ぐなど、固より問ふ必要もない。なせといふに、蝙蝠飛ぶ黄昏の時と思ふ間もなく、日は正に晨である。

和孔君亮郎中見贈

孔君亮郎中贈らるるに和す

偶對先生盡一樽。偶先生に對して一樽を盡す、
 醉看萬物洶崩奔。醉うて看る萬物の洶として崩奔するを。
 優游共我聊卒歲。優游我と共に聊か歳を卒ふ、
 骯髒如君合倚門。骯髒君の如く合に門に倚るべし。
 只恐掉頭難久住。只恐る頭を掉うて久しく住し難きを、

【字解】 一 孔君亮 闕里志に孔舜亮、字君亮、道輔長子、嘉祐四年、進士、位至左中散大夫、致仕、累三特進少師。二 偶對 偶は思ひ設けない意。字彙に、合也對也。韻會に、不期也。不期而合の義である。三 洶崩奔 洶はさわぎ立

應須傾蓋便深論。

應に須く蓋を傾けて便ち深く論すべし。

固知嚴勝風流在。

固より知る嚴勝の風流在るを、

又見長身十世孫。

又見る長身十世の孫。

つ意。文選、謝靈運の入彭蠡詩に、拆岸屢崩奔。四 優游、卒歲

たかぶる貌。後漢、趙壹の詩に、文籍雖滿腹、不如一囊錢、伊優北堂上、骯髒倚門邊。六 掉頭難久住 杜子美の送孔巢父詩に、巢父掉頭不肯住、東將入海隨煙霧。七 應須 東坡の詩に、簾前春色應須惜。八 傾蓋 馬車の蓋を傾け、兩車を接近せしめて相語る。孔子家語、致思篇に、孔子之鄉、遭程子於塗、傾蓋而語、終日甚親。又、鄒陽の獄中上三梁王書に、諺曰、有白頭如新、傾蓋如故。九 嚴勝 東坡の自注に、戮、字君嚴、弟載、字君勝、退之志其墓云、孔世卅八、吾見其孫、白而長身、今君亮四十八世矣。

【題義】 孔君亮郎中贈られた詩に和韻したのである。欒城集に、孔君亮郎中、新葺闕里西園、棄官而歸、七律一首、亦宣聖後裔也とある。

【詩意】 思ひ設けず先生と相對して一樽を傾け盡した。醉うて萬物の洶洶としてさわがしく崩れ奔れるさまを見る。身を忙はしくしても、心は閒になくはならない。世態の洶涌を外に、我は優游以て歳を卒ふるのである。高亢埒直（剛直にしてもとることをいふ）君はまさに門邊に倚つて、一世を睥睨するであらう。ただ恐れるのは、杜子美の所謂、巢父頭を掉うて肯て住まらず、東の方、將に海に入つて煙霧に隨はうとするのである。まさに須らく車の蓋を傾けて相語る、孔子の程子に於けるが如くなるべきである。程子は、名を本といひ、齊の人で、郟より反り、孔子に塗に遇ひ、蓋を傾け

て與に語つて日を終へたのである。孔君巖・孔君勝・韓退之は其の墓に志して、孔世三十八、吾、其の孫、白うして長身なるを見ると言つたが、今、君亮は四十八世である。

【餘論】 王文誥いふ、孔宗翰、即君亮之弟、公先與宗翰交代至此、又遇其兄君亮、故引戮・截、爲比、有又見長身之句、謂已見宗翰、而又見君亮也、又、自孔世三十八至君亮、已四十八世、故云十世孫、其引用親切如此、斷無有誤其世次者、可見宗翰四十八世、公在密、已具知之、否則并君亮無此詩云云と。

顔樂亭詩

顔樂亭の詩

顔子之故居。所謂陋巷者。有井存焉。而不在顔氏久矣。膠西太守孔君宗翰始得其地。浚治其井。作亭於其上。命之曰顔樂。昔夫子以簞食瓢飲賢顔子。而韓子乃以爲哲人之細事。何哉。蘇子曰。古之觀人也。必於小者觀之。其大者。容有僞焉。人能碎千金之璧。不能無失聲於破釜。能搏猛虎。不能無變色於蜂蠆。孰知簞食瓢飲之爲哲人之大事乎。乃作顔樂亭詩。以遺孔君。正韓子之說。且用以自警云。

【訓讀】 顔子の故居、所謂陋巷なるものに、井の存するあり。而して顔氏にあらざること久し。膠西の太守孔君宗翰、始めて其の地を得、其の井を浚治し、亭を其の上を作り、之を命けて顔樂といふ。昔、夫子は簞食瓢飲を以て顔子を賢とす。而して韓子は乃ち以て哲人の細事となすは何ぞや。蘇子曰く、古の人を觀るや、必ず小なる者に於て之を觀る。其の大なる者は、僞あるべし。人能く千金の璧を碎いて、聲を破釜に失するなき能はず。能く猛虎を搏ちて、色を蜂蠆に變するなき能はず。孰か簞食瓢飲の哲人の大事たるを知らんや。乃ち顔樂亭の詩を作り、以て孔君に遺り、韓子の説を正し、且用ひて以て自ら警むと云ふ。

【字解】 一、顔樂亭 司馬君實に顔樂亭の頌あり、李邦直に顔樂亭の銘あり。二、陋巷 狭くきたない小路。直にして廣い道筋を街といひ、曲つて狭い道筋を巷といふ。論語、雍也篇に、一簞食、一瓢飲、在陋巷。三、膠西 漢の膠西王國、今、山東膠縣、高密等の地。四、孔君宗翰 道輔の子、字は周翰、進士及第、哲宗の時、刑部侍郎に累遷す。五、浚治 井戸をさらふ。孟子、萬章に、使浚井云云。六、簞食瓢飲 簞は竹で編んだ飯を入れる器、食は飯、瓢は匏の小なるもの、飲は水漿。七、哲人之細事 道理に明かなる人に取りては、簞食瓢飲は細事といふ意。韓退之の貞元十年、應博學宏詞科作に、居陋巷以致其誠、飲一瓢以求其志。八、碎千金之璧云云 王文誥いふ、四句、惟見於黠鼠賦及此敘中、其原文已佚去矣と。蜂蠆は、左傳、僖公二十二年に、蟻蠆有毒。

天生烝民爲之鼻口

天生烝民を生じ、之が鼻口を爲る。

美者可嚼。芬者可嗅。美必有惡。芬必有臭。美必不惡。芬必不臭。我無天游。六鑿交鬪。驚而不返。跬步商受。偉哉先師。安此微陋。孟賁股栗。虎豹却走。眇然其身。中亦何有。我求至樂。千載無偶。執瓢從之。忽焉在後。

美なるものは嚼むべく、芬なるものは嗅ぐべし。美必ず悪あり、芬必ず臭あり。我に天游なければ、六鑿交鬪。驚せて返らず、跬歩の商受。偉なる哉先師、此微陋に安んず。孟賁股栗し、虎豹却き走る。眇然たる其身、中に亦何か有る。我至樂を求むるも、千載偶なし。瓢を執りて之に従へば、忽焉として後に在り。

【字解】 一 天生蒸民。詩、大雅蒸民に、天生蒸民、有物有則、民之秉彝、好是懿德。蒸民の蒸はもるもの意。 二 芬。花草の香氣、東坡の詩に、草木變芬菲。 三 天游。莊子、外物篇に、心有天游、室無空虛、則婦姑勃瑣、心無天游、則六鑿相攘。勃瑣は、争鬪するをいふ。 四 六鑿。耳目鼻口心知之六根をいふ。 五 跬步。半歩、禮、祭義に、故君子跬步而不忘。 六 商受。荀子に、不積跬步、無以至千里。注にいふ、跬與跬同。 七 先師。顔子をいふ。 八 微陋。東坡の詩に、孤光照微陋、眇如三月在盆。 九 孟賁。古の勇士、能く生牛の角を抜く。 一〇 股栗。戰慄の意。史記、齊、悼惠王世家に、股戰而栗、恐不能言。酷吏傳に、族滅閻氏首惡、

餘皆股栗。 一 眇然。漢書、文帝紀に、以微眇之身。王褒、聖主得賢臣頌、眇然絕俗離世哉。 二 至樂。莊子、至樂篇に、天下有至樂、無有哉云云。 三 無偶。魏志、管寧傳に、德行卓絕、海內無偶。 四 忽焉在後。論語、子罕篇に、瞻之在前、忽焉在後。

【題義】 此詩は熙寧十年十月の作である。王文誥いふ、顔樂亭詩跋、乃孔周翰作於密州一者也。紀昀は此詩を語自脫洒と評して居る。

【詩意】 天が此の蒸民を生ずる、先づ之が鼻や口を爲る。物あれば則ありて、美しいものは嚼むべく、香ひのよいものは嗅ぐべきである。そして美には必ず悪があり、芬には必ず臭がある。従つて心に天游あるを要する。(心に天游ありとは、小中に大あるの謂である。)若しも我に心の天游がなければ、耳目鼻口心知之六根は、交鬪するのである。彼此相争へば、各守執する所があつて、ただ驚するのみで返らない。跬歩の紂王といふ意は論語の紂の不善の章を用ひたのであらう。即ち紂王の不善は、是の如く甚しくはなかつた。是を以て君子は下流に居るを惡むといふ意を取つたのであらう。偉大なるかな、先師顔子、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在つて、微陋に安んじて、其の樂みをば改めない。古の勇士孟賁も、之に逢へば戰慄する。虎や豹の猛獸も、之を見れば却き走る。顔子が眇然たる其身の中に、亦何かある。偉大なるかな先師顔子。翻つて此身を顧るに、我は自然の神を存する至樂の地を求めも、千載遂に偶がない。試みに顔子の瓢を執つて之に従はんとすれば、之を瞻る前に在り、忽焉として後に在る。恍惚として終に従ふべき路がない。

送范景仁游洛中

范景仁の洛中に遊ぶを送る

小人眞闇事。閒退豈公難。

小人は眞に事に闇し、閒退する豈公難しとせん。

道大吾何病。言深聽者寒。

道大にして吾何ぞ病へん、言深うして聽くもの寒し。

憂時雖早白。駐世有還丹。

時を憂へて早く白しと雖も、世に駐まる還丹あり。

得酒相逢樂。無心所遇安。

酒を得て相逢うて樂み、無心なれば遇ふ所安し。

去年行萬里。蜀路走千盤。

去年萬里を行き、蜀路走る千盤。

投老身彌健。登山意未闌。

老に投じて身彌健かに、山に登りて意未だ闌ならず。

西游爲櫻筍。東道盡鸚鵡。

西游は櫻筍の爲なり、東道は盡く鸚鵡。

杖屨攜兒去。園亭借客看。

杖屨兒を攜へて去り、園亭客を借りて看る。

折花斑竹寺。弄水石樓灘。

花を折る斑竹寺、水を弄す石樓灘。

鬻馬衰憐白。驚雷怯笑韓。

馬を鬻ぎて衰ふる白を憐み、雷に驚いて怯る韓を笑ふ。

蘇書標洞府。松蓋偃天壇。

蘇書洞府を標し、松蓋天壇に偃す。

試與劉夫子。重尋靖長官。

試みに劉夫子と、重ねて靖長官を尋ねん。

【字解】 范景仁 范鎮字は景仁、進士第一に擧げらる。仁宗の時、諫院に知たり。帝、在位三十五年、未だ繼嗣あらず。景

仁、儲を建てんことを請ふ。面陳懇切、泣下るに至る。帝曰く、朕、卿の忠を知る、當に之を俟つべしと。前後章十九上り、命を待つ百餘日、鬚髮爲に白し。後、翰林學士となる。新法を論じて、王安石と合はず、遂に致任す。哲宗即位し、起して端明殿學士となす、固辭して拜せず。累に蜀郡公に封ぜらる。卒して忠文と諡す。【一】 閒退 宋史、高宗紀に、戊辰、置一路分總管、以處閒退武臣。伽藍記に、李延實曰、臣久乞閑退、陛下消陽興念、寵及老臣。【二】 道大何病 史記、孔子世家に、顏回曰、夫子之道至大、故天下莫能容、雖然夫子推而行之、不容何病、不容然後見君子。【三】 言深 戰國策に、馮忌見趙王曰、服子曰、客交淺而言深、是亂也、客曰、不然、交淺而言深、是忠也。【四】 聽者寒 范景仁、嘗て果疏して、王安石を力諫す。安石大に怒り、其の疏を持して、手頓ふに至る。故にいふ、聽者寒と。【五】 雖早白 東坡の范公墓誌に、上疏請下擇宗室賢者、異其禮物、而試之政事、以繫天下心、凡章十九上、待罪百餘日、須髮爲白。紀昀いふ、去髮字、則白者何物。【六】 還丹 李太白の詩に、待吾還丹成、投迹歸此地。還丹は道家煉丹の循環變化をいふ。眞仙傳に、小還丹、大還丹あり。【七】 無心 道德指歸論に、夫道之爲物、無形無狀、無心無意。【八】 走千盤 盤は旋る意。司馬溫公詩話に、范景仁、年六十三致仕、一朝思鄉里、途徑行入蜀、至成都、日與鄉人樂飲、散財於親舊之貧者、遂游峨眉青城、上下巫峽、出荆門、凡期歲乃還京師。【九】 投老 老年に至る意。後漢書、仇覽傳に、母守寡、養孤、苦身、投老。【一〇】 爲櫻筍 秦中歲時記に、唐有櫻筍廚。白樂天の歌馬吟に、忽憶家園須速去、櫻桃欲熟筍應生。【一一】 東道 左傳、僖公三十年に、舍鄭以爲東道主。【一二】 鸚鵡 文選、徐敬業の詩に、甬道入鸚鵡。劉禹錫、洛下拜表の詩に、雲路鸚鵡想退朝。【一三】 杖屨 世説に、陳太邱、詣荀朗陵、貧儉無僕役、乃使三元方將車、季方持杖從後。韓退之の孔叢墓誌に、可杖屨往來。【一四】 石樓 石樓は河南龍門伊水の中に在る。洛陽伽藍記に、城東門曰建春門、門外有石樓、穀水周圍繞城、至建春門外、東入陽渠。【一五】 鬻馬 唐、白居易、洛中に致仕し、既に老い、又、風を病み、將に其の駱馬を鬻がんとす。馬が悲鳴したから、不能忘情吟を作り、又、賣駱馬詩あり。白樂天不能忘情吟序に、樂天既老、又、病風、乃餘家事、會經費、去長物、馬有駱者、阻壯駿、乘之亦有年、籍在長物中、將鬻之、困人牽馬出門、馬驥首反顧、一鳴似知去而旋戀者、予愍然且命頌勒。【一六】 鬻雷 崇山、韓退之題名にいふ、元和四年二月二十六日、與樊宗師、盧仝、自洛中至小室、謁李渤、遂至龍潭、下釣、遇雷雨、明日乃歸。歐陽集古跋尾に、右韓退之題名在洛陽嵩山天封宮、石柱上刻之、記龍潭過雷事、余爲西京留

守推官、游嵩山、入天封宮、登山頂之武后封禪處、有石記、戒人游龍潭、二者母妄語笑以贖神龍、龍怒則有雷、恐因念退之記遇雷、意其有所誠也。【一八】蘇書云、東坡の自注に、歐陽永叔、嘗游嵩山、日暮、於絕壁上、見苔蘚、成文云、神清之洞、明日復尋不見。【一九】天壇、九域志に、洛陽有天壇山。太平寰宇記に、天壇山在河南府、澗池縣東北、一名壇屋山、高五百丈、四絕如壇。【二〇】與劉夫子尋靖長官。東坡自注に、劉几云、曾見三人嵩山幽絕處、眼光如貓、意其爲靖長官也。曾慥集仙傳に、靖不知何許人、唐僖宗時、爲登封令、既而棄官學道、遂仙去、隱其姓、而以名顯、故世謂之靖長官。劉几嘗遇於嵩高山中。

【題義】熙寧十年三月、范景仁の西京に往く時、東坡の送つた詩である。紀昀いふ、大段疏暢と。又いふ、起四句、太激、查初白以爲痛快一非也と。

【詩意】小人はもともと小才であつて、事理に暗く、ただ進むを榮となし、退くを辱となす。范景仁が前に侍郎となつて、進むを難とし、退くを易しとする態度は、小人だちの與り知る所でない。高位を勇退して閑地に就くは、范公に取りて、決して難しとする所ではない。顔回曰く、夫子の道は至つて大で、天下能く容るるなし。併し容れられないからと言つても何ぞ病へん。容れられない所に君子を見るのであると。道大である故に、吾、何ぞ病へんやである。又、言が深く立ち入るのは、聴くものをして寒からしめる。范景仁は累疏して王安石を力詆した。安石は大に怒り、其の疏を持ちて手も顫ふに至つた。(東坡いふ、鎮、多論時事、其言深切、聽者爲恐云云。)景仁は、天性が寛仁であつて、朝廷の安危、生民の利疚に關するものでなければ言はなかつた。帝、在位三十五年にして、未だ繼嗣がない。景仁は奮つていふ、天下の事、此より大なるものあらんやと。拜疏十九回に至り、鬚髮は爲に白くなつた。鬚髮は白くなつても、景仁の道家の還丹で、心を養ひ、迹を投じ、世に駐つて居る。それで、相逢うて、酒を呼んで楽しむのも、まことにうれしい。すべて無心なれば如何なる境遇に置かれても安らかであると思ふ。我は去年、久し振りで、蜀に歸り、親舊と飲むことを樂しみ、期年にして後還つた。故に此詩に去年行三萬里、蜀路走千盤の句がある。だんだん年取つても、身はいよいよ健かなので、山に登つても、心持は未だ閑でない。物足りない所がある。西遊は故山の櫻や筍の爲である。忽ち家園を憶ふ、須らく速かに去るべし、櫻桃は熟せんと欲し、筍はまさに生ずべしの意である。又、東道は所謂雲路鶴橋、退朝を想はしめるのである。かくて杖屨、兒を携へて、此處彼處と往來し、園亭に客舎を借りた。東坡は京師門外の景仁園中に館したから、園亭借客看の句がある。斑竹寺に花を折りて看、石樓灘に下つて水を弄する。斑竹は一名湘妃竹ともいふ。相傳ふ、舜、蒼梧に崩じ、二妃追うて至る。帝を哭して哀を極め、涙は竹を染む。故に斑斑淚痕の如しと。又、石樓は河南、龍門、伊水の中に在る。洛中のことで憶ひ出すのは、昔、白樂天は洛中に致仕し、既に老年になり、又、風を病み、將に其の駱馬を鬻がうとして、馬が首を驤げて悲鳴したので、樂天は愍然として勒を廻したといふことである。今は、衰へた白樂天を憐むのである。又、洛陽嵩山の石柱に、韓退之の龍潭遇雷の事を記した文がある。妄りに語笑して神龍を驢してはならない。龍が怒ると雷がある、と言つて居る。今は、雷を怯れる韓退之を笑ふのである。又、歐陽永叔は、嘗て嵩山に遊び、絶壁上に苔蘚を見る。文を成していふ、神清之洞と。明日、復、尋ねたが見えなかつた。又、洛陽には、天壇山がある。高さ五百丈、四絶壇の如しと傳ふ。又、嵩山の幽絶の處に、偉人を見る。眼光貓の如しといふ。

【詩意】小人はもともと小才であつて、事理に暗く、ただ進むを榮となし、退くを辱となす。范景仁が前に侍郎となつて、進むを難とし、退くを易しとする態度は、小人だちの與り知る所でない。高位を勇退して閑地に就くは、范公に取りて、決して難しとする所ではない。顔回曰く、夫子の道は至つて大で、天下能く容るるなし。併し容れられないからと言つても何ぞ病へん。容れられない所に君子を見るのであると。道大である故に、吾、何ぞ病へんやである。又、言が深く立ち入るのは、聴くものをして寒からしめる。范景仁は累疏して王安石を力詆した。安石は大に怒り、其の疏を持ちて手も顫ふに至つた。(東坡いふ、鎮、多論時事、其言深切、聽者爲恐云云。)景仁は、天性が寛仁であつて、朝廷の安危、生民の利疚に關するものでなければ言はなかつた。帝、在位三十五年にして、未だ繼嗣がない。景仁は奮つていふ、天下の事、此より大なるものあらんやと。拜疏十九回に至り、鬚髮は爲に白くなつた。鬚髮は白くなつても、景仁の道家の還丹で、心を養ひ、迹を投じ、世に駐つて居る。それで、相逢うて、酒を呼んで楽しむのも、まことにうれしい。すべて無心なれば如何なる境遇に置かれても安らかであると思ふ。我は去年、久し振りで、蜀に歸り、親舊と飲むことを樂しみ、期年にして後還つた。故に此詩に去年行三萬里、蜀路走千盤の句がある。だんだん年取つても、身はいよいよ健かなので、山に登つても、心持は未だ閑でない。物足りない所がある。西遊は故山の櫻や筍の爲である。忽ち家園を憶ふ、須らく速かに去るべし、櫻桃は熟せんと欲し、筍はまさに生ずべしの意である。又、東道は所謂雲路鶴橋、退朝を想はしめるのである。かくて杖屨、兒を携へて、此處彼處と往來し、園亭に客舎を借りた。東坡は京師門外の景仁園中に館したから、園亭借客看の句がある。斑竹寺に花を折りて看、石樓灘に下つて水を弄する。斑竹は一名湘妃竹ともいふ。相傳ふ、舜、蒼梧に崩じ、二妃追うて至る。帝を哭して哀を極め、涙は竹を染む。故に斑斑淚痕の如しと。又、石樓は河南、龍門、伊水の中に在る。洛中のことで憶ひ出すのは、昔、白樂天は洛中に致仕し、既に老年になり、又、風を病み、將に其の駱馬を鬻がうとして、馬が首を驤げて悲鳴したので、樂天は愍然として勒を廻したといふことである。今は、衰へた白樂天を憐むのである。又、洛陽嵩山の石柱に、韓退之の龍潭遇雷の事を記した文がある。妄りに語笑して神龍を驢してはならない。龍が怒ると雷がある、と言つて居る。今は、雷を怯れる韓退之を笑ふのである。又、歐陽永叔は、嘗て嵩山に遊び、絶壁上に苔蘚を見る。文を成していふ、神清之洞と。明日、復、尋ねたが見えなかつた。又、洛陽には、天壇山がある。高さ五百丈、四絶壇の如しと傳ふ。又、嵩山の幽絶の處に、偉人を見る。眼光貓の如しといふ。

劉凡^{リウキ}は其の靖長^{せいちやうけん}官^{くわん}であるまいかと思つた。靖長^{せいちやうけん}官^{くわん}は、唐^{たう}、僖宗^{きそう}時代^{じだい}の人^{ひと}で、登封^{とうほう}令^{れい}であつたが、官^{くわん}を棄^すて道^{みち}を學^{まな}び、遂^{つひ}に仙^{せん}となつて去^さつた。以上^{いじやう}は洛中^{らくちゆう}の故事^{こじ}である。景仁^{けいじん}も洛中^{らくちゆう}に遊^{あそ}ばれるからには、誠^{まこと}に劉夫子^{りうふうし}と、重ねて靖長^{せいちやうけん}官^{くわん}を尋^{たづ}ねられたら如何^{いか}か。

次韻景仁留別

景仁^{けいじん}の留別^{りうべつ}に次韻^{じゆん}す

公^{こう}老^{らう}我^が亦^{また}衰^{せう}。相^{あひ}見^み恨^む不^も數^{すう}。
公^{こう}は老^{らう}い我^がも亦^{また}衰^{せう}へ、相^{あひ}見^みること數^{すう}せざるを恨^むむ。
臨^{りん}行^{ぎやう}一^{いつ}杯^{はい}酒^{しゆ}。此^{こゝ}意^い重^{おも}山^{さん}嶽^{がく}。
行^ゆくに臨^{のぞ}み一^{いつ}杯^{はい}の酒^{しゆ}、此^{こゝ}意^いは山^{さん}嶽^{がく}より重^{おも}し。
歌^か詞^し白^{はく}紵^{ちよ}清^{きよ}。琴^{こと}弄^{ろう}黃^{わう}鍾^{しゆう}濁^{たつ}。
歌^か詞^しは白^{はく}紵^{ちよ}よりも清^{きよ}く、琴^{こと}は黃^{わう}鍾^{しゆう}を弄^{ろう}して濁^{たつ}る。
詩^し新^{しん}眇^{めう}難^{がた}和^わ。飲^の少^{せう}僅^ま可^か學^{まな}。
詩^しは新^{しん}にして眇^{めう}和^わし難^{がた}く、飲^のむこと少^{せう}れに僅^まに學^{まな}ぶべし。
欲^{ほつ}參^{さん}兵^{へい}部^ぶ選^{せん}。有^あ力^{ちから}誰^{たれ}如^{かく}犖^し。
兵^{へい}部^ぶの選^{せん}に參^{さん}せんと欲^{ほつ}するも、力^{ちから}あるは誰^{たれ}か犖^{かく}に如^{かく}かん。
且^{まさ}作^{たく}東^{とう}諸^{しよ}侯^{こう}。山^{さん}城^{じやう}雄^{ゆう}鼓^こ角^{かく}。
且^{まさ}に東^{とう}諸^{しよ}侯^{こう}を作^なさんとし、山^{さん}城^{じやう}鼓^こ角^{かく}雄^{ゆう}なり。
南^{なん}遊^{いゆう}許^よ過^わ我^が。不^お憚^{はな}千^{せん}里^り邈^{はく}。
南^{なん}遊^{いゆう}我^がに過^わるを許^{ゆる}す、千^{せん}里^りの邈^{はく}なるを憚^{はな}らず。
會^か當^{たう}聞^{もん}公^{こう}來^{きた}。倒^{くつ}屣^{さか}髮^ま一^{いつ}握^{にす}。
會^か當^{たう}に公^{こう}の來^{きた}るを聞^{もん}くべし、屣^{くつ}を倒^{さか}にして髮^ま一^{いつ}たび握^{にす}。

【字解】(一) 公老我亦衰 文選、稽叔夜の養生論に、從^し衰^{せう}得^と白^{はく}、從^し白^{はく}得^と老^{らう}。(二) 一杯酒 沈約(字は休文)の別^{べつ}范^{はん}安^{あん}成^{せい}詩^しに、及^{及び}解^{かい}各^{かく}衰^{せう}暮^ぼ、非^非復^復別^{べつ}離^り時^じ一^{いつ}杯^{はい}酒^{しゆ}、明日^{あした}難^{がた}重^{おも}持^ぢ。(三) 重^{おも}山^{さん}嶽^{がく} 文選、陸機^{りくき}の謝^{しや}平^{へい}原^{げん}内^{ない}史^し表^{ひょう}に、施^し重^{おも}山^{さん}嶽^{がく}、職^{しやく}足^{そく}二^に灰^{かい}

没^{ぼつ}。【四】白紵清 樂府解題に、白紵歌、白紵、吳地^ご所^{しよ}出^{しゆ}、白紵舞、本、吳舞也、梁武帝、令^{しん}沈^{しん}約^{やく}改^か其^き辭^じ爲^な四^し時^じ歌^か。【五】黃鍾濁 史記、田完世家に、騶忌子曰、大絃濁以春溫者、君也、聲中^{しん}於^に宮^{くわう}、宮爲^{なり}君^{きん}、五聲之本、生^な於^に黃^{わう}鍾^{しゆう}、琴^{こと}有^あ黃^{わう}鍾^{しゆう}調^{てう}。周禮に、凡^{おほ}樂^{らく}、黃^{わう}鍾^{しゆう}爲^{なり}宮^{くわう}。鄭氏云、凡^{おほ}五^ご聲^{しやう}、宮^{くわう}之所^{しよ}生^な、濁^{たつ}者^{なり}爲^{なり}多^た。【六】有力 朝野僉載にいふ、崔湜爲^{なり}吏部侍郎、掌^{たう}鑾^{らん}、有^あ三^{さん}選^{せん}人^{にん}、白^{はく}湜^{しやう}曰^い、其^き能^な翹^{せう}關^{かん}負^ふ米^{まい}、湜笑^{わら}曰^い、若^{ごと}壯^{さう}、何^{なに}不^な求^{もと}選^{せん}兵^{へい}部^ぶ、答^{こた}曰^い、外^{がい}議^ぎ謂^い、崔^{さい}侍郎^{じやうらう}下^か有^あ氣^き力^{りき}者^{なり}即^{すなは}得^と選^{せん}。【七】誰如犖 左傳、莊公三十二年に、零^{ぜい}講^{かう}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^な如^{ごと}殺^{ころ}之^し、是^{こゝ}不^な可^か鞭^{べん}、學^{まな}有^あ力^{ちから}焉^や、能^な投^な蓋^{がい}于^に稷^{しやく}門^{もん}。零^{ぜい}於^に梁^{りやう}氏^し、女^{によ}公^{こう}子^し觀^{くわん}之^し、圍^い人^{にん}拳^{けん}自^{より}牆^か外^{がい}與^よ之^し戲^ぎ、子般怒^{いか}、使^し鞭^{べん}之^し、公^{こう}曰^い不^{な</}

種、泉の粗なるものより清きも、琴は黄鍾を弄して濁る。琴に黄鍾の調といふがある。黄鍾は宮聲で、濁つた音が多い。それで、琴は黄鍾を弄して濁ると言つたのである。又、范君の詩は、新味があつて、其の微妙な調は、逆も和し難い。酒飲むことを少くして、僅に之を學ぶことが出来る。昔、崔湜が吏部侍郎となつて、銓考を掌つた時、選人があつて、湜に白していふ、私はよく關を翹げくわぬぬきをあげるは力の強きをいふ米を負ふと。湜はいふ、然らばなせ兵部の選を求めなかつたのかと。強力の點は、誰か圜人の犖に及ぼうぞ。併し強力のことは、必ずしも語るに足らない。まさに東諸侯の盟主を作さうとするので、山城には鼓角の聲も雄である。南遊して、我に過ぎるを許すからには、一たび相思ふ毎に千里駕を命じ、路の邈かなるを憚らない。そして公の來るを聞かば、必ず當に屣を倒にして之を迎へ、沐して居ても髪を捉へ、食事でも哺を吐いて君に接待したいと思ふ。

京師哭任遵聖

十年不還鄉。兒女日夜長。
豈惟催老大。漸復成凋喪。
每聞耆舊亡。涕泣聲輒放。
老任況奇逸。先子推輩行。

京師任遵聖を哭す

十年郷に還らず、兒女日夜に長ず。
豈惟に老大を催すのみならんや、漸く復凋喪を成す。
耆舊の亡するを聞く毎に、涕泣聲輒ち放つ。
老任況んや奇逸、先子輩行を推す。

文章得少譽。詩語尤清壯。
吏能復所長。談笑萬夫上。
自喜作劇縣。偏工破豪黨。
奮髯走猾吏。嚼齒對姦將。
哀哉命不偶。每以才得謗。
竟使落窮山。青衫就黃壤。
宦遊久不樂。江海永相望。
退耕本就君。時節相勞餉。
此懷今不遂。歸見纍纍葬。
望哭國西門。落日銜千嶂。
平生惟一子。抱負珠在掌。
見之齟齬中。已有食牛量。
他年如入洛。生死一相訪。
惟有王濬沖。心知中散狀。

文章少譽を得、詩語尤も清壯。
吏能復長する所、談笑す萬夫の上。
自ら喜ぶ劇縣を作すを、偏工豪黨を破る。
髯を奮つて猾吏を走らせ、齒を嚼んで姦將に對す。
哀しいかな命偶ならず、毎に才を以て謗を得。
竟に窮山に落ち、青衫をして黄壤に就かしむ。
宦遊久しく樂まず、江海永く相望む。
退耕本君に就き、時節相勞餉せんとす。
此の懷ひ今遂げず、歸りて見る纍纍の葬を。
望み哭す國の西門、落日千嶂を銜む。
平生惟一子、抱負珠掌に在り。
之を見る齟齬の中、已に牛を食ふの量あり。
他年如し洛に入り、生死一たび相訪ふ。
惟王濬沖ありて、心の中散の狀を知る。

に長ずるが故に、劇縣を治めるを喜ぶのである。萬人の上に談笑する餘裕があるから、偏工の力でも并兼豪黨の徒を打ち破つたのである。前漢の朱博は琅琊の太守となつて、髯を奮ひ、凡を抵つて右曹掾吏を叱つたが、任老も亦、其の髯を奮つて猾吏を走らせ、齒を嚙んで姦將に對したのである。哀しいことには、任老の宦に在るや、運拙く、毎に才を以て謗を得、遂に窮山に落魄し、青衫をして黄壤に就かした。鬪つて我身を顧みると、我は宦遊が久しきに亙つて、一日の樂みを得ない。任老と江海永く相望むのみである。そこで、寧ろ退いて野に耕し、老の許に就き、歳時、伏臘毎に、相勞し相餉しようと思ふ。併し、此の願は、今は遂げられなく、忽ち任老と幽明遠く隔つて、歸つて纍纍の墳墓を見るのみ。園都の西門を望んで哭すれば、落日は千幃を銜んで、坐るに物の哀れを感せしめる。任老の一子伯雨は、經術に邃く、文力も雄健である。任老平生の満足は、只此の一子にある。少時は、掌中の玉として、抱いたり負うたりしたが、七八歳韶齒の中、既に英雄の相があらはれたのである。虎豹の子は未だ文を成さなけれど、已に牛を食ふの氣がある。他年、もし洛に入り、生死一たび相訪問することとなれば、ただ王濬沖だけが、心の中散大夫の状を知るのみである。(これは晉の嵇紹(中散大夫嵇康の子)が始めて洛に入つたとき、或人が王戎に謂つていふ、昨、稠人の中で、始めて嵇紹を見たが、昂昂然として野鶴の鷄羣に在るやうであつたと。戎が曰く、君は未だ其父を見ないからであると、此の故事によつたのである。濬沖は戎の字である。)

書韓幹牧馬圖

韓幹牧馬の圖に書す

南山之下。

南山の下、

汧渭之間。

汧渭の間、

想見開元天寶年。

想ひ見る開元天寶の年。

八坊分屯隘秦川。

八坊屯を分ちて秦川に隘る、

四十萬匹如雲烟。

四十萬匹雲烟の如し。

騅駟駱驪驄駟。

騅駟駱驪驄駟、

白魚赤兔駢皇輪。

白魚赤兔駢皇輪、

龍顛鳳頸獐且妍。

龍顛鳳頸獐且妍、

奇姿逸德隱鶩頑。

奇姿逸德鶩頑を隠す。

碧眼胡兒手足鮮。

碧眼の胡兒手足鮮かに、

歲時翦刷供帝閑。

歲時翦刷帝閑に供す。

柘袍臨池侍三千。

柘袍池に臨み三千侍し、

紅粧照日光流淵。

紅粧は日に照りて光淵に流る。

【字解】

【一】韓幹 歷代名畫記に韓幹、大梁人、王右丞維見其畫、遂推獎之、官至太府寺丞、善寫三貳人物、尤工鞍馬、幹は初、曹霸を師とした。【二】牧馬 放しがひの馬。唐、李益の詩に、牧馬羣嘶邊草綠。【三】汧渭之間 汧水は隴州汧源縣の東南より出で、鳳翔、虢縣に至つて、渭に入る。史記、秦始皇紀に、非子居大邱、好馬及畜、善養息之、周孝王召、使主馬於汧渭之間、馬大蕃息。【四】開元天寶 唐、玄宗の年號。【五】八坊 唐、兵志に、八坊、一日、保樂、二日、甘露、三日、南蕃、四日、北蕃、五日、岐陽、六日、太平、七日、宜祿、八日、安定、八坊之田、千二百三十頃、募民耕之、以給芻秣。【六】隘秦川 蜀志に、諸葛亮傳に、身率益州

樓下玉螭吐清寒。

往來蹙踏生飛湍。

衆工舐筆和朱鉛。

先生曹霸弟子韓。

廐馬多肉尻雕圓。

肉中畫骨誇尤難。

金羈玉勒繡羅鞍。

鞭箠刻烙傷天全。

不如此圖近自然。

平沙細草荒芊綿。

驚鴻脫兔爭後先。

王良挾策飛上天。

何必俛首服短轅。

之衆、以出秦川。【七】四十萬匹云

云。名畫記に、明皇好大馬、御廐至

四十萬匹、遂有沛艾大馬、西域、大馬

骨力追風、毛彩照地、不可名狀、

號木槽馬。唐、兵志に、唐初、得突

厥馬二千匹、又、得隋馬三千於赤岸

澤、徙之隴右、監牧之制、始於此、

用三張萬歲領羣牧、自貞觀至麟

德四十年間、馬七十六萬六千、置

八坊岐、幽、涇、寧間、地廣千里、自

萬歲失職、馬政頗廢、開元初、國馬

益耗、及王毛仲領內外閑廐馬、稍稍

復始、二十四萬、至十三年、及四十

三萬。王毛仲傳に、從帝東封、收馬

數萬匹、每色一隊相間、如錦繡、

天子才之。杜子美、天育驃騎歌に、

當時四十萬匹馬、張公歎其才盡下

【八】騶駼駟駘云云。詩、駟頌に、有

騶有駘云云。注にいふ、蒼白雜毛曰

騶。黃白雜毛曰駘。陰白雜毛曰駘。白馬黑鬣曰駘。純黑曰騶。赤身黑鬣曰駘。又、爾雅に馬白腹曰駘と見ゆ。【九】白魚赤

兔。爾雅に、一目白兔、二目白兔。注にいふ、似魚目也。詩、駟頌に、有騶有魚。赤兔は呂布の馬名。曹瞞傳に、呂布馬名赤

馬。【一〇】龍顛風頭。劉琬の馬賦に、龍頭鳥目、麟腹虎背。杜子美の胡馬行に、風臆麟鬣未易識。李汝珍の異聞實錄に、鮑謂章曰、

得良馬乎、曰、予春初獲駟駘數匹、龍形風頭、兔脰鹿膺。【一一】碧眼。高僧傳に、達摩眼紺青色、稱碧眼胡僧。【一二】供帝閑

唐、兵志に、尙乘、掌天子之御、左右六閑、總十二閑、爲二廐、二曰風苑。周禮に、校人掌三王馬之政、天子十有二閑、馬六

種、邦國六閑、馬四種、家四閑、馬二種。【一三】柘袍。六典に、隋文帝服柘黃袍及巾帶、以聽朝。至今遂以爲常。白樂天之長恨

歌に、後宮佳麗三千人。【一四】紅粧照日。李太白の詩に、日照紅粧水底明。【一五】玉螭吐清寒。馬をいふ。洞冥記に、以金簪

貫玉螭腹爲戲。淮南子に、氣清寒。【一六】飛湍。奔湍に同じ。江

南野錄に、長江一條、飛湍千里。【一七】衆工舐筆。杜子美の曹將軍、馬圖引に、霜鬣蹙踏長楸閑。【一八】飛湍。奔湍に同じ。江

者半。杜牧之の詩に、紙筆和鉛欺買馬。【一九】先生曹霸云云。杜子美が贈將軍曹霸丹青引に、弟子韓幹早入室、亦能畫馬窮殊

相、幹惟畫肉不畫骨、忍使驪驅氣形喪。名畫記に、韓幹初師曹霸、其後遂自獨擅。【二〇】尻雕。尻の骨。漢、東方朔の傳に、結

股脚、連雕尻。【二一】刻烙傷天全。莊子、馬蹄篇に、伯樂曰、我善治馬、燒之剔之、刻之雠之、連之以羈、編之以卓棧、

馬之死者、十二三矣。【二二】芊綿。草木の蕃衍する貌。謝靈運の詩に、孤岸疎秀、長洲芊綿。【二三】驚鴻。曹植の賦に、翩若驚

鴻、宛若游龍。【二四】脫兔。孫子、九地に、始如三處女、敵人開戶、後如脫兔、敵不及拒。【二五】王良挾策。王良は趙簡子の時の

御者。漢書、天文志に、漢中四星、曰天駟、傍一星、曰王良、王良策馬、車騎滿野。漢、王褒傳に、庸人御驚馬、亦傷吻徹策而

不進於行、及王良執鞭、韓哀附輿、縱馳騁騫、忽如景塵、周流八極、萬里一息、何其速哉、人馬相得也。【二六】短轅。漢、灌夫

傳に、局促效轅下駒。晉書、蔡謨戲王導、短轅轡車。

【題義】

王詵が韓幹の書いた牧馬圖を以て跋を求めたから、爲に此詩を作つたのである。馬の詩は、杜甫が多く作つた。東坡の此詩の起首は、杜甫の國初以來の起より出でて其の面目を變じたもの、中

間の廐馬云は、杜甫の丹青より來つて其の面目を變じたもの、末二句は、杜甫の天育驪駒の詩を學んだのである。唐宋詩醇に、馬詩有杜甫諸作、後人無從著筆矣、千載獨有杜詩數篇、能別出一奇於浣花之外、骨幹氣象、實相等埒とある。浣花溪は杜甫が草堂の在る所。老學菴筆記に、杜少陵在成都、有兩草堂、一在萬里橋西、一在浣花溪北と見ゆ。烏臺詩案に、結末意、以騏驎一自比、譏執政大臣無能盡我才、如王良之能御一者、何必折節干求進用也とある。(餘録を見よ)

【詩意】南山の下、沔水・渭水の間は、牧馬の産地である。昔、周の孝王は、非子を召して馬を沔水・渭水の間の主らしめたが、馬が大に蕃息したといふことである。唐は貞觀より麟德に至る四十年間、馬七十六萬六千を八坊・岐・幽・涇・寧の間に置いた。想ひ見る、玄宗皇帝の開元・天寶の年、保樂・甘露・南普閏・北普閏・岐陽・太平・宜祿・安定の八坊の田、千二百三十頃の廣い地に、民を募つて耕さしめ、芻秣を給したことがある。かくて屯を分つたが、秦川に隘つた。即ち牧馬四十萬匹、之を望むに雲烟の如くであつた。其の馬の種類をいふと、蒼白雜毛のもの、黃白雜毛のもの、陰白雜毛のもの、白馬黒鬣のもの、純黒のもの、赤身黒鬣のもの、そして腹の白い馬も交つて居る。又、白魚といふ馬もある、魚の目に似た所から言つたのであらう。赤兔といふのも、馬の名である。又、赤黃の馬を驛といひ、黃白の馬を皇といふ。輪といふも、馬の名。又、龍頭の形した馬、鳳凰の頸の如き馬、容貌の凶惡なものも、又、美好なものもある。奇しい姿や、逸駿の徳、よく驚頑な所を隠して居る。さて碧眼の胡兒は、手も尾も鮮かに、馬の毛を翦刷して、帝の廐に奉納する。帝は柘の黃袍を服されて、後宮の侍女三千

人とともに御池に臨んで、馬を御覽になる。日は紅粧を照らして、光は淵に流れる。樓下の玉麟(馬をいふ)は清い寒い氣を吐き、往きつ來りつ、蹙踏して、早瀬を生じて居る。(神馬の出たといふ渥洼水の状を寫したのである)多くの畫工は、ただ畫筆を舐つて、顔料に和して居るのみ。畫の先生は、善く馬を畫く曹霸將軍、韓幹は其弟子である。韓幹はただ肉を畫いて骨を畫かない。廐の馬は、肉が多く尻の骨が圓い。肉中に骨を畫くのが最も難いのである。世の馬を見るに、金の羈(馬の馬絡頭)、玉の勒(銜)、繡羅の鞍、そして鞭筆(筆は馬策)を加へ、燒鏝をあて、其毛を剪み其爪を切る。かくては其の天全を傷ふのである。到底、此馬の圖の自然に近いのには及ばない。平沙細草は荒れて、日に蕃衍し、驚鴻、脱兔、孰れが迅きかと、先後を争つて居る。王良は古の馬を御する名人、策を挾んで馬に騎ると、都を過ぎ、國を越え、萬里も一息の間、飛んで天上にも上るのである。何ぞ局促として首を俯し、短轡の下に服しようぞ。(紀昀いふ、到末、又拖二意、變化不測と。結尾の二句を得て全篇が飛動する。)

【餘録】此詩の騏驎駉駉驪駒驪驄は、蓋し韓退之が陸渾山火詩の鴉鵑鷹雉鵠鷓の句に本づく。王士正謂ふ、竝是學之急就篇句法、由其氣大、故不見其累重之迹と。紀昀いふ、通首旁觀、只結處一著本意、章法奇絶、放翁嘉陵驛、折枝海棠詩、似從此得法と。又いふ、若第二句、去一之字、作一一句、神味便減と。又いふ、到末又拖二意、變化不測と。名畫錄に、韓幹、天寶中、召入供奉、能狀飛黃之質、圖噴玉之奇、開元後、外國名馬重譯累至、明皇擇其良者、與中國之駿同頒、畫寫之、陳閔

（會稽の人、唐書、藝文志には、陳宏に作る）貌之於前、韓幹繼之於後、寫渥洼之狀、渥洼は川の名、甘肅省に在り。漢の武帝は、神馬を此の水中より得。若レ在水中、移三騾裏（金喙赤色で、一日に一萬八千里を行く神馬、上林賦に見ゆ。）之形、出於圖上、故幹居神品、宜矣とある。烏臺詩案に、熙寧十年二月、到京、三月初一日、王詵約、來日出、城外相見、次日、軾與詵相見、次日、王詵送韓幹畫馬十二匹、共六軸、求軾題跋、詩云、王良挾策飛上天、何必俛首服短轡、意以騏驥自比、譏下諷執政大臣無能盡我才、如王良之能御者、何必折節干求進用也、其詩即不係朝旨、降到冊子内、とある。

送魯元翰少卿知衛州

魯元翰少卿が衛州に知たるを送る

冗士無處著。寄身范公園。
桃李忽成陰。薺麥秀已繁。
閉門春晝永。惟有黃蜂喧。
誰人肯攜酒。共醉榆柳村。
髯卿獨何者。一月三到門。
我不往拜之。髯來意彌敦。

冗士著を處くなし、身を寄す范公の園。
桃李忽ち陰を成し、薺麥秀でて已に繁し。
門を閉ちて春晝永く、惟黃蜂の喧しきあり。
誰人か肯て酒を攜へ、共に醉ふ榆柳村。
髯卿獨り何物、一月三たび門に到る。
我往いて之を拜せず、髯來り意彌敦し。

堂堂元老後。壘壘仁人言。

堂堂元老の後、壘壘仁人の言。

憶在錢塘歲。情好均弟昆。
時於冰雪中。笑語作春溫。
欲飲徑相覓。夜開叢竹軒。
搜尋到篋笥。鮮醢無復存。
每愧烟火中。玉腕親炮燔。
別來今幾何。相對如夢魂。
告我當北渡。新詩侑清樽。
坡陀太行麓。洶湧黃河翻。
仕宦非不遇。王畿西北垣。
斯民如魚耳。見網則驚奔。
皎皎千丈清。不如尺水渾。
刑政雖首務。念當養其源。
一聞襦袴音。盜賊安足論。

憶ふ錢塘に在る歲、情好は弟昆に均し。
時に冰雪の中に於て、笑語春溫を作す。
飲まんと欲して徑に相覓め、夜開く叢竹軒。
搜尋篋笥に到るも、鮮醢復存するなし。
毎に愧づ烟火の中、玉腕親しく炮燔す。
別來今幾何、相對して夢魂の如し。
我に告ぐ當に北に渡るべしと、新詩清樽を侑む。
坡陀太行の麓、洶湧黃河翻る。
仕宦遇はざるにあらず、王畿西北の垣。
斯民は魚の如きのみ、網を見れば則ち驚奔す。
皎皎として千丈清きは、尺水の渾れるに如かず。
刑政は首務と雖も、念ふ當に其源を養ふべし。
一たび襦袴の音を聞かば、盜賊は安んぞ論するに足らんや。

【字解】魯元翰少卿 名は有開、蘄簡公の姪、南康に知たり。代り還ると、王安石問ふ、江南如何と。元翰は新法當に異日の患を爲すべしと對ふ。安石怒る。僅に杭に倅たるを得、東坡も亦、杭倅となつて魯と官を同うす。魯先づ代り去る。東坡の壽星寺饒魯少卿詩は、即ち元翰である。宋史、有開傳に、自南康軍一代理還、出通判杭州、知衢州、徙冀州、元祐中、歷知洛滑州、官至中大夫。【二】衢州 元和郡縣志に、河北道衢州波郡、即殷牧野之地、漢爲汲縣、魏孝靜帝於汲縣置義州、周武帝改爲衢州。【三】寄身范公園 子由文集に、子瞻兄始與元翰、皆倅杭州、及自彭城一還、止都門、寓居范景仁東園、元翰時相過。本集、與黎希聲尺牘に、向自密將赴河中、至陳橋一受命、改差彭城、便欲赴任、以兒子娶婦、暫留三城東景仁園中。【四】齊麥 齊は野草の一、初生のものは甘味がある。詩、邶風に、誰謂荼苦、其甘如齊。【五】榆柳 榆は白粉。説文に榆、白粉。寒地に産する喬木の一、赤・白の二種あり。赤榆は先づ莢を著けて、後に葉を生ず。白榆は先づ葉を生じて、後に莢を著く。陸璣、草木疏に、榆有三十種、葉皆相似、皮及木理異。【六】髯卿 魯元翰有髯、故以髯稱之。蜀、關羽傳に、猶未若髯之絕倫逸羣也。【七】意彌敦 文選、謝靈運の彭蠡詩に、弦絶念彌敦。【八】堂堂元老後 漢、蕭望之傳贊に、堂堂折而不撓。晉、魏舒傳に、堂堂人之領袖。毛詩に、方叔元老。宋史に、魯宗道、字貫之、亳州、諱人、眞宗朝、爲諫德直龍圖閣、仁宗立拜右諫議大夫、參知政事、在政府十七年卒、諡剛簡、有開之從父也、用其蔭入官。【九】豐豐 つとめて倦まない貌。詩、小雅に、豐豐文王、令聞不已。晉書謝安傳に、弱冠詣王濛、清言良久、既去、濛子修曰、向客何如大人、濛曰、此客豐豐爲來過人。又阮修傳に、王衍族子敦謂衍曰、阮宣子可與言、衍曰、吾亦聞之、但未知其豐豐之處。【一〇】仁人言 左傳、昭公三年に、君子曰、仁人之言、其利溥哉。【一一】弟昆 爾雅に、昆兄也。【一二】笑語作春溫 杜子美の貽柳少府詩に、柳侯披衣笑、見我顏色溫。【一三】徑相覓 杜子美の醉時歌に、得錢即相覓、沽酒不復疑。【一四】搜尋到篋笥 孟郊、韓愈の聯句に、搜尋得深行。韓退之の詩に、深藏篋笥一時一發。【一五】鮮醴 釋名に、鮮、菹也、以鹽米一釀魚、以爲菹熟而食之也。【一六】玉腕 孟榮の本事詩に、吹火紅脣動、指蕪玉腕斜、遙觀煙裏面、卻似霧中花。東坡の詩に玉腕半指雪碧袖。【一七】清樽 賈賈王の詩に、還愁三徑晚、獨對一清樽。【一八】坡陀斜傾 爾雅、釋地に、坡陀不平。【一九】太行麓 名勝志に、衛輝府、輝縣西北、與太行山連接。【二〇】洶湧 波の湧き立つ勢。司馬相如、子虛賦に、沸乎暴怒、洶湧澎湃。【二一】黃河翻 元和郡縣志に、黃河自新安縣界、流入經汲縣南、謂之棘津、亦謂之石濟津。【二二】王畿西北垣 周禮に、方千里曰王畿。太平寰宇記に、衛州東南至東京一百三十五里。【二三】皎皎 楚辭、漁父に、安能以皎皎之白、蒙世俗之塵埃乎。【二四】千丈清云云 家語の水至清則無魚の意。【二五】襦袴 後漢、廉范傳に、廉范爲蜀郡太守、百姓歌之曰、平生無襦今五袴。

【題義】此詩は熙寧十年三月の作。東坡が杭州に倅であつたとき、魯と官を同うす。魯、先づ代り去つて、衛州に知となつた。其時の送詩である。東坡は密州より移つて河中に守となり、京師に至る。徐州に改められた時、旨ありて國門に入ることを許されなかつたから、城外范蜀公の園に寓した。故に首句に冗士無處著、寄身范公園とある。紀昀いふ、先作頓宕便入、得レ不突と。

【詩意】我が如き無用のものは、落ち著くべき處がないので、暫く身を城東の范景仁の園中に寄せたのである。桃や李がいつしか陰をなし、薺や麥も、已に繁つた。門を閉ちて家居すれば、春の日も永く、ただ黄蜂の喧しく飛んで居るのを見る。誰人かここに訪れるものがあつて、酒を携へて、共に榆や柳の村家で酔ひたいものである。折しも髯卿の美はしい魯元翰は、獨り、いかなれば一月に三たび我門を叩かれる。我は殊更に禮をなして、出迎へて拜することもしないけれども、髯卿は、心持がいよいよ敦く、親しんで來られる。魯髯卿は、堂堂たる元老魯宗道（字は貫之）の後である。宗道は仁宗の朝に、右諫議大夫、參知政事に拜された人で、元翰の從父に當つて居る。元翰も實は其のお蔭（父祖の功勞によつて官に敘せられしをいふ）で官に入つた次第である。晉の謝安は、弱冠の頃、王濛の許に詣つて清談をなした。既に去ると、濛はいふ。此客は豐豐（つとめて倦まない）として來つ

て人に逼ると。今、髯卿も壘壘として人に迫つて、所謂仁人の言、其の利が薄きものである。首を回せば、錢塘に在つた歳（紀昀いふ、挿一事、便生動有情と。）君と僕との情好は兄弟に均しくあつた。時に冰雪の中に於て、談笑春を生じ、我を見て顔色温であつた。錢を得て即ち相覓め、酒を沽つて復疑はない。飲まんと欲して、夜、叢竹軒を開いた。そして好物を搜尋して篋笥に到る。韓退之の詩に、深藏篋笥一時一發とあるものであらう。さて搜して見たが、鮓も醢も、復存して居ない。火を吹いて紅唇動き、薪を揜（手で衣を發く）して玉腕斜に、遙に觀る煙裏の面、卻つて霧中の花に似るといふは小説の中に見えた言葉であるが、烟火の中で、玉腕親しく炮燔した、昔のことも思ひ出される。一別以來、幾何の年月を経しぞ、相對してまことに夢魂のやうである。我に別を告げて、北に渡るべしといはれる。乃ち新詩を作り、清樽を侑めて別を述べる。前途を望むと、太行の山は、斜に傾いて連つて居る。黄河は波湧き立つて居る。仕宦して不遇といふ譯でもないが、王畿は西北の垣となつて居る。（太平寰宇記に、衛州東南、至東京一百三十五里とある。）さて人民は譬へば魚のやうなもので、網を見ると驚奔するものである。故に政を施すは濕つた薪を束ねるやうでは、民は逆も堪へられない。水至つて清ければ、魚が居ない。皎皎として千丈の清きは、尺水の渾れるには及ばないと思ふ。刑政は首務であらうが、當に其の源を養ふべきである。後漢の廉范が蜀郡の太守となつたとき、百姓は之を歌うて、平生無襦今五袴と。民をして襦袴の音を聞いて、其の生を樂むやうにすれば、盜賊などのことは、決して論ずるに足らないのである。（紀昀いふ、一結立言得體、不下以三理路一爲嫌と。）

次韻子由送蔣夔赴代州學官

子由が蔣夔の代州學官に赴くを送るに次韻す

功利爭先變法初。功利先を爭ふ法を變ずるの初、
 典型獨守老成餘。典型獨り守る老成の餘。
 窮人未信詩能爾。窮人未だ信せず詩能く爾るを、
 倚市懸知繡不如。市に倚るは懸に知る繡の如かざるを。
 代北諸生漸狂簡。代北の諸生漸く狂簡、
 牀頭雜說爲爬梳。牀頭の雜說爲に爬梳。
 歸來問雁吾何敢。歸り來つて雁を問ふ吾何ぞ敢てせん、
 疾世王符解著書。世を疾む王符は解く書を著す。

【字解】 一 代州學官 九域志に、河東路、代州、雁門郡、宋、乾德元年、爲三州、治雁門縣。宋史、職官志に、慶歷四年、詔三州軍監、各立學置教授、訓導云云。 二 功利爭先 云云 史記商君傳に、利不百不變法、功不十不易器。文選、鮑明遠の詩に、爭先萬里途。宋史、王安石傳に、訓釋詩書周禮一類之、號曰新義、主司、純用以取士、士莫得不自名一經、先儒傳注一切廢不用。

大雅に、單無老成人、尙有典型。 一 老成 杜子美の詩に、毫髮無遺憾、波瀾獨老成。 二 倚市 史記、貨殖傳に、用貧求富、農不工、工不商、刺繡文不如倚市門、此言三末業、貧者之資也。 三 懸知 懸は度なり、はるかにと訓す。唐、裴濯の詩に、懸知此地是神仙。 四 代北 陳子昂の詩に、雁山橫代北。 五 狂簡 志が大で、事に略なるをいふ。論語、公冶長篇に、吾黨之小子、狂簡斐然成章。 六 牀頭 晉書に、王濟嘗詣王湛、見牀頭有周易。 七 爬梳 韓退之が送鄭尚書一序に、蜂屯蟻雜不可爬梳。韓退之、進學解の爬羅剔抉の意。學官に切である。 八 歸來問雁云云 潛夫論の述敘篇に、皇甫規解官歸安

定、郷人有以貨得雁門太守者、亦去職還家、書刺謁規、規臥不迎、卿前在郡、食雁美乎、有頃又白、王符在雁門、規素聞符名、乃驚遽而起、衣不及帶、屣履出迎、授符手而還、與同坐、極歡、時人爲之語曰、徒見二千石、不如一逢接、言書生道義之爲貴也。【三】疾世王符云云 後漢、王符傳に、隱居著書三十餘篇、以譏當時得失、號曰潜夫論。

【題義】此詩も熙寧十年三月の作。蔣夔は時に京中に在つた。欒城集、送蔣夔赴代州學官詩に、憶遊太學二十年初、猶見胡公豈弟餘、徧閱諸生非有道、最憐能賦似相如、青衫共笑方持板、白髮相看各滿梳、暫免百憂趨長吏、勉調三寸事新書とある。紀昀は此詩を評して語太激切と。

【詩意】功利に急であつて、先を争ふは、法を變ずるの初である。利、百ならざれば、法を變へない。功十ならざれば、器を易へないといふは、舊法を守る人である。老成人なしと雖も、典型ありと、古詩にあるが、典型は獨り老成人の守る所である。詩人は窮して其の詩ますます見はると言はれて居るも、窮する人、必ずしも詩を能くすとは信じない。貧を用つて富を求むるは、農は工に如かない。工は商に如かない。そして繡文を刺すのは、市門に倚るには如かないのである。人の功利を争ふのも無理ならぬことと思ふ。ここに代北の諸生蔣夔は狂簡で、志は大であるも、事に略である。功利を外にし、牀頭の圖書雜說、之を搔きよせ、網羅して、會心の處を探し求める。昔、東漢の世、皇甫規は官を解いて郷に歸つた。たまたま郷人に金の力で雁門の太守となつたものも、亦職を去つて家に還つて居たが、一日規を訪問した。規は臥して出迎もしない。既に入ると、規は問ふ、君は郡に在り、雁を食うて美かつたかと。頃くすると、王符も來り訪ねて門に在る、規は平生、其の名を慕ひ、驚い

て出で迎へ、同じく坐して歡を極めたといふことである。歸つて雁を問ふの態度は、吾は敢てしない。世を疾む王符が、隱居して書三十餘篇を著はし、當時の得失を譏つた狂簡は、我の慕ふ所である。これを蔣君が赴任を送る辭とする。

宿州次韻劉涇

宿州劉涇に次韻す

我欲歸休瑟漸希。我歸休せんと欲して瑟漸く希に、
舞雩何日著春衣。舞雩何れの日か春衣を著けん。
多情白髮三千丈。多情白髮三千丈、
無用蒼皮四十圍。無用蒼皮四十圍。
晚覺文章眞小技。晩に文章の眞に小技なるを覺り、
早知富貴有危機。早く富貴の危機あるを知る。
爲君垂涕君知否。君の爲に涕を垂る君知るや否や、
千古華亭鶴自飛。千古華亭鶴自から飛ぶ。

【字解】

【一】宿州 太平寰宇記に、元和四年、以徐州符離之地、南臨汴河、有三埭橋、爲船艦之會、襟帶梁宋、漕運所歷、乃以符離、蕪縣、虹縣三邑、立宿州、開寶元年、陞爲保靜軍節度、北至徐州一百四十里。
【二】劉涇 字は巨濟、進士に擧げられ、宿州を爲む。王安石、薦めて經義所檢討となし、太學博士に除す。後、處、虢、真、坊四州に知となり、職方郎中に除せらる。【三】歸休 白居易傳に、居易、早年歸休、於三所居

築山石樓、鑿龍澗八節灘、爲遊賞之樂。

【三】瑟漸希 論語、先進篇に、鼓瑟希。

希は、時時聲の絶ゆるをいふ。【五】舞雩 同

じく先進篇に、莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。舞雩は天を祭り、雨を禱る處。【六】白髮三千丈。李太白、秋浦歌に、白髮三千丈、緣愁似箇長。【七】蒼皮四十圍。杜子美の古柏行に、霜皮溜雨四十圍、黛色參天二千尺。【八】小技。杜子美の詩に、文章本小技、於道未爲尊。【九】富貴有危機。晉書、諸葛長民傳に、歎曰、貧賤常思富貴、富貴必賤、危機、今日思爲三丹徒、布衣豈可得也。【一〇】華亭鶴。晉書に、陸機受誅歎曰、華亭鶴唳、豈可復聞乎。東坡の自注に、涇之兄汴、亦有文死矣。本集、與劉巨濟書に、賢兄、文格奇拔、不幸早世、見其手書舊文、不覺垂涕云云。

【題義】宿州で、劉涇の詩に次韻したのである。東坡の自注に據ると、涇の兄汴、亦、文あつて死す。とあるが、詩中に、富貴危機の語あり、又、華亭の鶴、すなはち陸機が刑に臨むことを引いて居る所を見れば、其の死を得ざるものやうである。紀昀は此詩を評して沈著と言つて居る。

【詩意】我は歸休して、遊賞の樂を爲さうとし、曾點が瑟を鼓することも、だんだん希となつた。併し、春服既に成る暮春、沂水舞雩の遊をなすのは、そもそも何れの日であらうか。多情の我は、愁に縁つて白髮三千丈となる。又、我は散木と同じである、無用の爲に人に採伐もされないから、蒼い皮は、四十圍にもあまり、天に參すること二千尺の高さに及ぶ。晩年になつてから、文章は本、小技であつて、道に於て未だ尊しとしない道理も解つた。又、早くから、富貴の必ず危機を踐むものであるといふことにも、氣が付いたのである。今、君の爲に涕の垂れる譯を君知れりや否や。それは晉の陸機が誅を受けし際、華亭の鶴唳、豈復、聞くべけんやといつた怨言である。陸機が將に殺されようとするとき、昔日、華亭で、鶴の聲を聽いて樂んだことを思ひ起して歎息したのである。劉涇君に就いても

此事が思はれる。千古華亭の鶴は自ら飛ぶも、劉涇の兄汴は、最早、此世には居ないのである。

和李邦直沂山祈雨有應

李邦直沂山に雨を祈りて應あるに和す

高田生黃埃。

高田は黃埃を生じ、

下田生蒼耳。

下田は蒼耳を生ず。

蒼耳亦已無。

蒼耳すら亦已に無し、

更問麥有幾。

更に問はんや麥幾あると。

蛟龍睡足亦解慙。

蛟龍睡り足りて亦慙づることを解す、

二麥枯時雨如洗。

二麥枯るる時雨洗ふが如し。

不知雨從何處來。

知らず雨は何れの處よりか來る、

但聞呂梁百步聲。

但聞く呂梁百步聲雷の如くなるを。

如雷。

試上城南望城北。

試に城南に上つて城北を望めば、

際天菽粟青成堆。

天に際する菽粟青うして堆を成す。

【字解】一、李邦直、李清臣、

字は邦直、進士に擧げらる。神宗、

召して兩朝國史編修官となす。【二】

沂山、周禮に、青州、其山鎮曰沂

山。元和郡縣志に、沂山、在沂水縣

北一百二十里云云。【三】高田、

漢書、溝洫志に、高田五倍、下田十

倍。【四】生黃埃、杜子美の詩に、

雨降不濡物、良田起黃埃。白樂

天、長恨歌に、黃埃散漫風蕭索。【五】

蒼耳、本草に、蒼耳、一名胡葉、一

名地葵、亦名卷耳、猪耳。【六】二

麥、大麥、小麥。宋書、孝武帝紀に、

苗稼多傷、今二麥未晚云云。【七】

呂梁百步、徐州二洪をいふ。莒縣に

石梁あり、之を呂梁といふ。今は百

飢火燒腸作牛吼。飢火腸を焼いて牛吼を作す、
 不知待得秋成否。知らず秋成を待ち得んや否や。
 半年不雨坐龍慵。半年雨らざるは龍の慵るに坐す、
 共怨天公不怨龍。共に天公を怨んで龍を怨まず。
 今朝一雨聊自贖。今朝一雨聊か自ら贖ふ、
 龍神社鬼各言功。龍神社鬼各功を言ふ。
 無功日盜太倉穀。功なくして日に盜む太倉の穀、
 嗟我與龍同此責。嗟す我と龍と此責を同うす。
 勸農使者不汝容。勸農の使者汝を容さず、
 因君作詩先自劾。君に因つて詩を作り先づ自ら劾す。

【一】自贖 唐李邕傳に、請成邊自贖。【二】龍神 法華經に見ゆ。梵名を那伽といふ。【三】社鬼 漢王莽傳に、社鬼記之。【四】言功 蕭何傳に、漢五年、論功行封、羣臣爭功、歲餘不決。【五】無功 毛詩、魏風、伐檀に、在位貪鄙、無功而受祿。【六】勸農使者 時に邦直は京東提刑であつた。職官分紀に、天禧四年、改諸路提刑爲勸農使。【七】作詩先自劾 王注に、章元成作詩自劾責。韓退之の詩に、家請官供不報答、無異鼠雀偷太倉、行袖手服付丞相、不待彈劾還耕桑。これ公の意である。【題義】熙寧十年六月、旱の時、李清臣が沂山に雨を祈つて、應があつたから、詩を作つて東坡に寄

歩洪といひ、徐州彭城の東に在る。
 莊子、達生篇に、孔子觀於吕梁、縣
 水三十仞、流沫四十里。【八】城南
 望城北 杜子美、哀江頭の詩に、
 黃昏胡騎滿瀟湘、欲往城南忘城北。
 北。【九】際天 莊子刻意篇に、上
 際於天、下蟠於地。柳子厚の詩に、
 故園千里無山河、夢世際天搖青
 波。【一〇】飢火燒腸 白樂天の詩
 に、飢火燒其腸。【一一】作牛吼
 沈約、禪林寺尼淨秀行狀に、忽聞空
 中有聲、狀如牛吼。【一二】待得
 秋成 莊子、庚桑楚篇に、春氣發而
 百草生、正得秋而萬實成。杜牧之
 の雲谿館詩に、萬家相慶喜秋成。

せた。此詩は之に和したのである。清臣は此時、未だ徐に至らなかつたのである。李邦直の詩は、南
 山高峻層、北山亦嶒嶒、坐看兩山雲出沒、雲行如驅蹄若呼、始覺山中有靈物、鬱鬱其焚蘭、單單其
 擊鼓、祝屢祝巫屢舞、我民無罪神所憐、一夜雷風三尺雨、嶺木兮蒼蒼、谿水兮泱泱、雲散諸峰互明
 滅、東阡西陌農事忙、廟閉山空音響絕といふのである。烏臺詩案に、此詩言因龍神慵懶不行雨、却
 使人怨天公、以譏執政大臣不任職、不能燮理陰陽、却使人怨天子、以天公比天子、以龍
 神、社鬼、比執政大臣及百執事、軾自言、無功竊祿、與龍無異云云と。紀昀いふ、憤語、却極奇
 矯、以借比故、不甚覺其評と。

【詩意】泉涸れ、苗焦げて、高田は黄塵を起し、下田も蒼耳(一名地葵)を生ずる。早は日に甚だし
 くなつて、其の蒼耳さへも無くしてしまつた。今は麥がどれ程あるかなどの問題ではない。直に龍を
 水廟の前に迎へて此の旱を濟はなければならぬ。蛟龍も定めし睡足りて、亦慙を解したと見え、大
 麥、小麥の枯れた今日此頃、大雨は洗ふが如くに降り出した。知らず雨は一體何處から來たのか。呂
 梁百歩の地、ただ沛然として聲が雷の如くであるを聞くのみ。試みに城南に上つて城北を望むと、千
 里山河なく、菽も粟も青靑として堆をなして居る。併し、所謂飢火腸を焼いて、牛吼を作して居る、
 今日であるから、果して秋の成るまでを待ち得るかどうか、まことに危まれる。一體、半年も雨がな
 かつたのは、全く龍の慵りである。(執政大臣及び百職を指す)然るを天公(天子)を怨んで、怠けた
 龍を怨まないのは解らない話である。今朝も一雨があつたから、これで少しは罪滅しともなるであら

うと思ふ。神龍・社鬼各其の功を言つて居るが、實はどちらも功がなくて、日に太倉の穀を盗んで居る。ああかく言ふ我も亦、龍と此の責を同うして居る。京東提刑（勸農使）である李邦直は、決して汝を容さない。それで君の詩に因つて此詩を作り、功なくして祿を竊む我は、龍と少しも異なることなしと自らを効したのである。（査慎行いふ、一轉入題、然結四句、却是餘波作收、非本題正意也と。）

徐州送交代仲達少卿

徐州、交代仲達少卿を送る

此身無用且東來。此身は無用且東より來る、

賴有江山慰不才。賴に江山あつて不才を慰む。

舊尹未嫌衰廢久。舊尹未だ嫌はず衰廢の久しきを、

清樽猶許再三開。清樽猶ほ許す再三開くを。

滿城遺愛知誰繼。滿城遺愛知る誰か繼がん、

極目扁舟挽不回。極目扁舟挽けども回らず。

歸去青雲還記否。歸去青雲還た記する否や、

交遊勝絕古城隈。交遊勝絶古城の隈。

【字解】 一 徐州 古、九州の

一 爾雅に、濟東曰徐州。今の銅山

縣は、其の舊治。 二 交代 官吏

の任期が満ちて他の人と代る。漢書、

蓋寬饒傳に、及三歲盡交代、自請願

復留。 三 東來 詩、颶風、東山

に、我來自東、零雨其濛。 四 賴 さいはひと訓す。賴遇無心雲。 賴逢三征路盡。賴逢隣女曾相識。賴是春風不三秋。など用例多し。 五 江山慰不才 唐書に、張說謫岳州。

詩益凄惋、人謂得江山助云。莊子、人間世篇に、是不材之木也。 六 衰廢 陸游の文に、性資冥頑、問學衰廢。 七 清樽 路實王之詩に、還愁三徑晚、獨對一清樽、樽は樽、同じ。 八 遺愛 仁愛が後世に遺留する意。左傳、昭公二十一年に、及三子產卒、仲尼聞之、出涕曰、古之遺愛也。 九 誰繼 同じく左傳、襄公三十年に、子產而死、誰其嗣之。 一〇 扁舟 史記、貨殖傳に、乃乘扁舟、浮于江湖。 一一 挽不回 晉、鄧攸傳に、攸爲吳郡、刑政清明、去郡不受一錢、百姓數千人、留牽攸船、不得進、攸乃少停、夜中發去、吳人歌之曰、統鼓を打つ聲如打五鼓、雞鳴天欲曙、鄧侯挽不留、謝令推不去。 一二 青雲 史記伯夷傳に、閭巷之人、欲砥行立名、非附青雲之士、惡能施於後世哉。 一三 交遊 史記に、朋友交遊、久不相見、卒然相觀、歡然道故。 一四 勝絶 白樂天の詩に、觸目勝絶不可名。東坡の寒溪詩に、相將踏勝絶、更裏三月糗。 一五 隈 くら。爾雅に、厓内爲隈、外爲隈。

【題義】 此詩は熙寧十年四月の作である。王文誥いふ、詩題作仲達少卿、樂城集有徐州送江少卿詩、并有公來初無事、豐歲多牟麥、鈴閣度清風、芳樽對佳客一句、信前守爲江仲達、無疑也、査注引題跋之詩人戴仲達、以擬之、此元祐閒事、毫無根據云云と。

【詩意】 此身は世に用なきもの、且つ東方から來たのであるが、幸に江山が、我が不才を慰めてくれる。又、前の官であつた江仲達も、此身の衰廢久しいことをも構はずに歓迎してくれ、猶ほ清樽を再三回も開かれた。さて徐州に於ける仲達が遺愛は、一體、誰が繼ぐであらう。晉の鄧攸は吳郡を爲めて、刑政が清明であつた。其の郡を去るとき、一錢をも受けないので、百姓數千人相聚つて、攸が船を留め牽いた。攸は爲に進むことが出来なく、少しく停つて、夜中に出發したといふことである。江仲達も亦挽けども回らず、扁舟に棹して去る。目を極めて其舟の往くのを見送る。歸山の後は、果して青雲

の志また念頭に存するや否や。全く世外の人となるであらう。思ふに、故城の隈で、久しく逢はなかつた故舊と歡然として昔を談るに違ひない。そして、相將ゐて勝絶の地を踏むことも想像できる。

和孔密州五絶

孔密州に和する五絶

見邸家園留題

邸家園の留題を見る

大旆傳聞載酒過。大旆傳へ聞く酒を載せて過ぐるを、

小詩未忍著磚磨。小詩未だ磚磨を著くるに忍びず。

陽關三疊君須祕。陽關三疊君須らく祕すべし、

除却膠西不解歌。膠西を除却して歌ふを解せず。

【字解】(一) 孔密州 東坡に代

つて高密の守となつた孔宗翰。字は

周翰、道輔の子、陝・揚・洪・兗、諸州

を歴、皆治を以て聞ゆ。哲宗の時、

刑部侍郎に累遷し、寶文閣待制を以

て徐州に知となる。未だ拜せずして

卒す。(二) 邸家園 漢、上郡太守邸柱の家園。(三) 大旆 種種の色の帛で造つた旗。唐、沈傳師の詩に、大旆璫錯(衆く盛な貌)

輝(松門)。(四) 著磚磨 傳燈錄、南岳讓師曰、磨磚若不成鏡、坐禪豈得成佛。(五) 陽關三疊 送別の詩、此詩を唱ふるに、後

の三句を二度重ねて唱ふ。之を三疊といふ。陽關は、今の甘肅省、安正州、敦煌縣の西南に在る。王注に、漢於燉煌龍勒縣置三陽關、

後人因以三陽關名曲。東坡詩話に、舊傳三陽關三疊、然今世歌者、每句再疊而已、若通三一首言之、又是四疊、皆非是、或每句三唱

以應三疊之說、則叢然無復節奏、余在三密州、有文勛長官、以事至密、自云、得古本陽關、其聲宛轉淒斷、不類向之所聞、每句

皆再唱而第一句不疊、乃知古本三疊蓋如此云云と。除却膠西不解歌は、文長官が傳ふる所の聲か。東坡の自注に、來詩有三渭城之

句と。(六) 膠西 漢、膠西王の國。今の山東膠縣高密等の地。

【題義】此詩は熙寧十年四月の作である。密州の孔宗翰が邸家園を見て留題した諸作に和したのである。王文誥いふ、題謂見孔宗翰所留題也、合注謂三公留題誤云云と。

【詩意】孔宗翰は高密の守となつたので、大旆を推し立てて、酒を載せて過ぎ行くといふことを傳へ聞いた。磨磚若し鏡を成さずば、坐禪豈佛を成すを得んやといつた南岳讓師の言葉を曾て聞いたが、我が詩は、其の磚磨を著けるに忍びない。又、孔密州が留題の詩中に渭城の句があるが、陽關三疊の詩は、其の聲が宛轉淒斷であるから、君須らく祕して置かるべし。そして毎句皆再唱して、第一句を疊まないときは、肝心な、膠西を除却するので、歌ふ所の意味が解らなくなるであらう。

【餘録】唐、王維の送元二使安西の詩に、渭城朝雨裊輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。渭城は咸陽の東北にある。東坡の詩に、佳人亦何念、淒斷陽關曲。陸游の詩に、倦遊短髮無多綠、生怕尊前唱渭陽。又、東坡の中秋月の詩に、暮雲收盡溢清寒、銀漢無聲轉玉盤、此生此夜不長好、明月明年何處看とある。其の查注に、風月堂詩話、東坡中秋詩、紹聖(宋、哲宗年號)元年、自題其後云、予十八年前中秋、與子由觀月彭城、作此詩、以陽關歌之と。江藩いふ、陽關詞、古人但論三疊、不論聲調、以王維一首、定此詞平仄、此詩與摩詰、毫髮不爽と。

春歩西園見寄

春西園を歩いて寄せらる

古今體詩 和孔密州五絶・見邸家園留題・春歩西園見寄

歲歲開園成故事。歲歲園を開いて故事を成し、

年年行樂不辜春。年年の行樂春に辜かず。

今年太守尤難繼。今年の太守尤も繼ぎ難し、

慈愛聰明惠利人。慈愛聰明人を惠利す。

負と熟す。そむく意。白樂天の詩に、猶有一般辜負事、不將歌舞管絃一來。【四】聰明惠利人。前漢、馮奉世の傳に、奉世子野王與弟立相代爲上郡太守、(立、五原太守、徙上郡)治行略相似、吏民歌之曰、大馮君小馮君、兄弟繼踵相因循、聰明賢知惠吏、政如魯衛、德化鈞、周公康叔猶三君。後漢、蔡邕傳に、當以惠利爲績。

【詩意】州の太守は、毎歲二月、園を開いて父老に酒食を饗するのが例となつて居る。人生は行樂のみ、行樂は須らく春に及ぶべきである。孔太守は年年春時の行樂に負かなかつたが、今年太守となつた我は、逆も前太守に及ばない。尤も繼ぎ難い所は、慈愛聰明とそして人を惠利することである。前漢の馮奉世の子野王は、弟立と相代つて上郡の太守となり、治行も略相似たので、吏民は之を歌つて、大馮君、小馮君、兄弟踵を繼いで相因循、聰明賢知吏民を惠すと云つたさうである。ここは此故事に據つたものである。併し紀昀は、此詩の結句を評して、不_レ成_二句法_一と言つた。

東欄梨花

東欄の梨花

梨花淡白柳深青。梨花は淡白にして柳は深青、

柳絮飛時花滿城。柳絮飛ぶ時花城に滿つ。

惆悵東欄二株雪。惆悵す東欄二株の雪、

人生看得幾清明。人生看得るは幾清明。

行長安二月花滿城。柳絮を添へるも、亦、一時の景物である。【三】惆悵。痛ましく悲し。韓退之の詩に、走馬西城惆悵歸、不_レ忍千株雪相映。李白の詩に、梨花白雪香。【四】二株雪。一本に、一株雪に作る。梨花を雪に比していふ。韓退之の聞梨花發詩に、聞道鄆西千樹雪。【五】清明。寒食の節後、兩日を清明の節といふ。鄆中記に、并州俗、冬至後百五日、爲_二介子推_一斷_レ火冷食、謂_二之寒食_一。

【詩意】梨花は淡白に、柳は深青で、春色は正に酣である。柳の絮の飛ぶ時分は、花も散つて城中に滿ち、一年の春は盡きる。今日、東欄に雪のやうに咲いて居る二株の梨花の花を看ても、人生果して幾度か此の清明に逢ひ得る。念うて茲に到ると、痛み悲しまざるを得ない。(梨花を賦し、併せて柳絮を言つたのは、未だ害としない。柳を以て梨花の陪容としたもので、詩人には往往此格があるからである。轉句に至り、二株雪を以て本題の梨花を回顧し、感慨を以て、筆を收めた。此の詩を一誦すると、人をして歲月の速かに去つて、飄忽たるの感あらしめると古人も言つて居る。此詩、梨花盛に開くをいへば、寒食清明の際である。故に東坡また詩ありていふ、共藉梨花作_二寒食_一と。)

【字解】(一)柳絮。柳の綿。晉書に、謝安、嘗内集、俄而雪下、安曰、何所似也、安兄子郎曰、撒_二鹽_一空中、差可_レ擬、王凝之妻謝道韞曰、未_レ若_二柳絮因_レ風起_一。前にも出つ。

(二)花滿城。劉禹錫の詩に、秦姝

韓退之の詩に、走馬西城惆悵歸、

不_レ忍千株雪相映。李白の詩に、梨花白雪香。

【四】二株雪。一本に、一株雪に作る。梨花を雪に比していふ。韓退之の聞梨花發詩

に、聞道鄆西千樹雪。【五】清明。寒食の節後、兩日を清明の節といふ。鄆中記に、并州俗、冬至後百五日、爲_二介子推_一斷_レ火冷食、謂_二之寒食_一。

【餘錄】宋の洪邁の容齋隨筆に、張文潛好吟東坡梨花絕句、每吟一過、必擊節歎不能已、文潛蓋有省於此云とある。唐宋詩醇に、濃至之情、偶於所見發露、絕句中、幾與劉夢得爭衡とある。志林（一名東坡手澤）に據るに、東坡、彭城の守と作つたとき、齊州の李公擇に過ぎり、席上、此詩を作つたといふことである。

和流杯石上草書小詩 流杯石上草書の小詩に和す

蜂腰鶴膝嘲希逸 蜂腰鶴膝希逸を嘲る、

春蚓秋蛇病子雲 春蚓秋蛇子雲を病む。

醉裏自書醒自笑 醉裏自ら書し醒めて自ら笑ふ、

如今二絶更逢君 如今二絶更に君に逢ふ。

【字解】一 流杯 流觴と同じ。

曲水の宴にて流す杯。杜牧の詩に

且環流水醉流杯。隋煬帝は流杯

殿を造る、宋にも亦之あり。

二 蜂腰鶴膝 梁、沈約の詩格八病の一、

一説に、全句皆、濁りて、中の一字

清めるをいふ。全句、皆、清みて中の一字濁るを鶴膝といふの對である。南史、齊、陸厥傳に、永明時、盛爲文章、吳興沈約、陳郡謝朓、琅邪王融、以氣類相推轂、汝南周顒善識聲韻、約等文、皆用四聲制韻、有平頭上尾蜂腰鶴膝之病、世呼爲永明體。（五字之中、音韻悉異、兩句之内、角徵不レ同。）三 嘲希逸 又、謝莊、字希逸、王玄謨問、何者爲雙聲疊韻、答曰、玄瓠爲雙聲、瓠爲三疊韻。四 春蚓秋蛇 晉、王羲之傳に、蕭子雲、近出、擅名江表、然僅得成書、無丈夫之氣、行行若紫、春蚓、字字如縮、秋地。五 醉裏自書云云 唐の張旭、醉ふ毎に、或は頭を以て墨を濡して書す。既に醒め、自ら視て、以爲らく神にして復、得べからずと。六 二絶 南史、顧野王傳に、宣城王爲揚州刺史、野王及王褒並爲賓客、王於東府起齋、令野王畫古賢、王褒書。

レ贊、時稱爲二絶。

【詩意】沈約の詩格八病の中に、蜂腰といふがあり鶴膝といふがある。五字の中、音韻が悉く異り、兩句の内、角、徵（五音の内）が同じでない。世に呼んで永明體といふ。（永明は齊武帝の年號である。）謝希逸の詩は永明體の弊があるので、蜂腰鶴膝と嘲けたのである。又、蕭子雲は一時、書名を江表に擅にしたが、惜しいかな丈夫の氣がない。行行、春蚓を紫ふが如く、字字、秋蛇を縮ふがやうであつた。石上の草書と小詩とを見て、此等の事が思ひ出される。張旭は醉筆に妙を得たさうであるが、君も亦、酔うて自ら書し、醒めて自ら笑つて居られる。昔、宣城王が揚州を爲めたとき、書齋を起したことがある。王は顧野王をして古賢を畫かしめ、王褒をして贊を書かせた。時に二絶と稱されたが、今、君の書かれた草書も、作られた小詩も、まことに逸品で、亦、二絶と稱すべきである。

堂後白牡丹 堂後の白牡丹

城西千葉豈不好 城西の千葉豈好からざらんや、

笑舞春風醉臉丹 笑つて春風に舞つて醉臉丹し。

何似後堂冰玉潔 何ぞ似かん後堂冰玉潔うして、

遊蜂非意不相干 遊蜂意あらずして相干らざるに。

【字解】一 城西千葉 牡丹に

城西千葉紅の名あり。

二 醉臉 臉は目の下、頬の上。同じく東坡の詩

に、醉臉輕勻觀眼霞。陸游の詩に、

驛亭沃酒醉臉醺、長笛腰鼓雜巴歌。

三 遊蜂 韓退之が、戲題牡丹詩

古今體詩 和孔密州五絶 和流杯石上草書小詩 堂後白牡丹

に、雙燕無機還拂掠、遊蜂多思正經營。【四】非意不相干一晉衛玠が傳に、嘗謂、人有不及、可レ以情恕、非意相干、可レ以理道、故終身不見喜怒之容。

【詩意】城西千葉の名ある牡丹は、光色が艶媚（なまめかしく美しい）で笑つて春風に舞ひ、酔うた目許が丹いので、（牡丹の紅色を説く）之を愛するものが多い。併し白牡丹の冰清玉潔であつて、後堂幽獨の地に處り、截然として游蜂の近くべからざるには及ばない。（彼を抑へて、此を揚ぐ。本集の自注に、孔密州頗有聲妓、而客無見者、故東坡作此詩譏之とある。紀昀いふ、非自注、則此詩不可解、故解詩最難と。）

【字解】【一】趙郎中 趙成伯をいふ。前にも出づ。東坡の自注に、趙以徐妓不レ如三東武、詩中見戲云、只有當時燕子樓。【二】燕子人亡云 白樂天の燕子樓詩序に、徐州故尚書張建封愛妓曰盼盼、張既没、第中有小樓一名燕子、盼盼念舊愛而不肯嫁、居是樓十餘年、幽獨塊然。【三】捲簾 捲一に卷に作る。杜牧之の贈別の詩に、春風十里揚州夢、卷上珠簾總不レ如。揚州は今の江蘇省の地。【四】西行未必云云 查注に、言赴河中、未必便勝徐州也。【五】風十里揚州夢、卷上珠簾總不レ如。揚州は今の江蘇省の地。【四】西行未必云云 查注に、言赴河中、未必便勝徐州也。【五】

和趙郎中見戲二首 趙郎中戲れらるるに和す 二首

燕子人亡三百秋。燕子人亡して三百秋、捲簾那復似揚州。簾を捲くも那ぞ復揚州に似ん。西行未必能勝此。西行未必しも能く此に勝らず、空唱崔徽上白樓。空しく崔徽を唱へて白樓に上る。

【題義】此詩も熙寧十年四月の作。趙成伯の戲れて作つた詩に和したのである。紀昀いふ、頗有風致と。空唱崔徽云云 元微之の崔徽傳に、崔徽、蒲女也、裴敬中、使蒲、徽一見動情、不レ能忍、敬中使回、徽以不レ得從爲恨、久之成疾、寫真、以寄裴、且曰、崔徽一旦不レ及三卷中人、矣、微之爲作崔徽歌、以鼓其事。【六】白樓 河中府城の西北に在る。三國、呂布傳に、魏太祖圍沛、布登白門樓、圍急、乃下降。酈道元の水經注に、南門謂之白門。

【詩意】昔、徐州の故尚書張建封に盼盼といふ愛妓があつた。張が亡くなつても、盼盼は舊愛を念うて、他に縁附かなかつた。第中の燕子樓に居つて、十餘年も幽獨をつづけたといふことである。燕子樓の人が亡くなつて三百年、杜牧之が所謂春風十里揚州の夢、珠簾を捲き上げるも、ありし昔には似ない。たとひ、西の方、河中に赴いた所で、未だ必ずしもこの徐州に勝らないであらうから、空しく元微之の崔徽歌でも唱へて、白樓に上ることにしよう。（昔、裴敬中は、河中に使ひし、崔徽と相從ふこと累月であつた。敬中が罷め歸るに及んで、從ふことが出来ないで、情懷怨抑、遂に疾を成した。崔は眞を寫して、裴に寄せたのである。元微之の此事を敘したが、即ち崔徽歌である。）

我擊藤牀君唱歌。我は藤牀を撃ち君は歌を唱ふ、明年六十奈君何。明年六十君を奈何。

古今體詩 和趙郎中見戲二首

【字解】【一】藤牀 白樂天の詩に、六尺白藤牀、一莖青竹杖。【二】明年六十 東坡の自注に、趙每醉歌